
ガールズトークRPG エピソード2/散歩するピラミッドと黄金の爪垢

加茂正路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガールズトークRPG エピソード2／散歩するピラミッドと黄

金の爪垢

【Zコード】

Z1913X

【作者名】

加茂正路

【あらすじ】

魔王を倒したのに、今度は『大魔王』を倒すことになつたわたし達に最大の敵が立ちはだかる！ それは『マネー』だ。城が全壊したぐらいでビタ一セント出してくれなかつた王様を恨みつつ、わたし達一行はギャンブルの聖地と称される《ラスゼガス》で軍資金を稼ごうと画策する。いや、ギャンブルはやめとけつて……。

?・三十秒で分かる前回のあらすじ

タイトル 『わたし勇者』

著 勇者

わたし

勇者

体重?

よんじゅ……ひみつ!

彼女?

いえ
女ですから

でも

『おとこ』ですから
みたいな

魔王を倒すため
旅に出了

風の精霊
エロかつた

ので
フルボッコにしてやつたり!

嵐の精霊王

一度は敗北した

けど

ペシャンコにしてやつたり!
みたいな

魔王

倒しましたとも

戦士と

僧侶ちゃんと

マホツカと

みんなで力を合わせて

みたいな

そして世界は
平和になった

おしまい

「こ・ん・な・ん・で分かるかー！」

「そんなん……バカな……ツ！？」

ガタ、ゴトと不規則に揺れる車内にて、マホツカが落雷の「」とく

憤慨する。

わたし達はカリメア大陸横断鉄道の寝台車両の一室にいた。二等寝台の四人部屋で、サービスは一切なし。まあ、贅沢はラスボスだからね。

目的地の《ラスゼガス》まで時間があるので、マホツカの提案で、魔王を倒すまでの経緯を小説として活字に起こすことにしてみたのだ。

さつそくわたしが、トロールもタップダンスをするであろう躍動した文章を書き上げた。のだけど、編集長マホツカに怒られた。なぜだ？

「何堂々とパクってんのよ！ しかもあんな駄文を…」

「ええー、読みやすくていいじゃん」

『ぼくは彼氏』

数年前に一世を風靡した恋愛小説。『男の子の

全てがここに濃縮してある！ みたいな』なキヤツチフレーズで、シンヨーク中の女の子が、男子の気持ちを理解するために読み耽つた名（迷？）作だ。その奇抜な文体を真似してみたんだけど、ちょっと地の文が少なくて説明不足だつたかな？

「少ないじゃなくて『皆無』でしょーが！」

むむむ、でも模倣は独創の母つて言つし。

「はあ、勇者も意外とミーハーねえ」

そりゃまあ、一応『女子』ですから（キリッ！）。

「ん……ん？ 何しているんですか、お一人とも？」

「あ、ごめん僧侶ちゃん。起こしちゃつた？」

人生初の寝台列車に浮かれて夜更かししてしまった昨晩。徹夜など縁のない僧侶ちゃんはすっかり熟睡中だったのに起こしてしまった。あ、僧侶ちゃんの寝顔は激かわいかつたな。けれど寝癖をつけて眠りまなこでとろーんとする姿はもつとヤバイ！ 発狂して虎になりそう！

「まったく、この駄作はゴミ箱に直行ね。メモリの無駄だし、ポチつとな

「うそつ、消しちゃうのー」

マホツカはアルフォンの『消去』と表示されたボタンを無情にも押した。わたしの傑作が一瞬にして 灰をスキップして 墓場逝きとなつた。鬼編集長だ、血も涙もない。

「ううう、せつかく書いたのに……」

「あんな昔流^は行つたのを今時書いたら、苦笑されるか不燃物扱いさ

れるかのどっちかなのよ。次はオリジナルの文体で書きなさい」

そんなこと言われましても、わたしに文才なんてないし。

それにあのタツチしながら文字を書くのってすごく疲れるんですけど。間違えて別の文字が入力されるのがほんとイライラしまくつた。

僧侶ちゃんは髪を梳^すき、マホツカがアルフォンで新着ニュースを

読み、わたしは次回作のネタ出しを考えていると、突如窓の外が明るくなつた。

「うわあ、地平線だ」

州境の長いトンネルを抜けると 砂漠だつた。獸一匹棲息していない極暑の地である。

太陽が燦燦々と輝いていた。怒つた顔して突進してきそうな雰囲気である。

「もう少しで到着するみたいだな」

スライド式のドアが開くと、朝の鍛錬に出かけていた戦士が首にタオルを巻いた格好で戻ってきた。狭い列車のどに鍛錬する場所があつたの？

『ヌバダシティ』の最大都市であるラスゼガスは、砂漠のど真ん中に築かれたオアシスの街である。その昔、『ゴールドゴーレム』が大量繁殖した時代に、前線基地として重宝されたのが起源だつた。今では世界有数のカジノの都として、世界中から観光客や一攫千金を狙つたギブソンさんと、ブラックジャックで一山当てよりとする暗記の得意な学生達が集つ。

「どうとう着くんだな」

「そうですね。ギャンブラーの聖地に」

「ふふん、キャビアとドンペリ用意して待つてなさいよ」

みんなして眼光鋭く街がある方向を窓越しに眺めている。何か怖いんですけど……。

それもそのはず、ゼガスでの目的は観光ではなく、さらに精霊や精霊王とかましてや大魔王とかとは全く関係のない用事なのだ。

すなわち『金』である。

大魔王討伐のため、世界中を旅するための資金をカジノで稼ぐために訪れたのだ。

お城がほぼ全壊したぐらいでビターセント王様が出してくれなかつたから、こんな寄り道をわざわざする羽目になつたのである。

「まあ、これも旅の良い思い出になるかな」

しかし、ユウコにも嫌な予感しかしないのはなぜだ？、「やつてなぜだ？」……。

「デツか！！」

ホワイトストーンのビルディングは、青と緑がオアシスを連想させる噴水広場の南側に建っていた。飛沫^{ひまつ}を上げる噴水よりも、その最上階は遙かに高く、横の長さはクラーケンの魚（？）拓^{ひら}といい勝負ができるそうである。

赤い壁ならぬ白い壁が、わたし達を見下ろすように待ち構えていたのだった。

ラスゼガスに列車が到着した頃には、わたしの原稿はボツの山を築き……じゃなくって、お昼近くになっていたので、まずは適当な飲食店で腹ごしらえすることにした。

東西豊富なバリエーションのメニューが揃う瀟洒^{しゃうりょう}なレストランで、わたしと僧侶ちゃんはスペゲッティを、戦士とマホツカはライス物を注文した。観光客で賑わう街だけあって、バブリーなぐらいのお値段、ぱつたくり……じゃなくって、外来客の舌を満足させるすばらしい味だった。

昼食ついでに、どこのカジノを今宵の戦場とするか話し合つことにした。わたしと戦士は知識ゼロ、僧侶ちゃんはどこか遠慮がちな姿勢だったので、結局はマホツカが提案したゼガスで一番力モ料理が美味しいと有名な……じゃなくって、景気の良い店となつた。

満場一致で目的のカジノへ下見に行こうと地図を確認しようとしたとき、僧侶ちゃんが場所を知っている（ホワイ？）と言つたので、こつじて最短ルートでマネーコロシアムへと赴いたわけなんですけど、ど、

「これがカジノなのか……。シンヨーク城以上の大きさだな

「そうですね。私も初めて訪れましたけど、これほどとは

「いーじゃんいーじゃん。ワタシたちを客と迎えるに相応しい店ね

とにかく圧倒される巨大さだった。さすがは百店舗近くカジノ場

があるゼガスで、堂々のナンバーワンを勝ち取つてゐる店とのことである。

だがしかし、それだけこの店でお金をスッた人がたくさんいると、ということになる。ビルの建材には、きっと夢迫い人の悲嘆と絶望と怨念が含まれているに違いない。世の中とは真に無情である。ギオンショージャの鐘の音が聞こえてきそうだ、字は違つけど。

さて、わたし達は店のエントランス前にいるわけだけど、まだ入店はしない。ここ《コルツネオ》は、二十四時間営業のお店なんだけど、正装もしくは正装に近い服を着用しなければ門前払いされると僧侶ちゃんの解説。エントランスをラフな格好の人が頻繁に出入りしているが、それはこのお店がホテルを兼業しているから（さらにはテナントでレストランが一軒入つていて）との僧侶ちゃんの講説。これだけ高くて広い建物の地上部分は、なんとホテルとレストランのスペースで、本業のカジノ場は地下にあるという僧侶ちゃんの熱のこもつた力説には一つの意味で驚いた。僧侶ちゃん詳しいね、まるで取説のようだ。

ところで、わたし達は四人揃つて未成年なのだけど、ギャンブルの街であるゼガスには未成年入店禁止という甘つちよろいルールは存在しない。ので然るべき服装で来店すれば、初等学校に通うハナタレ小僧でもスロットマシンを回せるのだ。

それに加えて、ヌバタシティの州律はお金に関してかなりユルイため、気を抜くとスリに遭つたわけでもないのに財布が空になつているというから恐ろしい。武器屋防具屋などは、昼と夜と店員の気分で値段が変動するらしい。

全く持つて、何につけても油断できない街である。

「ついに私の運を鍛えるべき時がきたのか……」

「ティーラーさんやウエイトレスさんのチップを用意しておかない」と……

「やっぱブラックジャックが一番儲けやすいから。それとも……」

みんな思考がダダ漏れしているけど大丈夫かな？

しつかしカジノですか。母の話が本当なら、前勇者であり我が不肖の父は魔王討伐の旅で貯めた資金を全てカジノに寄付しているからね。そのリベンジとなるか、はたまたミイラ取りがゾンビになるか。

それはそうと、

「いつまでも店の前にいたら邪魔になるから、とりあえず宿屋を探そつ」

正装に着替える必要もあるけど、寝る場所の確保も重要だ。またメリガンシティみたいに激安宿屋ないかな、全国展開してないですかね？

「ふふん、すでにいい宿屋見つけてあるわよ。しかもここからすぐ近く」

さつすがマホツカ先生。ありがたや、ありがたや。

と、わたし達が宿屋へ行こうと白い壁に背を向けたとき、黒塗りの客車が付いた二頭馬車が広場の前で止まつた。御者ぎよしゃがわざわざ客車のドアを開けると、白髪とスーツで固めた年配の人が出てきた。腰は曲がっていなかつたけど、鷹の金細工が取り付けられた杖をつき、傍らには黒服でガタイのいいボディガードを二人伴つていた。いかにもファーザーな感じの人だ、愛のテーマと太い葉巻がとても似合いそうである。

こういう人とはあまり関わらない方が人生を安穏と過ごすためのコツだと瞬時に脳から命令が下り、道を譲る（逃げる）ように移動した。んだけど、なぜかこの老人は足を止めると、こちらを見て……

「！」

え？ 何だろう、驚愕な表情で目を見開いているんですけど。

「おい、そこのお前達」

しゃがれた声は明らかにわたし達に向けられていた。

なぜだ？ わたしは今回何もしていませんよ！？

コツコツと杖で地面を叩きながら歩み寄ってきた老人は、臆する

わたしを ではなく、僧侶ちゃんを見つめていた。え、まさか口

「そこの僧侶、そのロザリオをどこで手に入れた！」

ロザリオ？ 僧侶ちゃんが装備している装飾品のことですか？ そういうえばいつも大事そうに首から提げているよね。名称も確か『形見』ってなつていたはず。

「え？ これですか？ これは……」

怪しいおじさんに睨み付けられても僧侶ちゃんは落ち着いていた。さすがは僧侶ちゃんだ、わたし達パーティーの中で一番大人かもしれない。

エルメ・クロスのロゴマークではなく正真正銘の銀製の十字架を手に乗せる僧侶ちゃんと、それを見極めようと顔を近づけるおじさんの中に、一番子供なマホツカが立ちふさがる。

「ちょっとちょっと、何よオッサン。何か用があるわけ？」

ずいっと、マホツカが不審なおじさんにガンを飛ばす。戦士も僧侶ちゃんを庇うように前へ一步出た。この二人がいれば、ジェットとシャークが繩張り争いを繰り広げる西側街も、大手を振つて闊歩できそうだ。

までまで、わたし一人だけ傍観しているわけにはいかない！ 僧侶ちゃんに難癖つけるような輩はたとえ神様であつても許さん！

ここはガツンと何か言わなければ

「ああのの、なな何か御用でしようか？」

つて滅茶苦茶ビビつてるよわたし！

やっぱ無理です。それにご老人は労わらないとね（言い訳）。

「…………ふん、まあいい」

わたし達の威圧に屈したのか、老人は興味を失くしたかのようだ、それだけ言い残すと、ボディガードを顎で促して立ち去つていった。何だつたのいつたい？ あれ、お店に入つていった。

「随分と不躾な態度だつたな」

「ふん、ただのボケたオッサンでしょ。いちいち相手してたら加齢

臭が感染するわ

相変わらず辛口評価のマホツカである。

とりあえず何も起きなくてよかつた。わたし達の旅もそんなに暇ではない（はず）、きっと一度会つこともないだろう。

「僧侶ちゃん大丈夫？」

「ええ、はい。何かされたわけではないですから」

神聖で敬虔な僧侶ちゃんに汚い指一本でも触れたら、わたしはそいつが泣くまでデコピンを止めない！

ああ、娘さんを持つお父さんの気持ちが分かつてきたかも。

そういうえば、わたしも一人娘のはずなんだけどなー。ま、いつか。

?・ドレスアップ！

なぜだ？

ああ、わたしはこのセリフを何回言わなくてはならないのか。
しかし、それでもこの状況で言わないでいられるのか？ 否、言
わなければならぬ！

「なぜだ！？」

まずはビシッと、アイロンの決まつたシワ一つない白のシャツ。
つぎにサラッと、手触りの良い上質な黒のベスト。

そしてシメッと、アクセントとして赤の蝶ネクタイ。

これで穴だらけの高級腕時計を装備すれば完璧に違ひない。

「よくお似合いですよ、お客様」

着替え室から出ると、店員さんがマーべラスな営業スマイルでお
出迎えしてくれた。

『旅立つ人の服』などというパチ物を脱ぎ捨て、男なら誰もが憧れ
るフォーマルスタイルとなつたわたし。店員さんもわたしの姿に思
わず魅了されたに違ひない…………つて、わたしは女なんんですけどー！

大きな姿身の前で改めて自分の身なりを確認する。肩幅なんて広
いわけじゃないんだから、別にそこまで似合つてないでしょ？ 髪
の毛はワックスでバリバリに固めちゃつてるし。もう何だよこれ、
大道芸人か？ チンドン屋か？

「いつてらつしゃいませ」

腰を四十五度に曲げる丁寧なお辞儀姿に見送られ、とりあえずわ
たしはみんなとの待ち合わせ場所へと急いだ。

ここはラスゼガスにあるレンタル服屋である。カジノ場へ入るた
めにはスーツかドレスじゃないと駄目なので、いつして店で借りる
ことにしたのだ。節約、節約！

そこで、どうしてわたしは男性の衣装を着ているのかといふと、
店内のドレスコーナーへ足を踏み入れた瞬間「お客様はあちらです

よ」と、強制的に紳士服コーナーへよつぴかれ、有無を述べる前に試着室へと放り込まれたのだ。

「まあ、」Jっちの方が微妙にレンタル料金[安]いから、いつか「節約、節約？」

それにこざとこうときに動きやすいからね。

と、無理やり自分を納得させる。旅立つて一週間ちよいであるが、だいぶ扱いに慣れてきてしまつている気がする。いいのか、これで？

「それにして、みんなまだかな？」

女の着替えと化粧は長いから巻かれろつて言つからね。わたしは髪を固めるてんぶるしただけで、化粧の類など一切しなかつた。簡素だな。

「何だ、まだ勇者だけか」

ガラス張りになつている壁から沈む夕日を眺めていると、戦士の声が掛けられた。

「えつ、戦……士？」

声の方を振り向くと（よくわたしつて分かつたよね）、そこにはベルベットレッドのイブニングドレスを着たあでやかな女性が、スラリと背筋を伸ばして立つていて。つややかな長い黒髪がアッジアントライストの香りを漂わせる。

「す、すごく綺麗……」

「え、あつ、そうか？ 何だか恥ずかしい気もするが」「

顔を紅潮させる戦士。いや、まじグッズですよ！

高身長に加えてヒールの高い銀革の靴。大人びた色香を醸し出す戦士は、とてもわたしと歳が一つしか違わないと思えない。周囲の男性客も、珍しい黒髪美女に目を奪われている。がしかーし。その理由はもう一つあった。

「何で剣を提げてるの？」

ドレスには決して組み合わさることのない鋼の剣が、剣帯と共に腰から吊つてあった。ミスマッチ過ぎるでしょ、それ。「こいつだけは手放せなくてな」

まあ、そんなに大事な一品なら文句は言えないけどさ……。

「たとえ街中でも丸腰は危険だ。念のためドレスの下には短剣を隠

してある「

どこのスバイだよ！

ああ、でもいいなー。わたしもこんな大人な女性になりたいな。
でもその前に『おとこ』をどーにかしないといけないんだけど、性

「……」めじ懲者。——「質問した二二二があるのだが

「ん?
なに

お待たせしました。勇者さん、戦士さん、

何か言いたくな軍士であつたが、着替えを済ませた僧侶をやぐために現れたので、口をつぐんだ。

「ドレスは久しぶりなので、少し手間取つてしまいました」

「似合ひでしょ？

「うげつ、ぐはつ、だ、大丈夫」

ヤバイ！
ヤバスクル！！
時間が、僧侶ちゃんのあまりの可愛

さはねたしの時間が奪われるか何を言っているのが分からぬがモ
しれないけど、それだけの破壊力がそこにはあつた。

いや、別に普通のフリルのドレスなんだけど、ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、チューブトップって、トップって！ ナマ足様もさいいつこーなんですが、ナマ鎖骨様がまじやべーょー、どうなつてんだよこの

光景！ 極楽浄土か！？ 龍宮城か！？

セミロングの金髪をツインテールのアップにしてあるのも、キャラ

ー！ もう駄目だ、目が、目がーーーー！

僧侶ちゃんをこの姿にドレスチョンジしてくれた店員さんは、そのあまりの神々しい御身に失神したに違いない。わたしももう無理、精神体が分離しそう。

「あとはマホツカだけか」

「そうみたいですね。どんな服を選んだのか楽しみです」マホツカのことだから店員さんそっちのけで、ギャー、ギャー騒いでいるのかもしれない。ちょっと様子でも見に行こうかな。

「あ、あの勇者さん。お訊ねしたいことがあるんですけど……」

「ん？ なに僧侶ちゃん？」あり、何かデジヤブだな。

「えっと、その服装なんんですけど

「おつまたせー」

何か言おうとした僧侶ちゃんだったけど、よつやくこしてマホツカが現れたため、静かに口をつぐんだ。

さて、露出を好まないマホツカが選ぶドレス姿とはいったい、「いやー、なかなかいい色のがなかつたのよねー」

？

「ん？」これはわたし。

「お？」これは戦士。

「え？」これは僧侶ちゃん。

「何よ、三人して同じ目しちゃって」

いや、だつてさ。

「どうしていつもと同じ格好なの？ ドレスは？」

凱旋将軍がいせんじょうぐんな様子で合流したマホツカは、いつもとんがり帽子にいつもの黒のローブ姿のままだった。いったい何に時間をかけたのだろう。化粧も特にしているわけでもなさそつだし。プレートのゲートを連れなかつたとか？

「はあ？ 同じじゃないでしょーが。よく見なさい、よ・く！」

いや、よく見ると言われましても。

同じじやん

「同じ……だな」

「同じ……ですね」

三人揃つて同じ感想。よつて同じだ。証・明・完・了！

たゞこれがからだ——口は口の色が違うらしい

六十九

な気がしないで居ないような気分だと思うから尚更だ。

「でもさ、何で黒色のローブなわけ？」

もしかして魔法使い（女性）は、黒いローブを常時装備していないと駄目なしきたりがあるとか？ でも昔、紙芝居で見た『魔女の宅配便』では紫色のローブの女の子もいたよね。あれは正直センスを疑つたけど。

「いいでしょ別に」「タジの曲なんだし、あくまでも『正装に近い服装』でいいんだから」「

まあ、カジノに入場できるのならそれでもいいけどさ。

しかし、なぜ同じ黒いローブなのに一番時間を要したんだろうね。
それにとんがり帽子はいつも装備していの古ぼけたやつのままだし。
そつちは変えないんだ。

うむ、ねらいとは樂しみにしちゃいたんだけどな。

まあ、何はともあれ、これで準備万端だ。

——じゃあ、《コルツネオ》のカジノへレッツシム——！」

わたしはカジノへの第一歩を踏み出した。どうして負けると分かっているのにカジノへ行くのかって？ ふつ、それは、そこにカジ

「ねえ、勇者、
ノがあるから

マホツカが、なぜか珍しい生き物を見るかのような視線を

飛ばしてくる。

「何？忘れ物？」

「そーじやないわよ。アンタビつしてベストに蝶ネクタイ姿なのよ?
」

左右には同じ表情の戦士と僧侶ちゃん。

「その服装だとティーラーさんかボーイさんと間違われますよ

「まあ、チップはもらえるかもしれないが」

.....。

「も、もちろん気付いてましたともー。ただ何と言いますか、試しにちょっと着てみただけだよ。敵を知るにはまず郷に従むによー」

「嘘をつくでない嘘を」

すみません。とりあえずスースい感じなら何でも大丈夫かと思つていました。

結局着替えて直す羽目になり、わたしが一番時間をくつた。

そういうえば、スーツである」とへのチップミミはないんだ
なぜだ!?

？・遊び人の理想郷（「ロシアム」）

太陽が砂平線へと沈み、夜の帳が街を覆いつくすと、ライトに彩られた舞台の幕が開けた。わたし達は金と欲望が混在した、混乱と混沌の地へと足を踏み入れた。

そこそこ大人な喫茶店には一人で入れる勇気はあるけれど、さすがにカジノへはみんながいなければ無理だつたかな。高級ブティックとは属性の違う入りづらさがここにはある。

「ここが地下なのか。信じられん広さだな」

「平日なのに、人がいっぱいですね」

「ほんと、暇人はどこの街にもいるわよね」

陽気なBGMが流れるカジノ場には、ダンディーな紳士からエレガントな淑女まで、老若男女遊び人がたくさんいた。地下だというのに、目が痛くなるほど大量の照明が乱反射され、客たちの欲心をかき立てている。

スロットマシンが奏でる奇跡のワルツ、ルーレットがかき鳴らす波乱のロンド、コインが弾ずる魅惑の不協和音が、人々の喧騒と混ざって場内へと響き渡つていた。

「耳が痛くなる……」

「この騒音も修行の一環だと思えばいいのか。心頭滅却すれば雑音もまた福音……」

いや、無理でしょ。

「ふふん、この音が軽快な16ビートに聞こえないうちは、まだまだよ」

そういうもんですかね。ん？なぜか僧侶ちゃんがこくりと頷いたような気がしたけど……見間違いだろう。

とりあえず、四人で入り口付近をたむりしていても通行の邪魔になるだけだ。二十四時間営業とはいえ、さすがに日付をまたいでまでここにいるつもりはない。

「戦士はどうするの？」

運を鍛えるなどといつ餅を絵に描く戦士。もうここまできたら本人の自由にさせてあげよう。そして現実を熱いままに喉へ通してくれ。そもそも運など鍛えられるわけがない。

「私はスロットマシンに挑戦してくる。必ず、かのスリーセブンを揃えて見せる！」

と、真紅のドレスの裾をはためかせながら、戦士は「」との闘いに挑みにいった。

ちなみに腰に提げた剣は受付にて没収されている。戦士は食い下がろうとしたが、追い出される心配があつたので結局は諦めた。但し、短剣は隠したままである。ザルすぎるでしょ、チェック。

「マホツカは？」

遊び人の素質を十一分に兼ね備えたマホツカは何に挑むのだろうか。

「ワタシはブラックジャックで元手を増やしてくるわ

と、とんがり帽子を揺らしながら、マホツカは「」との闘いに挑みにいった。

ちなみに腰を置くはずの釣竿袋は受付にて没収されている。理由は剣と同じで危ないからだとか。

でも、服装に関してはローブのままで大丈夫だつたんだよね。ハロウインはまだだいぶ先なのに、カジノ側の基準がよく分からん。

「僧侶ちやんは？ 何か遊んでみたいものとかある？」

直視すると思考領域の九分九厘を奪い取られてしまうので、顔はあさつての方角に向けた状態だ。うわーん、もつたいない。

「えつと、私は……。いえ、勇者さんのお供をします」

普段と比べてトーンが低いのは気のせいだろうか。どこか強く自肅している感じがしないでもない。さすがの僧侶ちやんも、カジノが発する魔性のオーラにあてられて、興奮しちゃっているのかな？ でもそんな僧侶ちやんもかわいいからOK！

「勇者さんは何かやりたいゲームでも？」

「にゅー！ その服装で下から見上げてこられると昇天しそー！
むむむ胸が、決して大きいというわけではないけど（やつぱわ
たしより大きい） その胸が、ぐはっ！ 落ち着け、落ち着くん
だ。」

「はあ、はあ、ええと、特にないかなあ」

資金稼ぎのためにカジノへ訪れたのだけど、世の中ギャンブルで
財を成したのはギャンブルを嘗む側だけであると、わたしはよく
理解している。ので賭博には手をつけるつもりは毛頭ない。

大人な遊びの世界はそんなに甘くない。ほとんどの人は散財する
末路に行き着くはずだ。

気合満タンな戦士とマホツカには悪いけど、あまり期待はしてい
ない。せめて借金をしない程度に遊んできてほしいところである。
旅の資金は……別の手段を考える必要がありそうだ。やっぱ初心
に返つてモンスター狩りですかね？

まあ、それは後でいい。今日はせっかくなので、せめて雰囲気だけでも堪能しておかないとな。わざわざガスまで足を運んだのだから。

「とりあえず、回つてみよっか」

「はい、そうですね」

バニーガールのお姉さんや、カクテルグラスをトレイに乗せるウ
エイトレスさんたちを眺めながら、目的もなく僧侶ちゃんとぶらつ
くことにした。

派手な装飾ときらびやかなシャンデリア。マシンゲームに夢中に
なる女人の人から、テーブルゲームで大勝利をしてチップをどつさり
置いていく気前のいいおじさん……。

ああ、世界は平和だ。大魔王討伐の旅とか、まじで忘れたくなつ
てくる。特に金銭的な面での事情を。

ふと、隅つこのスペースにて、何やら人気の少ないカウンターが
目に止まつた。

「あれは？」

「さつと景品交換所ですね」

「おお、なーるほど。稼いだコインを物品と交換できるシステムなのか。」

「ちょっと覗いてみよ」

カジノ交換所か。いつたいどんなアイテムが用意されているのだろうか。

僧侶ちゃんと一緒にカウンター上の貼り紙を仰ぎ見た。

『世界樹の葉』 1,000コイン

『メリガンメイル』 5,000コイン

『はやぶさの短剣』 10,000コイン

おおっ、何かすごそうなアイテムがたくさんある。ほしいなー。と、そらに下の段を見てみた。

『自爆の腕輪』 5,000コイン

『自壊の鉄球』 5,000コイン

『自滅の盾』 5,000コイン

「何、あれ……」

「何やら『捨て身』な波動を感じますね……」

非常に怪しげなネーミングの景品だ。装備したらソックローで戦闘不能になりそうな予感が臭つてくる。

わたしが懷疑的な眼光を放つていると、子供連れのジェントルメンがやってきた。

「わあー、パパー！ あの一番下のほしいなー！ 買つてーー！」

一丁前にネクタイを締めた少年が父親にねだり始める。

「どれどれ……模型か？ そうだな、せっかくの誕生日だ。何でも買ってやるぞ」

微笑ましい光景だ、けど子供のうちから贅沢タクゼを覚えさせるのは

感心しませんねお父さん。

けれど、誕生日では大目に見てもいいか。わたしもバースデーには母がフンパツしてくれて特売品ではない獲れたて新鮮なお肉をげふんげふん。

「どうしました、勇者さん？」

「ううん、何でもない、何でもないよ」現実は本当に残酷だ。

それよつか、少年がおねだりした景品はどんなんだろう。模型だなんて、いかにも子供っぽくつていいね。確か一番下のつて言つてたつけ。

『1200分の1往海艇・ヒルデガルーダ参考』 1,000,000コイン

！？

はいー！？ 何だこの値段！ だつてただの模型でしょ？ 確か1コインが20セントだから…… つて、どんだけボツてんだよ！

「よし、これをくれ」

「かしこまりましたお客様」

いやいやいやいや、ええーー！ マジで買うの？

「わーい！ パパありがとうーー！ わーいわーい」

「ハツハツ、安い買い物だ」

「ママにはないしょ？」

「ママには大好きなカツバのぬいぐるみを買ってあるから大丈夫だよ」

「さつすがパパー！」

「さあ、買う物買ったし、そろそろ帰るぞー、ハツハツ」

まじ……かよ。

「コインではなく、ゴールドなカードで支払つていったジェントルメン。さすがはラスゼガス、わたしと住む世界が異なる人がふつーに

いる。

しかし、あの値段はやっぱおかしくないかな。

「僧侶ちゃんはどう思う？ やっぱ高いよ」

「いえ、打倒なお値段かと思います」

へ？

「あの模型は、伝説の原型師《シシド・リンドブルーム》氏が設計した《ヒルデガルーダ》シリーズの参考機です。二十万ドルではまだ良心的ですね」

そ、僧侶ちゃん、詳しいね……。

「私も壹号機と参考機、それとシリーズの前身である《ヴィードルガンス》を所有しています。ただ本当にレアなのは式号機なんですよ。シシド氏が完成した作品を前にして設計ミスがあったと述べ、販売中止となつた幻の式号機。初回ロット分が闇ルートに出回っていると耳にしますが、まだこの眼で見たことがないんですね。もしオークションにでも出品されたら、全財産を投げ打つてでも……」
住む世界が違う人がこんなにも近くにいたことを失念していた。
ほんと、お金持ちな人の考えはよく分かりません。

?・リバティ・ベルを鳴らして

場内をうろつくこと小一時間、ようやくにして半周することができた。他人がゲームを遊んでいる姿は安心して見物することができるので、ついついゲームの行方を最後まで見たくなってしまう。それに、このカジノ場広すぎる。ベースボール球場か、フランク屋敷ぐらいはありそうな下敷地面積だ。

人ごみで、はぐれないようにするためか、途中から僧侶ちゃんに腕を握られているのがなんとも心地良い。僧侶ちゃんのシャイニング・ソフト・フィンガーに触れたら、どんな妄想もぶち壊されるに違いない。

「あつ、スロットマシン」

ハート、星、蹄鉄などなどの絵柄が描かれた三つのリールを無限回転させる機械が、所狭しと並んでいた。横一列ではなく、六台で花びらのような円状に配置されているのがなかなかにくい。

「戦士はまだいるのかな」

「あれからだいぶ時間が経ちましたからね、もしかすると……」
一時間も遊べば投資したコインが枯渇しているかもしれない。
しかし、それは杞憂のようだった。棘ならぬ剣を隠した真紅のバラは、真剣な面持ちで停止しているリールをねめつけていた。

「戦士？、調子はどんな感じ？」

「でりやあつ！」

「うわっ！ びっくりした。いきなり大きな声出さないでよ。

壮烈な掛け声を上げながら、リールを回転させるスピンボタンを押す戦士。モンスターと戦っているわけじゃないんだから、もうちよいリラックスしたらドデスカ？

「くそつ、駄目か」

指に込めた気迫とは裏腹に、順に停止するリールの絵柄は三つともバラバラだった。トランプにも使用されている赤・黒・赤のマー

クが、対面するプレイヤーをあざ笑っているかのよう見えた。

「戦士、どんな按配なの？」

「勇者か。見ての通り、全然揃わない。やはり私もまだまだ未熟なのだな」

いや、だから運の能力値とか関係ないから。

そもそもスロットマシンでは勝てないのが普通なのだよ と僧侶ちゃんから聞いた情報。でも一発当てれば億万長者になれる可能性を秘めているとのこと。

にしても、随分とスロットマシンも進化したものだ。学校の近くにある喫茶店でお古のマシンを遊んだことがあつたけど、本当にシンプルだつたからね。今や電光板が装着され、文字や絵文字が演出を華やかにしている。

「ところで戦士、けつこうコイン残つてないよね？」

マシン付属のコイン受け皿にはかなりのコインが入つていた。もしかしていい出目が一度揃つたのだろうか？ 意外とやるではないか、戦士も。

「いや、実は今しがた始めたばかりなんだ」

「えつ？ なんで？」

もしかして精神統一でもしていたのだろうか？ 戦士ならやりかねない。

「ふむ、少々軟弱な男たちの相手をしていてな。それで時間を取られてしまつたんだ」

！？

だ、だ、男性の相手ですとー！？ エフ、うつそ、まじっすか戦士さん？

「そ、そそそ、それはつまつまつまり」

「ああ、随分と執拗な輩が何人かいてな。だが所詮は腑抜けばかりだった。殺氣を込めた視線を向けたら、震え出して逃げていつた。まったく、あれしきで背中を見せるとは情けない」

。

ああ、そういうことですか。

まあ、今の戦士は掛け値なしで美人だからね。ちょっと手を出してみたいと思うには分からぬでもない。男性客たちも氣の毒に。

「ところで戦士さん。どうして一レーン設定なんですか？」

わたし達と会話している間も、コインを入れてはスピンボタンを押し続ける戦士。よく見るとマシンのレーン設定は一だつた。最大の三レーン設定にすれば、払うコインの枚数は増えるけど、斜めのラインも加わるので絵柄の揃う確率も高くなる。周囲の台で遊ぶお客様を見るに、みな三レーンで遊んでいた。

「『闘い』とは、いかなる時も一本勝負だ。三本勝負など、その時点で自分は弱いと断言していることだ」

さいですか。戦士さんマジかっけえつす。

せつかくなので、しばらく戦士の闘いとやらを見守ることにした。

「見ていろ、次こそは」

ハート
スペード
ダイヤ

相変わらずのバラバラ大事件だ。

「まだまだー！」

チエリー
スイカ
プラム

実においしそうな組み合せだ。でも何でスイカなんだろ？

「くそッ！ まだまだまだあッ！！」

オタマジャクシっぽい生き物

モグラっぽい生き物
プリンツとした生き物

あれ？ いきなり絵柄の趣向が変わったね。
「まだだ、まだ終わらんぞッ！」

黄色の鳥？

空飛ぶ乗り物？

竜王（笑）？

おっ？ なぜかリール上部の電光板にウサギが出現すると、コインが吐き出された。スズメの涙ほどしかないけど。
「負ける……！ ものかあああああッ！」

スター
キノコ
キノコ

オマケな組み合わせでもよさそうな感じだけど、揃つてないものは揃つてない。

てか絵柄多くないですこのスロットマシン？ こんなんじゅー儲けはおろか、絵柄を三つ揃えることすら難しいでしょ。

「戦士、やめた方がいいんじゅ……」

「そうですね……。おかしいですよ、このマシンは」

「ふつ、ここまできたからには尻尾を巻いて逃げるわけにはいかないッ！」

ああ、財布をカラにする人の常套文句だ。

「戦士道とは、諦めぬことと見付けたり！」

「解釈するのが難しい言葉だな。

「私が座った椅子は、途中退席できない……！」

いや、できるでしょ。

「今度は揃える！揃えると決めた！！！」

スロットマシンが壊れるんじゃないかと想^よが^べるほど^の、衝撃の指弾丸を叩き込む戦士。

7

「おお？」

初めてフを見た気がする。

「よし、次いけ！」

7

「おおおー。」

もしや、もしやこれはいつかやうんじやないですか戦士たこー！

「最後 決まれええええーーーー！」

美女の雄叫びがカジノの喧騒に溶け込む。声を出したといひで結果が左右されるわけではないんだが、いつこうノリは理解できなくもない。

そして運命のコールが回転を止めた。いつたか 、

BAR

「ですよね……。

「ぐはっ、め、負けた……。」

やっぱ駄目だったか。まあ、試合でどうとかなるようなものでもないからね。

と、なぜか「イン受け皿に入っている」インがジャラジャラと音を鳴りしながらその姿を消していった。

「おー、なぜインが吸い込まれていくんだー？」

「おー、なぜインが吸い込まれていくんだー？」

手を伸ばして「ドヤンを捕まつたする戦士であつたが、時既に遅かつた。

「ぜ、全部……呑まれた……」

傍くも、戦士艦隊は砂の海へと沈んでいった。

？・カジノ・de・ボコチョ

「なぜだ……、なぜ……」

スロットマシンとの闘いに敗れた戦士。放心状態のままボソボソと呟く姿は、もはやお決まりのパターンだつた。とりあえず放つておいてもあれなので、一緒に 半分引きずりながら マホツカを探すこととした。

「マホツカは大丈夫かな……」

「勝負運は強そうな人ですからね」

うーむ、仮に戦士と同じ目に遭つた場合、マホツカなら意氣沈没などせず、怒りフルスロットルで店を破壊するかもしないからね。一人にしたのは失敗だつたかな……。負けていないか別の意味で心配だ。

ブラックジャックは人気のゲームなのか、プレイテーブルがフロア全体にドミナント出店していた。どうにかマホツカが歩いていつた方向を思い出しながら探すこと数分、

「アンタたち、なーに湿氣たマッチみたいなツラしてるのはよ?」
と、目立つとんがり帽子の黒いクリスマスローズが、きんきじやくやく 欣喜雀躍な顔で現れた。どうやら一通り遊んで引き上げてきたみたいである。

「いや、戦士がスロットマシンで大負けしちゃって」

「なぜだ、なぜ……」

壊れたレコードみたいに同じセリフを繰り返す敗戦士。これに懲りて、二度とギャンブルには手を出さないでほしいところだ。

「それで、マホツカの釣果は?」

まあ、訊かずとも表情で判断できるんだけどね。

「ふふん、見ての通りよ」

シユツと、マホツカは見せびらかすようにロープの袖から何かを取り出した。

「あれ? それって」

つい一時間ほど前に景品交換所で出会ったジョアブルパピーが所持していたカードのブロンズ版だった。どうやらこの店専用のコインカードらしい。確かに、たくさんのコインを持ち歩くのは大変だからね。

「それっていくらぐらいなの？」

「んー、ブロンズは一万コインからだつたかしら？」このカードに

は五万入ってるけど

!

五万二イン！？

一時間せいで五万！？

「おこいでおれ、ホッカさん！」

いてたのよね。気分はまさにテンホー・チーホー・チューレンポー

トンって感じかしら

えつ？ それって死亡フラグなんじゃ……。

卷之三

ふつ、母直伝の極貧サバイバル術を発動させれば世界一周も夢じやないけどね。但し軽度のトラウマを覚えるから、この宝刀だけは抜くつもりはないけど。

「これからなんだから」「

?

「まだ続けるの？　もう十分なんじや……」

「ノンノンノン、まだまいくわよ！　ツいてるときに稼がないで、

「稼ぐのよ、幸せの赤と緑のリバ」「さく選ばせや」
「深龜」は死」「ワラブと畠陽が決まつて」ものですね。

「お見てなせこつて」

ズカズカと人ごみを分け入つて分け入つて進むマホツカ。その勇ましい背中を追つて下の階へと降りる。まだ地下があつたんだ。

螺旋状の階段を下りること数十段。その光景は突然目に飛び込んできた。

「「」」

サンバとマンボとテクノが混ざった、とにかくうるさい曲が流れるベースメントは、それを上書きするほど熱狂と歓声が地響きを鳴らす。そしてさらに、歓喜のファンファーレと悲哀のタンゴが沸き起こった。その理由とは、

「《ボコチヨ》！」

広大な地下空間の中心部には橢円形のレース場があった。そこには色取り取りのボコチヨが騎手を背中に乗せて激しいデットヒートとオーバーテイクを繰り広げている。

「何、ここ？」

「どうやらレースの会場みたいですね」
「ゴールラインを八頭のボコチヨが順々に駆け抜けると、紙吹雪が舞うわ舞うわ。

「そう、ここは《ボコチヨレース》のゼガス会場よー」

ボコチヨレース？

ちなみに《ボコチヨ》とは、簡潔に述べると馬みたいな鳥のことだ。翼が退化した代わりに足の筋肉が発達したとかなんとかで、陸上で最速を誇る生き物とのこと（瞬発的ではなく継続的な）。

生物学の先生曰く、馬の仲間なのが鳥の仲間なのが、レースながらの白熱した不毛な議論が、どこかの国際会議で行われているとかいないとか。

「勇者は知らなかつたの？ まだ一般人には認知度が低いようね」
普通の競馬なら知つていいけど、ボコチヨレースは知りませんでしたね。

ボコチヨといえば、主に陸路の旅にて移動手段として活用される温厚な動物だ。まさかこんな賭け事に駆り出されていたとは、ボコチヨも大変だな。

「ようするに賭博レースつてことだよね？ 競馬みたいな」

「そゆこと」

「噂には聞いていましたけど、これほど熱狂していたとは」

ふーむむ。

「でもレースって、当てるの難しいんじゃないの？」
個々の能力差はあるかもしれないけど、やはり不確定要素が大きいのでは？

「ふふん、心配無用よ。何つたって耳寄りな情報を手に入れたのよね。かの『マートヤのつぶやき』で見たんだけど、最終レースにあの『セイホーフハイ』が出走するのよ！」

と、言われましても、何のこっちゃ。

「知らないのは無理もないわね。聞いて驚きなさい、セイホーフハイはボコチョレース界に君臨する無敗の帝王なのよー。久しぶりの参戦ゆえかオッズは三倍になってるけどね」

それってどう考えても死亡フラグだよね？

「そんじゃレース券買つてくるわ。アンタはこれ読んで少しは勉強してなさい」

と、マホツカからタブロイドサイズの競馬新聞ならぬボコチョレース新聞を手渡された。見れば何やら赤いペンでいろいろと数値データが書き込まれている。どうやら一番のセイホーフハイ一点張りに決めたのだと読み取れた。

「他にどんなボコチョが走るんでしょう？」

「確かに、ちょっと気になるね」

ラズゼガス スプリングカップ

最終レース 障害3000メートル

- 1・ツンツンヘッドデイトナ
- 2・セイホーフハイ
- 3・ゲキアマセンベエ
- 4・ゲレゲレパンサー
- 5・イクシオンフォスラー

6・マルコヴォーミリオン

7・サンダーカノープス

8・ハリボテナツソス

何か、名前がコいな。

「どう、少しば理解した？」

レース券を購入してきたマホツカ。どんなの買つたんだろ。
「モチ二枠の単勝よ。全額賭けてきたわ」
全額つて、五万コイン全部！？

「ふふん、これで一気に十五万コインね」

もう分からん、何もかも。考えるのをやめて楽にならひ。
「ギャンブルは時として大胆にならないといけないのよ。ソソコソ
チマチマやつてたらお金が腐るわ！」

さいですか。マホツカ先生マジパネエつす。

「あ、そろそろ始まるみたいですよ」

八頭のボコチョがスタートティングゲートへと入る。なぜか五頭目
だけやたらと時間を要したみたいだけど、それも終わつて準備完了
のようだ。

『レディースえーんジジョントルメーン！ 今宵の最終レース、運
命はあなたが託したボコチョ次第。笑つて豪華ディナーをゼガスの
夜景と共に満喫できるか、はたまた泣きながら貨物列車の中でブタ
と一緒にわら束の上で寝ることになるのか。

それではボコチョレースうー、レディー……』

ピンクのスースに真つ赤なシャツ、小指以外を全部立ててマイク
を器用に握る司会者の掛け声とともに、ゲートが一斉に開いた。無
責任な願いを託された七つの流れ星が、ダートなコースへと降り注
ぐ。

「オラー！ 絶対に一着で入りなさいよ！ アンタに全賭けしてん
だからね。負けたらローストチキンにするわよ！」
隣で激を飛ばすマホツカ。ただの迷惑客です、本当にありがとう

「じゃこまし、た。

しかし、わたし達の旅の成否が懸かっているのだ。一応は応援しておかないと。

『さて、まずレースはロングストレートから第一カーブ 通称一ベルンリンクのヘアピンカーブへと突入する!』

えつ、ヘアピンカーブなの？ あつ、本當だ。あんなの曲がれるんですかね？

「まがれええええええ！」

マホツカの叫び声が通じたかどうかは不明だけど、セイホーフハイを含めた六頭のボコチョはスピードを落として無難にカーブを乗り切る。

『おおつとーー!』

だが、ぶつちぎりでドンケツを走っていた一頭が曲がり切れずに転倒してしまった。

『六枠八番ハリボテナッソスが転がつたあ！ これで公式戦二十三回連続転倒だ！ 絶賛記録更新中なのは、わざとやっているとしか思えないぞ』

わざとやるなよ。何のメリットもないでしょ。

「あれ？ そういえば五番のボコチョはどこに……？」

『おおつとー 五枠五番のイクシオンフォスラー、何とスター・ティンクゲートから出られない！ またしても減量に失敗したようだ』

またしてもつて、何でそれで出走登録できるんだよ。

レース序盤にしてとんでも展開だ。

だが、まだそれは序の口だつた。障害レースということもあり、中盤以降レースは波乱に満ち溢れる。わたしのツツコミも振り落とされないようにしなければ！

『おおつとー 六枠七番サンダー・カノープス、雷平原エリアにて落雷が直撃！ 油断してマバタキでもしてしまったのか？ 見事なヤキトリ状態だ！』

どつから力ミナリなんぞ降らしているんだよー!? 騎手もあぶね

「よ！」

『おおつと！ 五枠六番マルコヴァーミリオン、ディアガの大穴ゾーンにてジャンプできずに落下！ やはりただのボコチョだつたのか？ それでは世界の反対側までアディオース！』

『いやいやいやいや、そこまで落下しないでしょ？ 頭が余裕で見えますけど。』

『おおつと！ 四枠四番ゲレゲレパンサー、騎手になつていなかつたのか、突然暴れ出してコース外へと飛び出した！ これは残念ながら失格だ』

きつと名前が気に入らなかつたのだろう。

『おおつと！ 三枠三番ゲキアマセンベエ、内海エリアにてまさかのカナヅチ発覚！ 体が沈むよどこまでもー、フォーエバーーー！』

溺れる深さじやないじやん！ 他のボコチョは足の真ん中ぐらいまでしか浸かつてないし。

リタイヤ続きのアップサイド・インサイド・アウト・レース。（生き）残っているのは頭の毛がツンツン尖つた金色のボコチョと、我らの期待を背負う無敗の帝王だけだ。

『おおつと！ 一枠一番セイホーフハイ、名に恥じないレース展開を見せてくれる！』

さすがは不敗を冠するだけはある。まさに『桁違い』のスタミナで最後の直線を突つ走る。

『よっしゃー！ 勝つたわー！』

そう誰もが思つただろう。実際一着とは一ボコチョ身以上離してゴールした。

しかし、勝利の女神は微笑まなかつた。

『おおつと？ ここで入つた情報です。何とセイホーフハイの騎手ジヨニー氏ですが、事前のドーピング検査で陽性反応が出た模様。本人は昼食に食べた変な肉のせいでお腹をこわし、そのとき飲んだ胃腸薬だと説明しておりますが、残念ながらこれは失格だ。

よつて一着に入った一枠一番ツンツンヘッドデイトナが繰り上が

りの一着になります。そして二着は……おおつと！？ いつの間にか復帰していたハリボテナツソスがゴーーール！！』

そしてレースは終了した。

「...」ナナフ

傷くとも、マホツカキヤツスルは砂上の楼閣だつたかのように崩壊した。

「どむうー。」

「ぐふつー。」

「ぎやんー。」

有無を言わせずしょっぴかれた部屋に三人揃つてぞんざいに放り込まれた。戦士とマホツカに潰されるように下敷きになるわたし。酷い、わたしは無罪なのに！

洒落たオフィスの応接室といった感じの部屋は完全防音設計なのが、カジノ場やレース場の喧騒が幻であつたかと思えるほどなの、耳がキーンと痛くなる静かさだつた。

「だ、大丈夫ですか、皆さん！？」

ああ、僧侶ちゃんのエンジエルフェイスを見られれば、どんな不遇な環境に陥つても雑草の」とく立ち上がり……ないよ！ 上の二人早く退いて！

「う、ん？ いじは……どこだ？」

記憶が曖昧な状態の戦士。まあ、無理もない。

ボコチョレースの結果がお気に召さなかつたマホツカが激昂したのはすぐのことだった。怒り心頭で司会者兼解説者の人に不服を申し立てに行こうとしたのだ。

マホツカ一人だけなら、わたしと僧侶ちゃんでどうにか抑えることはできなくもなかつたのだけど、スロットマシンの変な仕様に悩まされていた戦士が覚醒し、あろうことかマホツカに同調したのだ。何でこういうときだけは息がピタリと合つんでしょうかね、この一人は。

ちょっとした騒ぎの波紋がレース会場に広がりそうになつたのを、わたしがどうにか二人を宥めることで解決を図つましたが、やはりとういか無理だった、だったよ。

その結果、なぜかわたしまで黒服のお兄さんたちに連行され、こ

うして別室へと隔離された次第である。

「くあー、何すんのよ！ それが客に対する態度！」

マホツカは起き上がるとすぐに、扉の前で阿修羅像よろしく阿吽あつんと「王立ちする黒服の警備員たちにくつてかかる。だがお兄さん二人は微動だにしなかった。プロや。

まあ、問題を起こしたのはわたし達だからね。もはや客扱いは見込めない。

だがしかし、

「あのー、わたしは無罪なんですけど……」

「…………」

完全無視かよ。サングラスの下に隠された表情がまったく読み取れない。

「ふふん、一人だけ助かるうとしても無駄よ、勇者」

「よく分からんが、ここは皆で協力して乗り切るべきだ」

あーもう、何でこんな面倒なことになっちゃったんだよ。だからカジノなんて嫌だつたんだー と嘆いたところで後悔先にも後にも立たない。

この後いつたいどのような処分が下されるのだろうか。ブラックリストに登録され出入り禁止になるぐらいなら全然カモンなんですが

けどね。

「とにかく、これ以上問題起こしたくないから、向こうの出方を待とう」

暴力行為はさすがにまずいからね。この年齢で『ズールトベイル監獄島』送りにはされたくなどない。

そして待たされること数分後、マホガニーの重厚な扉が外側から開かれた。

「これはこれはお客様方。何か当店に御不満でもありましたでしょうか？」

そう述べながら入室してきたのは白のジャケットを羽織った老人だった。両腕に高級そうな時計を五つもはめ、鷹の金細工が付いた

杖をついていた。

あれ？ どこかで見たことのある人だな……つて、昼にこの

店の前で僧侶ちやんにイチャモンつけてきたおっさんではないか。

「おや、どこかでお会いしましたかな」

言葉遣いはくそ丁寧だったけど、顔は半笑いで、明らかにわざと口にしているのが窺える。

「アンタ、昼のカレーじゃない！」

「どうしてこんなところで出ててくる？」

ほんとだよ。一度と会わないと思つていたのに。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。わたしはここ『コルツネオ

』カジノホテルのオーナーを務めている者です

オ、オーナー！？

まさかトップがいきなり出張つてくるとは、そんなにヤバメな状況つか？

「ちょっとー、さつきのボコチョレースおかしいでしょ！ 何で порталのタイミングでドーピングの話が出てくるのよーー！」

「私が遊んだスロットマシンもおかしかったぞ！ なぜコインが吸われるんだーー！」

オーナーを前にして余計にヒートアップする戦士とマホッカ。まあ、理不尽さは共感できなくもないけど、とりあえず握った拳を緩めなさいって。大人の社会というのはね、先に手を出した方が負けになるから。

「とんだ言い掛けですね、お客様。当店は至って健全な運営を行っているカジノですよ。あくまでもルールに則つてのことです」「何ですつてーー！？ アレのどじが健全なのよー この店爆発させるわよーーー！」

「貴様、場合によつては、斬る！」

一触即発な状態に、オロオロしている僧侶ちやんがチヨーゼツかわええー……つて、今はそれどころではない。

「御不満があるようですね

「当たり前じゃない！」

「当たり前だ！」

二人の殺気に当たられてもオーナーは冷静にして沈着だった。

そしてゆつくりと、まるで狙っていたかのように次の言葉を紡ぎ出した。

「それでは、『J』はわたしと一勝負しませんか

勝負？

「どうこうことだ」

「『J』はカジノですよ。全てはゲームによって解決するべきでは？え、そうなの？ 普通に反省文書いて終わりにした方が……。

「ふん、面白い考え方じゃない」

「あなた方が勝てば、負けた分を十倍にして返しましょう」

「じゅ、十倍！？」

「つてことは、一、十、百、千……『J』、『J』、五十万コイン超！？ 十万ドルオーバー！？

「ま、負けたらどうなるんですかね……」

皿洗いぐらいなら全然OKなんですかけど、まさか下界にバージされないよね。

「そうですね、負けたら……」

そこで言葉を切ると、オーナーはわたし達一人一人に順に目を向ける。そして最後に僧侶ちゃんに視線を合わせてしばらぐじつと見つめた。やつぱ口リ

「お客様が負けたら、わたしの頼み事を一つ叶えていただきたい。なに、たいした内容ではないですよ。ほんのお遣いみみたいなものですから」

あ、怪しい。カビ臭い破邪石を取つて『J』とか言われそう。

「ふん！ 何だつていいわよ！ ビーせ負けるつもりはないんだからね」

いや、一応内容を確かめておかない。契約書だつて最後まで読まないと痛い目見るし。

「ギャンブラーはね、負けたときのことなんかイチイチ考へないのよー。負け犬の発想はお金とツキを逃がすだけよ！」

だから、それは死亡フラグ……。

「面白い。それで、何で勝負するんだ？ 剣か、槍か？」

ほんと『勝負』って言葉に弱いんだから戦士は。いつもの心配性はどこ吹く風つて顔してるよ。

「そんな物騒な道具など使いませんよ。」ヒはギャンブラーの集まる場所、当然これで……」

と、オーナーは胸ポケットの中に手を入れると、中からトランプの箱を取り出した。しっかりとセキュリティーシールが貼られてある。

嫌な予感しかしないのは、激しく氣のせいであつてほしい。

？・砂漠の行軍

春ノ暑サニモマケズ、夏ノ暑サニモマケズ、
秋ノ暑サニモマケズ、冬ノ暑サニモマケズ、
カンカン照リノ太陽ニモマケズ……、徒步デ砂漠ヲ歩ク苦行ニモ
マケズ……、

「つて無理だよ、ケンジ先生！」

天を仰げば、青いカーテンと、一点の白い染み。

大地を見渡せば、延々と敷かれた黄金色の絨毯。

体感温度は五十度を超えているのではないかと思えるぐらい、わ
たし達は砂漠の酷暑を心ゆくまで味わっていた。

「ふふ、これしきのことで音を上げるのは早いぞ、勇者。これも大
魔王を倒すための修行だと思えば……すまん、無理だな
ですよね……。

後ろを歩く戦士も、さすがに苦しそうだ。

「ほんと暑くて熱いわよね……、目玉焼きの気持ちが分かるわ」
最後尾にて普カ普カと浮遊する釣竿袋に乗りながら付いてくるマ
ホツカ。一番楽そうなはずなんだけど、光を吸収する黒色のローブ
のせいで、一番バテ気味だつた。

別の服を着た方がいいんじゃないかと、出発の前に注意をしたの
だけど、当の本人が頑なに嫌だと意地を張るので、そのままだ。そ
こまで拘る理由が知りたい。

しかし、本当に熱い。しかも砂地つて想像していた以上に歩く
のが大変だ。砂に少し埋まる足を持ち上げるのがボディブローのよ
うにジワジワと効いてくる。加えて小高い砂丘を登つては下つての
アップダウン続きなので、疲労がハンパない。

「え、ラクダは？『砂ボコチョ』がいるじゃないかって？ はつ
はつは、実に面白いジョークだ。そんな便利なもの借りる金なんて
ねーんだよ！（切実）

ああ、この広漠とした砂漠のどこかに、本当に目的の『ピラミッド』はあるのだろうか。もしかしたら騙されたのかと思わざるを得ない。

しかし、僧侶ちゃんのためにも、ここは暑さに耐えて頑張らなくてはならない！

「私の運が、もう少し鍛え上げられていれば、こんなことには……」「あのカレーオーナー、いつか覚えてなさいよ。……」

さて、なぜわたし達三人は『東遊記』でもないのに砂漠をピクニックしているのかと言いますと、話は簡単、カジノのオーナーとの勝負に負けたからである。

『戦士＆マホツカＶＳオーナー』の対決種目はポーカーだった。先の展開が読めない激しいバトルだった。というわけではなく、ゲームはさざ波のごとく坦々と進行していった。

オーナーは、別段イカサマな強さでもなく、最後にありえない一発大ドンデン返しがあつたわけでもなかつた。戦士とマホツカを、真綿で首を絞めるような感じで、徐々に徐々に、しかし着実に二人のチップを削つていき、そして勝利を収めたのだ。

戦士は終始オーナーのブラフを警戒してか、すぐにフォルドしてしまう超慎重派。マホツカは逆にがんがんレイズしまくつて痛い目を見る超特攻派。そんな協調性の欠片もない二人が、トランプゲームに於いての『戦い』を知り尽くしたオーナーに勝つには、運以上に経験値が『ヘヴィメタスライム』百匹分は足りなかつた。

それでこの顛末である。
勝負前の約束通り、わたし達はオーナーの頼み事を遂行する羽目になつたのだ。

内容は、なんでもゼガスの北に広がる未開拓な砂漠地帯に、伝承に伝わる伝説のピラミッドが存在し、そこに眠ると伝わる幻のレアアイテム『黄金の爪垢』を取つてこいというのだ。

『伝承の伝説の幻のレア』って、もはやそれ存在しないって宣言してるだろ。あのおっさんはどこぞの月のお姫様なんだよ。そんな秘

宝は皮肉屋のドレイクさんが、貨物会社のジョーンズさんに依頼してほしいところだ。

文句は止め処なく出でてくるが、約束は約束だ。取つてくれれば負けた分のお金は返してくれると言つし、ピラミッド探索のための資金をちょっとだけ工面してくれたので、根っからの悪人だとは思えない。

だがしかし！ 一つだけ絶対ゼッタイぜえええつたいたい許せないことがある！

「はあ、はあ……そ、僧侶ちゃん」

そうなのだ、今わたし達は、わたしと戦士とマホツカの三人しかいないのだ。一人メンバーが減つてしまつと、なぜだが前衛的なパーティー構成になつた氣分がするけど、そんなことはどーでもいい。と・に・か・く、僧侶ちゃんがいないんだよ！

なぜならば、要は担保にされてしまったからである。まあ、普通はそうするよね、わたし達が約束を破棄して逃げるかもしないし。僧侶ちゃんがパーティーから抜けてしまつたのは様々な面で痛手だ。回復の支援を得られないのは当然のこと、博学多識な常識人を失つてしまつた点も挙げられる。

そして何よりも、心の癒しがなくなつちゃつたんだよ（ここ重要）。わたしの生命活動を維持する『僧侶ちゃん成分』が補給できないのだ！ 曙さで水分を失つて脱水症状を起こすか、僧侶ちゃん成分が不足して魂が干上がるか、どちらが先となることか。

くわお、あのおっさんも、僧侶ちゃんを人質にするとは、やはり

ロリ」「

「ん？ 何だあれは？」

ざくざくと足跡を砂の大地に残していくわたし達一行の前に、突如として巨大な三つの穴が目に入つてきた。なんぞ？

「不気味な穴だね……、一応迂回しよう」

「そうだな、何かの罠かもしれん」

直径が十メートル以上はあるサンドホールの深さは遠くからでは

まったく分からぬ。測るにしても近づくのは危険なので、無難にスルーするのがベターな選択だ。宙に浮くマホツカは暑さでくたばつているのか、特に文句を漏らさなかつた。

「ところで勇者、『砂の大陸』という本を知つてゐるか？」

穴を避けて歩いているところで、戦士が思わぬ話題を振つてきた。

「戦士もあのファンタジー小説読んだことがあるの？」

「ああ、かなり昔のことだがな」

おおつ、これは意外な事実だ。戦士の性格からすると、武術書の類や精神論がテーマの堅苦しい本ぐらいしか読んだことがないと思っていたからね。まさか娯楽小説などを普通に読んだことがあつたとは。

「名作だよね、あのストーリーは。砂漠でしか採取できない『デザートスペイズ』を巡つて、三大王家が戦争を引き起こす辺りとかいよいよ」

「ああ、特に砂漠での戦闘描写がすばらしかつた。何度も読み直しては砂浜に行つて実践したことは、子供の頃のいい思い出だ」

……なぜそつなる。

普通に小説議論をしようとした夢見たわたしがバカだつたのか、はたまた戦士の感覚がズレているのか。

「それで、どうしてあの小説の話を？ やつぱ砂漠だから？」

「いや、ふと思い出したことがあつてな。あの小説には実は面白い逸話があるんだ」

逸話？

「当然のこと砂で覆われた大陸は想像上の設定なのだが、中盤以降に登場するアノ砂漠のモンスターに関しては、筆者の実体験が元になつてゐるらしいんだ」

アレ、か。

「初耳だね。筆者のジョークか何かじゃないの？」

水も食料も乏しい砂漠に、どうやつたらあんな巨体なモンスターが棲息できようか。

「私も最初はそう思つたんだが、いろいろと調べてみると……」「？ どしたの戦士、余所見なんてしちやつて……」「！！！」

それは、いた。

三つあつた穴の一つから、うねうね動く薄砂色の太い柱のような肉体が出現していた。その先端を見ると、目も鼻もない顔が、たくさんの大歯を生やした大口を開けてこちらを威嚇していたのだ。話に夢中になつていたため気付かなかつた。

「……もしかして、コレ？」

「……もしかすると、コレだな」

サンドワームが 現れた！

砂漠と同化した体はとととにかくデカかつた。キング系モンスターをもひと呑みできそうな大きな口を、太陽を食べるかのように天に向ける。

『ウウウウウウウウボオ』

じゅるじゅると口ダレを垂らしているのは空腹だからですかね……。

「やはり本当に実在していたのか。私は今、猛烈に感動している……そんな悠長なこと言つてる場合ぢやないでしょ！ 敵だよ敵、モンスターっすよ。しかもメツチャ強そつなんですけど

「マ、マホツカ、ドカンと一発お願ひ！」

いつもこの手のケースはマホツカに任せちやつていいけど、いいよね？

「…………」

あり？ マホツカさん。

「どうしたマホツカ、暑さに負けている状況ではないぞ！」

サンドワームを凝視しながら顔を青くするマホツカ。

「まさか暑さで魔力切れとかないよ……ね？」

「…………ひ、違つ

「何が違つんだ？」

「ダメ、なの……よ」

「へ？」

「何が？」

「何がつて、虫よー 虫に決まつてんでしょうーー！」

「虫？」

確かに、サンドワームは小説の描写同様にどこか芋虫っぽいよね。胴が長くて、うねうねしているし。名前もワームつて付いているぐらいだから、そうなのだろう。

でもさ、ここまで大きくなると、もはや虫とか関係なくなるようなレベルな気がするんだけど。まあ、気持ち悪いのは悪いけどさ。「昔キャベツ買つてきたときについてたあのイモムシ、成長したらキレイなチョウになると思つていたのに……毎日エサあげてたのに……何で、何でガになるのよ！ 朝起きたらワタシの顔に張り付いて…………ギーヤーーーーー！」

あーあ、自分でトラウマスイッチ押しちゃつたよ。

『ウオオオオオオオオアーン』

耳をつんざく唸り声を上げる砂漠の巨獣。周囲の砂丘が振動で崩れる。

や、やっぱそうな雰囲気だ。

「戦士、ここは逃走するよ！」

「くつ、こいつと戦えないのは残念だが、ここはそれが最善だな。僧侶がいない状態では、不要な戦闘は避けるべきか、？」

サンドワームは口を天からわたし達へと向けた。喉の奥まで針みたいな尖った歯がびつしりと生えているのが確認できる。

「こ、これは……」

「ま、まさか……」

『ウウウウウウウンオオオオオ』

無風だった灼熱の地に、突風が局地的に吹き荒れる。それは自然

の現象ではなく、サンドワームが食事をするためにわたし達を吸い込もうとしているのだ。

「ま、まじですかー！」

辺り一面しがみつける物など一切合切ない。サンドワームは砂を飲み込むことなど気にせず、吸い込みの勢いを強めていく。

このままでは呑みこまれてしまうと考えが行き着いた瞬間、わたしと戦士は揃つてマホツカの釣竿袋を掴んだ。

「イモムシ……ガ……イモムシ……ガ……イモ、つて何やつてんのよー?」

「このままでは奴に吸い込まれてしまう

「マホツカ、全速力で飛んで逃げてよー！」

アトモスさんやダイスンさんも驚きの吸引力。じりじりと口が近づいてくる。やべー！

「うがー、バカ！ 定員オーバーよー！」

「そこを何とか！」

「早くするんだ、食われるぞ！」

そのセリフがトラウマに塗されることになったのか、マホツカは意を決した表情となり、確認と同意の視線をわたしと戦士に向ける。「虫に食われるなんて最悪だわ！ いいアンタたち、死にたくなかつたら、ゼッタイに手を放すんじゃないわよ！」

放すものですか。

「そんじゃ、いくわよー！」

マホツカは釣竿袋に座り直すと、車掌さんよろしく腕で前方を指示した。

「生き残った選ばれし者の勇氣よ、イモムシモンスターからの解放を約束せよ！」

ただの逃走なんだから、そんな大仰な言葉にしなくても。

「点け！ 『イグニッショーン・ファイアボルト』！..」

へえええ あああああ ああああああ

！

！ ！ ！

釣竿袋の後端に炎が灯ると、雷の「」とく初速度イコール最高速度
な勢いで爆進する。

三人を乗せた釣竿袋は、サンドワームの吸い込みを事も無げに振
り切った。

「やつた、モンスターが完全に見えなくなつた！」

無事自由への逃走に成功した。

さすがはマホツカ、そこにシビれる、憧れ……は審議中。

「マ、マホツカ、もう止まつても大丈夫だよ」

空氣の壁が顔に当たつて非常に痛い。そろそろ限界だ。

「…………

あり？ マホツカさん。

「どうしたマホツカ、モンスターはもういないぞ」

前方に顔を固定させたまま顔を青くするマホツカ。

「まさか止める方法を忘れたとかないよ……ね？」

「…………ち、違つ

「何が違うんだ？」

「ダメ、なの…………よ」

「へ？」

「な、何が？」

「何がつて、止まることよ！ この魔法は効果が切れぬままでこのま
まなの！」

「「な、何だつてーーー？」」「

砂塵を巻き上げながら爆走するホウキ星ならぬロッドスター。強
烈なGに骨が悲鳴を上げる。

「い、いつまでかかるのーーー？」

「少なくとも十分以上よ！ 嫌なら手を放しなさいーーー！」

いやいやいや、いくら柔らかい砂地だからって、この速度で落下
したら骨の一本や一本ぐらい折れちゃうつてー
「なぜ前以もつて説明しなかつたんだ！」

「あの状況じゃ、そんな暇なかつたでしょーが！」

「マホツカ！ 前！ 前！ 砂丘にぶつか

THE FEDERAL BUREAU OF INVESTIGATION

モンスターと戦闘するも逃走するも、どちらも命懸けすぎる。

い、生きている、って、すばら……し……。

砂漠のヘヴンズドライブから解放され、それから彷徨うこと数時間。既に体力も精神力も限界を超えていた。お花畠と川が見えるのは気のせいだろうか。

このままでは「その後勇者達の行方を知る者は以下略」になってしまう。

だが、神様はわたし達を見捨てはしなかった。

「オ、オアシスだ！ 今度こそ本物だーー！」

蜃氣楼によるフェイクオアシスに一回騙されること三度目の正直、ようやくにして水分補給できる約束の地へと辿り着いた。

「こ、ここが楽園なのか……」

「そうね、アム・シェアーではなさうね……」

すぐオーバーな表現をしているけど、今のわたし達にとつては過言ではない。

ではさつそく、清水で喉を潤すとしますか。

と、オアシスの池の水をすくったとき、ふと気付いた。

「ちょっと濁ってる？」

精霊の洞窟にあつた回復の泉みたいな透明な水ではなかつた。喉の渴きは癒えるかもしれないけど、その後で腹痛に襲われそうで怖い。

「ふふん、そーいうときは、任せなさい」

マホツカはガサゴソとロープの中で何かを探し始めた。もしかして策有り？

「飲み水で困った時はコレに限るわね」

取り出したのはトールサイズのタンブラーだった。ウイッチハットとブルームのロゴマークが描かれたカラフルなデザインが可愛らしい。

見た感じは普通のタンブラーと遜色はない。何かのマジックアイテムだらうか。

「これは魔法使いの七つ道具がひとつ『アルカナ・タンブラー』よ。どんな濁つた泥水だって簡単迅速に飲み水にできるのよ！」

店頭でやつてある実演販売の売り文句みたいな説明だな。

「どうやって使うの？」

「まずフタを開けて、そこに液体を入れて……」

マホツカはタンブラーにオアシスの水を適量注いだ。ふむふむ。

「次に魔力を込めて、よーーーーーく回す」

やっぱ何事も基本は回すことにあるよね。

「そして完成！」

はや！

「ほりつ、飲んでみなさい」

マホツカからタンブラーを手渡される。フタを開けてみると

「おおっ！ 本当にキレイになつてる！」

濁りがなくなつて透明な水になつていて。さつすがマホツカ先生。

「それじゃお先に失礼、いつただきまーす」

「一つ気をつけないといけないことがあるのよね。その水は」

マホツカが何かを言いかけたけど、わたしは気にせず水を口に含んだ。

数時間ぶりの水分だ。きっと天上の味がするに違いない

「？ むがむぐむぐ？」

「どうしたんだ勇者？」

「何か……おいしくなくないですか？」

「何なの、この味は？」

「どうか味がない。

「このタンブラーには欠点があつてね、水分以外は完全にろ過しちやうのよ。つまりは超純水になるわつけなるほつど、どうりで無味無臭なわけだ。

早く改良版が出ないかしらと小言を呴くマホツカ。別に飲めない

わけではないので、そんなに気にすることでもないけどね。
わたし達は水の大切さを改めて五臓六腑に染み渡らせながら、ひと時の休息を過ごした。

そして、

「これからどうしようつか？」

結局ピラミッドの字も見当たらなかつた。

「そもそも本当にピラミッドなど存在するのかが疑問だ。やはり、あのオーナーに騙されたのかもしれん……」

「マホツカ、アルフォンの地図で位置をつかめないの？」

精霊の洞窟の場所だつて分かつたのだ。伝説のピラミッドの位置だつて

「ん~、無理ね。暇鳥がいた塔と同じで、データベースに登録されていない場所は検索に引っ掛からないのよ

「む~ん、どうしたものか……、ん？」

「あれは……人？」

池の反対側に人影らしきを発見した。てか人だ！

「あの人に聞いてみない？ 何か知ってるかも」

「人だと？ どこにいるんだ」

「あそこだよ。池の向こう側」

「ん~……、よく見つけられたわね」

並みの市民プールよりかは広いオアシスの池。確かにそう言われてみると、どうして人がいるつて分かつたんだろ。草木も鬱蒼としているし。

まあ、偶然目が捉えてしまつたに違いない。

「ちょっと尋ねてくるね」

「待て勇者、危険だ」

心配性な戦士の制止をスルーして話しかけにいくわたし。果報は寝てもやつてこない。どん詰まりに陥つたときは、とにかく小さなことでも行動あるのみだ。

「すみません」

「…………？」

全身をアースカラーの旅装で覆つた旅人然とした人だつた。身長はわたしと同じぐらいで、やや細身な印象。顔も目の部分以外を布で隠しているので、男性か女性かはイマイチ判断が付かなかつた。

「旅の人ですか？道に迷つてしまいまして。ペラミッドに行きたいのですが、どう行けばいいか知らないですか？」

「東の流砂地帯を抜けたところに、巨大なモンスターが徘徊しているらしい」

「モンスターが？」

「どうやら縄張りを守つてこようかな気配だ」

「縄張りを守つてこようかな気配だ」

「でもわたし達は急いでペラミッドに行かなければならんんです」

「ペラミッドに行くには、モンスターの縄張りを抜けるしか方法はない。わたしが抜け道を案内してやってもいいんだがな。

ただし、気が変わつたら、いつでもわたしは抜けるからな」

仲間にしますか？

はい

いいえ

へ？

何ですかこのイメージは？ 初出だな。

それと会話がやたらと居つぼくなつちゃつたけど、どして？

「あーつと、ちょっと待つてもらえませんか」

トトロと、戦士とマホツカがいる場所まで戻る。

「どうした勇者、やはり怪しい人物だったのか」

「いやや、どうやら仲間にできるみたいなんだけど」

「仲間ですか？ あんな不審者を？」

うん、まあ、怪しげで怪しく見えるけど、砂漠のど真ん中で黒服な格好をしているマホツカだつて十分不審者に見えます

けど。

「あの出で立ちは明らかに賊に違いない。危険すぎるぞ」
でも、モンスターを回避する抜け道を知っているつていうし。それに、

「元はと言えば、二人のせいでこいつなったんだから、今回は文句なし」

「むう、勇者の決定となれば仕方がない」

「まったく、意外と醉狂ね、アンタも」

しゃーねーなー、な反応をする戦士とマホツカであつた。

一人が危惧するように、見知らぬ人物をパーティーに加えるのは危険かもしれない。

だが、わたしにはなぜか彼（彼女？）が他人とは思えない感じがした。仲間になるべき存在がすると言いますか、匂いが漂うと言いますか、口ではうまく説明できないな。

これはもしや、勇者に備わる第六感だつたりする？

とにかく、話はまとまつたので、仲間に加えるべく三人揃つて池の反対側へと移動した。

「道案内お願いします。えっと、名前は……」

「好きに呼べ」

「まじですか？ 本当に好きに呼んじゃうよ、ふつふつふ。

「どうする？」

「では『盗賊』だな」

「ストレートすぎるわね。そこは『シーフ』でしょ」

「捻りがないよ、一人とも」

てか、まだ職業が盗賊つて決まつたわけじゃないでしょ？が。

「じゃあ何よ？」

「うーん、やっぱ『ジユーダス』？」

「どんな脈絡でそつなるのよ。意味分かつて言つてるの？」
すいません、ただ言つてみたかつただけです。

「では『アサシン』でどうだ」

「そつくるなら『シャドウ』がいいわね」

「ダメダメ、それなら『クライド』でしょ！」

「『どうしてそうなる』」「んだ」「のよ」

と、ブレイнстーミング感覚で五分ほどトイスクッシュョンした末、ようやくにしてコンクルージョンした。

「満場一致で『ヤシチ』に決定しました！ よろしくね、ヤシ

「……盗賊でいい」

ええー！ 好きに呼べって言ったのに、モー。

それとやつぱ盗賊なんですか。指名手配とかされていないよね？ まあ、細かい事は無視しよう。

「それじゃ、しばらくよろしくね、盗賊」

手を差し出すと、少し躊躇されたが、最後は握ってくれた。

「あつ、わたし達の名前は」

「好きに呼ばせてもらひう」

クールなのか、自分勝手なのか、線引きの難しいタイプだな。と、盗賊の何かがわたしに流れ込んでくる。おおつ、この感じ久しぶりだな。

職業	盗賊
レベル	17
武器	叩き潰す小太刀 (+5) 名状しがたい小太刀 (+3)
防具	忍びの衣
装飾品	忍びの小手 忍びのカフス

あの、装備がすごいー！ 忍者と主張しているんですけど……、本当に盗賊なの？

それと武器に変な言葉が修飾されているのは、ツツ『ミ待ちなんですかね？

ま、いつか。いろいろと複雑な事情があるのでう、ん？

スリーサイズ B90・W58・H88

推定Gカップ

スリーサイズ……だと？

ということは女性なんだ。まあ、声はそこそこ高かつたし……。
つてそんなことよりもGカップってどゆこと？ 胸元はスラリと
してますけど、どこにそんな豊満なバストリーがあるというんです
か！？

「どうした、行かないのか？」

着やせするタイプなのかな……。気になる、実に気になる、非常
に気になる。

サンデワームとの遭遇率が低い抜け道を越えると、そこには砂丘のない穏やかな平地が広がっていた。不思議なことに、視覚から暑さを訴える陽炎がない。砂の色には黒味が混じり、明らかに今までの砂漠地帯とは異質であると分かる。

ここには何かがある、と言わんばかりの光景だつた。

「ここまできれば奴らは襲つてこない」

どこかほつとした様子で、盗賊は安全性を保障した。

「どうして分かるの？」

わたしの疑問への解答として、盗賊は屈むと砂を一握した。サララとそれを下に落とすと、砂は風を受けているのにもかかわらず、ほぼ垂直に落下する。

「詳しい理由までは分からぬが、この辺りの砂は非常に硬く、そして重い。虫も棲息するのに適さないのだろう」

「なーるほど」

確かに、この硬度なら地下を掘つて進むのも一苦労に違いない。それにしても、随分と詳しいね。

「なぜそんなことを知つているんだ」

未だ盗賊に対して疑心暗鬼な戦士。言葉にも探るような含みがある。

「わたしから言わせれば、おまえ達が無知なだけだ。よく情報を何も持たずに、この砂漠に足を踏み入れたものだ。無謀にも程があるぞ」

「ぎくつ」「うぐつ」「むぐつ」

痛いところを的確に突いてきますね……。

でもさ、伝承の伝説なんだよ。情報なんて易々転がつてないでしょ？

「そんで、肝心のアリバビアはあるのよ？」

「それが問題なのだが……」

と、盗賊は懐から小さくて台形型の物体を取り出した。十セント硬貨ほどの大きさで、厚みも同じぐらい。

「この中にピラミッドの位置情報が入っているらしいのだが、解析方法がついぞ分からなかつたんだ」

ありとあらゆる手段を試したと付け足す盗賊の瞳には、「不覚」の一文字が浮かんでいた。

「それで、何これ？」

「さあな、皆目検討が付かない」

「『ギガバイト』と書かれているが、何かの暗号か?」

「売人によると、『魔法使い』なら扱えるかもしれない代物だと説明された。だから……」

「ん? 何よ?」

魔法使いと言えば、マホツカの出番だ。

「マホツカ、これが何なのか分かる?」

「何つて、ただの『SDカード』じゃない」

「――SDカード?」「――

「そんなことも知らないの?」な表情で答えるマホツカ。いや、普通知らないよ。

しかし「SD」って、スーパー・デフォルメの略……じゃないよね?

「まあ、アンタたちには縁のない物ね。貸してみなさい」

マホツカは盗賊からカードを受け取ると、なぜかアルフォンを取り出した。

「ワタシの機種は標準で対応しているからね。スロットに挿して、フォルダを開くと」

カチッと、小気味良い音が鳴り、アルフォンにカードがピタリと刺さる。

「いったい何だ、あの奇天烈な鉄の板は?」キテレツ

頭上に「?」マークを浮かべる盗賊。その気持ちはよーく分かる。

「うー……ん、たぶん気にしたら負けだと思つ

わたしだつて未だにアルフォンの構造はさっぱり分からぬ。とにかく便利なアイテムという認識だ。世界地図の閲覧からホテルの予約までできるなんて、どう考へてもオーバーテクノロジーだよね、あれ。

「中身はEXEファイルか。念のため『ウイルスバスターZ』でチエックして……………OK そんじゃ実行つと」
どこか信頼性に欠けるお化け退治屋っぽい名称が聞こえたような。「何か分かったのか？」

「もうちょい待ちなさい、今インストール中だから…………（プログレスバーつていつもてきとうなのよね）…………、やつと完了したわね。えーっと、マップアプリつ？」

地図、とな？

つてことは、ピラミッドの場所が記載されているのだろうか？

それだつたら話は簡単だ。

「砂漠の地図みたいね」

アルフォンには砂漠地帯の地形図と、波紋が広がるよつて赤く点滅する光点が映し出されていた。その点がピラミッドの位置だらうか。

「現在地が分かるアプリを立ち上げるわね…………これでよし」

一つの同じ地図が重なる。縁の点がわたし達の現在地、赤い点がピラミッドの位置だとすると なるほど、北に真っ直ぐだね。

「よし、さつそく出発だ！」

「そうね。距離もそんなに遠くな ？」

「どうしたマホツカ」

なぜかアルフォンを凝視しながら固まるマホツカ。電池切れ？

「点が……消えた？ 違う、何で勝手に移動してんのよ？」

地図を再度確認すると、確かにさつきまで真北にあつたはずの赤い点が、正反対の真南に移動していた。

「暑さで壊れたとか？」

「そんなわけないでしょ。かの有名な《メガグラビトン・ショック》並みの耐久テストやつてる堅牢タイプの機種なのよー。」
それはすげーな。

「もしかすると、例の噂は本当だつたのかもしれないな」「噂？」

「このペリカンは、どうやら移動するらしいんだ」「ええっ？ どこの砂漠のお城だよ。

「でも一瞬で移動したわよ？」「うー

「そうだ。まるで幽霊のようだ突然として現れたり消えたりするらしい」「

幽霊船ならぬ「ペーストグレイブ」ですか。世界には不思議が多すぎ

る。「とにかく地図通りに歩いづ。移動される前に着けばいいんだし」

「その考えは、甘かつた。

「そうね。目標は南よー。」

と、わたし達はとりあえず地図を頼りにペリカンへと向かった。

十分後。

「移動したわ？ 東よー。」

二十分後。

「また移動したわ？ 今度は西よー。」

三十分後。

「むきー！ また移動したわー？ 今度は真南よー。」

四十分後。

「んががあー！ 何で着く寸前で移動すんのよー 今度は北西よー。」

一時間後。

「ま、また……移動したわ。次は……東、……（ドサ）」「つて、マホツカが倒れた！」

「くわつ、」これでは無闇に体力を消耗させるだけだ

「どうやら、わたし達のことを感知しているように思えるな
まじですか。どんだけシャイなピリミッシュなんだよ。もしくは建造
主はピンポンダッシュの被害経験があるに違いない。
「どうする勇者、分散するか？」

んー、

「いや、それは無理じやないかな。結局誰もいない方向に逃げられ
そうだし」

わたし達の存在を感知しているのなら、それを掻い潜る手段を考
えないと……、

！　ピキーンと豆電球が点きました！

「マホツカ、透明になれる魔法とかない？」

「ぜえ……ぜえ……え？　透明になる魔法？　そんな便利なものが
あるわけ……あるわね」

「おおー！　それじや是非お願ひします」

「悪いけど、その魔法は絶対に使用しちゃいけない暗黙のルールが
あるのよ」

え？　何で？

「知らないわよ。ワタシの師匠がそう言つてたの。だから無理」

えー、けちー。

「透明になるか、それならわたしに任せぬ」

おつ、盗賊に策有り？

「ふつ、特別に見せてやろう。盗賊の七秘術がひとつ《木の葉隠れ
の術》だ！」

ハツ！　という掛け声と共に両手で印を結ぶと、どこからか深緑

な木の葉が舞い乱れた。

「これで問題ない」

葉っぱがどこかに消えると同時に、わたし達は光を屈折しない身

体になつていた。すつげ、『カイバル湖』もびっくりだ！

「こ、これがあれば、あんなことやそんなことが……むふふふふ
「何しょーもないこと考へてるのよ。唇の隙間から煩惱ぼんのうが見えてる
わよ」

おつと、いかんいかん。

それにしても、是非ともこの教授願いたい術だな。

しかし、その前に確認しておかなければならぬことがある。

「ねえ、この術つてさ、秘術ひじゆつというより『忍術』だよね？」

「さあ、効果が切れる前に行くぞ」

くわつ、無視された。

汚いさすが盗賊きたない！

？？・名もなき王墓のガーゴイル（ズ）

「ダンジョン・イン！」

透明になつたことで無事四角錐の巨大なお墓へと到着することができた。

ここまで道のりはほーーーーんと長かった。まじ長かったよ。だが、ここで気を緩めている場合ではない。本番はこれからだ。『黄金の爪垢』を手に入れるために、僧侶ちゃんを取り返すために、気合入魂！兜の緒を締めなければ！

「みんな、いくよー！」

わたし達がいる場所は、正確にはダンジョン内部ではなく、ピラミッドをぐるりと囲う廊下だ。そしてこれから内部へと、

「待て勇者！」

「げふあつー？」

入り口に向かつて歩き出そつとしたわたしを戦士が横から突き飛ばした。な、なぜー？

「ピラミッドと言えば『罠の聖地』と呼ばれるほどダンジョンだ。こつやつて

と、入り口に向かつて石を投げる戦士。

「用心しながら一歩ずつ確実に歩を進める必要がある

いや、それ用心しすぎだろ！

「落とし穴、流砂の床、針の天井……などなど例を挙げれば枚挙に暇がない。^{いとま}どれも古典的な罠だが、ゆえに油断が生じる。数多の財宝に目が眩んだ墓荒らし達が罠によつて命を落とした事例はたくさんある」

戦士が言つてることは一理ある。

そう言えば、そんだけトラップ仕掛けておいて、建造に駆り出された人たちはよく大丈夫だったよね。それとも何人かはやつぱやつちやつたのかな？

「ワタシが仕入れた情報だと、全部の宝箱にミイラモンスターしか入ってなかつたって聞いたわよ。幾人もの財宝に目が眩んだ墓荒らしたちが回復薬切れになつたとか」

「宝箱じゃなくて、ちゃんと棺桶に入れといてあげよつよ。死人に鞭打ちすぎでしょ。」

「わたしの諜報活動の結果によれば、財宝は存在しても手に入らないケースがほとんどらしい。万余の財宝に目が眩んだ墓荒らし共が最後の最期で罠にはまるらしい。だが『ちゃつかり者属性』を身に付けている者は、一掴みの宝石を得られて脱出できるとの統計だ」なんじゃいそら。それと財宝に目が眩んだ墓荒らしつてどんだけいるんだよ。」

「まったく、みんなして心配性なんだから」

確かに内部には危険な罠が張り巡らされているのかも知れない。だけどまだ入り口前だよ、エントランス前つすよ。そんな心構えでは中に入るこことすら……

ビュツ！ と空氣を焦がすよくな音！！

「ほわちやつ！」

突然、死角から熱の線がわたしに襲つてきた。リンボーダンスさながらの姿勢で、すんでのところでかわす。熱線が床に当たると、その部分が焦げて真っ黒になつた。まじ危ねー。

「敵か！」

しかし、それらしい姿も気配もない。

「気を付ける、あの石像だ」

盗賊の言葉に、入り口の両脇に配置された二つの石像を見る。悪魔の姿を模つたその片割れの目には赤い光が灯つていた。あれが巷間で話題の『目からビーム』なのか！

『ガハハ、今の攻撃を回避するとは、なかなかやるな』

『グハハ、少しは楽しませてくれそ�でなりよりだ』

石像が喋つた！？

ガーゴイルAが 現れた！
ガーゴイルBが 現れた！

ただの排水用のオブジェクトだと思つていた一体の石像は、ゆっくり動き出すと両翼を広げて飛翔した。

「ふつ、悪趣味な門番だな」

うん、確かに。

「エサ代には困らなさそうね」

うむ、確かに。

「一体同時か。相手にとつて不足はなさそうだな」

戦士は愛剣である鋼の剣を、盗賊は一本の小太刀を構える。
一週間ほど前のわたしはモンスターを前にして臆していた。だが、魔王との戦いを乗り越えた今では、これぐらいで取り乱すことはない。

「わたしと戦士、それと盗賊でAを攻撃！ Bはマホツカ、ちゃちやつと倒して！」

「A？」

「左の奴か？」

「B？ 右の方をやればいいのね？」

「そゆこと

あーそつか。みんなにはコレ見えないんだつけ。

「いくよ！ 戦士、盗賊」

「いいのか？ あの魔法使い一人で」

要らぬ心配だよ。

『グハハ、舐められたものだな。こんな小娘一人が相手とは』

「あん？ ナメてるのはアンタの方よ。石像は石像らしく、黙つて固まつてなさい！」

一体相手であろうと、マホツカがいれば一体はいないも同然だ。
「侵蝕する絶氷の空氣よ、おしゃべりな番犬もじきを黙らせなさい！」

何だかな……、上の句はいいのに、下の句はどうにかならんのですか。

「氷結せよ！ 『アブソリュート・レイド』……」

『ㄡオツ…』

魔法の攻撃対象であるガーゴイルB周辺の空気が一瞬で絶対零度に変化すると、ガーゴイルBを氷の牢獄へと閉じ込めた。

「ほい、終了！」

マホツカがパチンッと指を鳴らすと、氷が中のガーゴイルB」と砕け散つた。

「残りはまかせたわよ」

戦闘開始から一分経たずして片方を撃破した。よつしゃ、残り一體！

「氷の魔法……、たつたの一撃とは」
でも一発しか使用できないんだけどね。

「こちらも負けてはいられないぞ！」

戦士のカツに、剣を握る手に一層力を込める。

「てりやつ！」「はあつ！」「はつ！」

勇者の 攻撃！

ガーゴイルAに 34のダメージ！

戦士の 攻撃！

ガーゴイルAに 108のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイルAに 54のダメージ！

ガーゴイルAに 6のダメージ！

うーん、やっぱわたしが一番弱いのか。

それにしても、盗賊もなかなかやりますね。さすがは一人旅をしているほどはある。

でも、余計なおせつかいかもしれないけどさ、『名状しがたい』

方の小太刀は装備を取り替えるべきなのでは？

『薄汚い賊共が、喰らうがいい！』

ガーゴイルAの 攻撃！

クリティカルヒット！！

盗賊は 53のダメージを受けた！

と思つたら 攻撃を回避していた！

「ふつ、『身代わり術』だ」

ガーゴイルAの攻撃が盗賊にクリーンヒットしたと思った瞬間、どこからか出現した丸太が攻撃を代わりに受け、盗賊はいつの間にかわたしの隣に立っていた。どこに隠し持つてたのそんな物？『ガハハ、見た目に反して腕は確かのようだな』

？

片割れを倒され、自分も圧倒的に不利な状況なのに、随分と余裕だな。

「ただのブラフだ。一気に止めを刺すぞ！」

その勇猛果敢さは、昨日のポーカーで發揮してほしかったよ。

「まつ、変な攻撃を仕掛けてくる前に倒そ

ビュッ！ と空氣に穴を空けるような音…！

「ひょいやつ！」

注意がほほガーゴイルAに向いていたところに、熱線がどこからか再び襲い掛かる。流れるような無駄のない無駄な動きで体を折りつつそれをかわす。まじ危ねー。

「ど、どこから…？」

ガーゴイルBが 現れた！

ガーゴイルBの 攻撃！

勇者は 攻撃を回避……なんですんだよ、空氣読めよ！

うぜー、余計なお世話だ！

『グハハ、おいしいおいしい』

「えー！？ まだいたの？」

『ガハハ、さあどうした』

あわわわわっ！ どうすりやいいの、どうすりやいいの！？
「慌てるな、まずは確實に目の前の一体を倒すぞ！」

さつすが戦士、戦闘に関しては冷静で頼りになるな。

そうだ、これしきの事など魔王の繰り返し復活に比べればたいしたことではない。

「おりやつ！」「りあつ！」「はつ！」

勇者の 攻撃！

ガーゴイルAに 32のダメージ！

戦士の 攻撃！

クリティカルヒット！！

ガーゴイルAに 212のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイルAに 48のダメージ！

ガーゴイルAに 10のダメージ！

ガーゴイルAを 何の面白みもなく倒した！

無視無視、ここはツツコミを一時的に封印しよ。

「よし！ そいじゃ追加分もこの勢いで倒しまー！」

ガーゴイルAが 現れた！

「うそでしょ！？」

「む、無限ガーゴイル……だと？」

造形がまったく同じな石像モンスターがまたまた現れた。

「まさか、『分身の術』なの……か？」

「「それはない（きつぱり）」」

しつかし唐突に現れたよね。もしやピリパリシードに配置された石像全てが敵意を持つて襲ってくるとか？

でもぐるりと見渡した感じ、この入り口にあるのしかないみたいなんだけどな…………ん？ よく見ると、アルファベットが同じじやん！ ってことは……、

「もしかして、復活しただけ？」

『ガハハ、よくぞ見破つたな、賊よ』
だから、賊じやないつて。

『グハハ、そうだ、我らこそが』

ガーゴイルA・B改め

ガーゴイル・ブラザーズが 現れた！

ブラザーズだつて？

「兄弟なの？」

『ガハハ、我らは血ではなく石を分けた兄弟にして、一心同体の存在！』

『グハハ、片方が倒れようとも、すぐに復活できるのだ！』
う、うぜ……。

『面倒なモンスターだな……』

『ふつ、ならば一体同時に倒せばいいだけの話だ』
そつか！ だつたら 、

マホツカの「とつとと倒しなさい！」という野次を聞き流しながら、わたしは勇者の力を使用する。

『バーサーカ雷の狂化魔法』！

一体同時に相手しなければならないのなら、短期決戦で終わらせる！

「だあつ……」「はあああつ……」「はつ……」

勇者の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に

48のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に

55のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に

60のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に

49のダメージ！

戦士の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）に

91のダメージ！

盗賊の 攻撃！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に

50のダメージ！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）に

7のダメージ！

よし、こうやって均等にダメージを与えていけば

『ガハハ、甘いぞ賊共が。頼んだぞ弟よ！』

『グハハ、任せてくれ兄者よ！』

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）は 融合をした！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）は 体力が全回復した！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）は 枯ち果てた！

ガーゴイル・ブラザーズ（兄）は ガーゴイル・ブラザーズ（弟）

を復活させた！

ガーゴイル・ブラザーズ（弟）が 復活した！

これぞ美しい フラタニティ！

はあ！？ なんじゃそりや？

せつかくダメージを与えたのに、こんなのどうしろってんだよ。

『ガハハ、墓荒らし風情が、ここでミイラの仲間入りになるのだな』

『グハハ、安心しろ。立派な棺桶を用意しておいてやる』

『うう、やばい。

『ふつ、墓荒らし風情とは笑止千万。これでも遊びで墓荒らしをやつているわけではない！』

そんなこと言明されましても。それと、わたし達三人は墓荒らしじゃないからね、盗賊はそうかもしないけど。

「見せてやるう、盗賊の七符術のひとつを！」

符術？

「碎け散れ、《爆碎符》！」

盗賊は御符のような紙切れを投げつけた。

『ウオ？』

ガーネイル・ブライザーズのどっちか（見た目同じだから分かんない）の額に、紙がペタリと貼り付く。

「発！」

『？ ドギヤパ――――――――！』

おわわっ、いきなり紙切れが光を放つと、石像が言葉通りに爆砕した。つてええ！？ ただの紙切れじゃないの？

『貴様、よくも弟を！ すぐに復活してや』

「遅い！ 《爆碎符》！」

『ヌオ？ デイギヤパ――――――――！』

断末魔を上げながら兄も石屑と成り果てた。

「恐ろしい術だな……」

「何だかトラウマを覚えそうね……」

しばらく破片となつた元モンスターを眺めていたが、バラバラになつた石の欠片は元には戻らなかつた。

「ふつ、雑魚が」

盗賊さん、マジこええつす。

？？・第一層・やつぱり隠れ御用心？

下品な笑いをする石像兄弟を倒したわたし達は、やつぱり隠れ御
ド内部へと進入した。

まず手始めにお出迎えしてくれた第一層は、狭い通路が真っ直ぐ
延びるフロアだった。人が一人分通れるぐらいの幅しかなく、天井
も低い。圧迫感で息が詰まりそうだ。

それと敵に挟み撃ちされたら嫌だな。戦士でなくとも慎重に進み
たくなる。

だが、そんなことは想定の範囲内だ。ツツ「ハハハ」は別にある。
「随分と明るい内部だな。これならカンテラを使う必要もあるまい」

「そう……だね」

「そう……だな」

「そう……よね」

盗賊の「ぐく自然な感想に、わたし達三人は口を揃えて相槌を打つ。
「灯りが一切見当たらないな。どうこう仕組みなのだろうか」

「えー……つと、気にしたら負けだと思つ」

「？ 何か知つているのか」

「いえ、別に。」

精靈の洞窟と同じく親切設計この上ないダンジョンだな、このピ
ラミッドも。グッドなデザインの賞に選ばれた有名仕様なのだろう
か。

「ふつ、まあいいか。探索するのには好都合だ」

「そうだよね、電気料金をわたし達が払うわけじゃないし」

そんなことよりも、率先して先頭に立つた戦士が、さつきから通
路の前方に石を投げては罠の有無を確かめているのが気になる。そ
こまで心配する必要ないんじゃない。

と、転がつていく石が突然消えた。

「落とし穴？」

一本道の通路を進むと、六角形の太い柱が天井を支えるひらけた場所へとたどり着く。

そこにはメタボな人でもすっぽり落とされそうな大きな穴があつた。穴が深いのか地下が暗いのか、穴はまるでインクの水溜りのように不自然なまでに黒かった。

「かなり深そうだな」

試しに石を落としてみると、落下音がいつまで経っても聞こえてこない。

「でも、こんな分かりやすい落とし穴に引っ掛けることなんてないでしょ」

「そうだな、これに落ちるなど愚の骨頂だな」

「そうよね、これに落ちるなんてバカの極みだわ」

「そうだな、これに落ちるとは忍びの恥……おつと、盗賊の恥だな
もうバレバレなんだから隠す必要ないと思つけどな……（ツツコ
ミ待ち？）

その話題はとりあえず脇に置いといて 先に重要な問題を片付けなければ。

「どうやら、分かれ道みたいだね」

一本の柱の間に落とし穴がある分岐点には、そのまま直進する通路の他に、左右それぞれ枝分かれした、これまた細い通路があつた。

今回は地図がないので選択に迷うところである。しかし、

「こいつときは、すばり『左手の法則』でしょ！」

時間はかかるかもしれないけど、下手に進んで迷うよりかはましだからね。

「その法則は当てになるのか？」

なるなる。瞳の色が変わる人のお墨付きだし。

「そいじゃ、さっそく左手を壁に当てて進みましょー」

と、左側の通路に足を踏み入れた瞬間、足裏から嫌な感覚が起こる。

「？ ぎょえびばえ――――――！」

わたしの全身をビリビリの衝撃が血液の「」とく隅々まで流れる。

「これはもしや、電流床か？」

「そうみたいね。何万ボルトぐらいいあるのかしら？」

「実に恐ろしい罠だな」

つて、何でみんなして冷静に分析しているんだよ！

誰も助けてくれなかつたので（助ける側も危険だから仕方ないけど）、自力で電気が流れる通路から離脱する。

「うづー、死ぬかと思った……」

「いや、普通は死ぬかと思つが」

「さすがは勇者だ」

「便利な身体ね」

電気や雷ならわたしはへっちゃらな身体なんだよね。まじで命拾いしたよ。初めて勇者に生まれてよかつたと思えたかもしれない。

それに身体が軽くなつたような気がする。充電完了？

「左の通路は電流の床か……。やはりこのダンジョンには危険な罠が仕掛けられていることが分かつた。ここからはより周到に進まなければならぬぞ！」

戦士は右側の通路を選ぶ。わたしの被害を考慮してか、入念に足で床を叩きながら一步ずつ亀の歩みで進む。口が暮れるよ、それじや。

「ふむ、右の通路には何も罠がないようだ」

と、戦士が両足を揃えた刹那、床からカチッと音が鳴つた。

「？ ぬおはあつー！」

突然床が爆発を起こし、戦士が閃光と火花が混ざつた黒煙に包まれる。

「これはもしかして、地雷床？」

「そうみたいね。 TNT火薬何キロ分ぐらいいあるのかしら？」

「実に危険な罠だな」

つて、冷静に分析している場合じやないよー。

「「」はつ、「」はつ。」「、これしきの衝撃など露程も痛くなどないー！」

「いや、普通は重傷を負うと思うが」「さつすが戦士だ」（言葉に多少の強がりが含まれていてるっぽいけど）

「無駄に頑丈な身体ね」

しつかし電流床に地雷床のトラップがあるとは。どうやって進めばいいの？

「まったく、アンタたちには難儀ね。こつやつて宙にいればなんともないのに」

天井近くまで高度を上げるマホツカ。一人だけずるーい。

「ふふー、ん？ 何かしらコレ？」

天井から蜘蛛の糸ならぬ一本のロープがなぜか垂れ下がっていた。

「何かのスイッチかしら？ 気になる、気になるわね……」

「待つてマホツカ！ それを引いちゃ」

「えーい、グイツとな！」

「「「あつ」」」

マホツカは何かの衝動に駆られたかのような感じでロープを思いつ切り引っ張つた。

「？ どがんぱつ！？」

突如天井がパカツと開くと、大きなタライが降ってきてマホツカの頭頂部に直撃した。

「これはもしかして、ド フ？」

「そうみたいだな。何ボケ分の笑撃があるのだろうか……」

「実際に危険な罠……なのか？」

この罠に関しては冷静に分析を行う必要がありそうだね。

「何なのよ、このアホな仕掛けはーー！」

どうやらとんがり帽子のおかげで大事には至らなかつたようだ。

それにして、上からタライを落とすとは、分かつてているな、建

造主よ。

「左右上全部駄目っぽいから、素直に真っ直ぐ進もう」

「そうだな……」

「そつみたいね……」

「…………じー。

「……なぜ三人してわたしを見つめているんだ」

「いや、だつて、ほら、順番的に次は盗賊でしょ。さや、ビーゾビーゾ

ーぞ。

「ふつ、罠を恐れてダンジョン探索ができるよつか

おおつ、何と頼もしいお言葉！

と、盗賊が中央のルートに足を踏み入れた矢先、突如狭い通路に一筋の白く光る線が真横に引かれた。それが通路への侵入者、盗賊に向かつて迫つてくる。

危険を感じたのか、盗賊は懐から取り出したクナイつぽい投げナイフを白い光線に向けて投擲する。すると線に当たったナイフが真っ二つに切断された。

「つ！」

迫り来る凶器を盗賊は屈んでやり過ごす。

だが、それで終わりではなかつた。盗賊がさらに数歩通路を進むと、再び引かれた光線が襲い掛かつてくる。

「これはもしかして……何だろ？」

「見ての通りじゃない。レーザートラップよ」

「「レーザー？」」

「通路の奥に台座があるけど、あれが解除スイッチのようね」

相変わらず訳分からんことを平然と解説するマホツカ。

そのレーザーとやらが、今度は足元の高さで盗賊へと迫つた。

跳躍してかわそつとした盗賊であつたが、いきなりレーザーは上へと軌道修正する。

「くつ！」

盗賊は天井にあつた小さな突起部分を掴むと、身体を持ち上げて紙一重でレーザーを回避した。あ、危なかつた。

「ふつ、これしきのことで」

さらに一步、台座までもう少しのところで、三度レーザーが発生

する。

「これを避けさえすれば」

その希望が絶望に塗り変わる。レーザーが通路の幅目一杯に網の目状に広がったのだ。回避する隙間など虫の通り穴ほどもない。

「盗賊！」

狂気のレーザーが盗賊の身体をサイコロロステーキのように切り裂いた。と脳裏にトラウマが焼き付けられようとしたまさにその時、盗賊が丸太に代わった。

「ふつ……、間一髪だつたな」

と、奥までたどり着いた盗賊が台座のスイッチを押して仕掛けを解除する。

無残に木屑となつた丸太を見ると、先のガーゴイル戦での攻撃痕が残つていた。使い回しつすか？

「くつ、これでは『身代わりの術』はもう使えないか」

まあ、何個も持ち歩けなさそつだからね、つて一個も無理だろ！？

??・トレジャー・ボックス2 ～もしも鍵が掛かっていた～

「これで何個目になるのだろうか。もしモンスターが入っていてもすぐ反応できるよう剣を構える戦士を尻目に、盗賊が通路の小部屋にあつた宝箱を開ける。

「くつ、また空箱か……」

ガチャリと音を立てながらフタが開く。だが中身は他の宝箱と同様に、古びた空氣しか入っていなかつた。どうやら既に、過去にここへと訪れた墓荒らしが持ち去つたようだつた。

「やはりこの貼り紙通りなのか……」

盗賊は憎々しげな表情で壁の貼り紙を睨み見る。

『ヌンヌンヌン

現金になりそうな財宝は
すべて俺様が頂いたぜ！』

「どこの馬の骨だか知らないが、目ぼしいお宝を奪つただけでなく、あまつさえそれを自慢するかのよつた書き置きを残しておくとは、何とも腹立たしい。

「随分とふざけた輩だな」

「もしどこかで会つたらぶん殴りたいわね

ほんとだよ。自己満足にも程がある。

しかしまずいな、『黄金の爪垢』が取られていいか心配だ……。

「まずいな、アレが奪われていいか心配だ……」

?

「アレって何のこと？」

「！ いや、何でもない。ただの独り言だ」

独り言ねえ。盗賊もわたしと共通な心配事を気にかけている様子

だな。

そう言えば、盗賊つてパリナリシドに何の用事があるんだろう。もしかして同じブツを狙っているとかないよね？

「こっちの宝箱は色が違うわよ」

釣竿袋の上で退屈そうに胡坐をかくマホツカが見つけた宝箱は、確かに今まで開けてきた、くすんだ赤色の安っぽい木枠の箱ではなく、黄金色で複雑な紋様が描かれていた。

「ん？ こっちにも貼り紙があるわね」

まさか、これも開封済みなのか？

『なぜこの宝箱は開かないんだ？

いくら鍵が掛かっているとはいえ、頑丈過ぎるだろッ！？

くそっ、開け！ 開けゴマちゃん！ 開けチューリップ！ 開け

ポンキッキー！…』

何歳だよ、この人。

「どうやら未開封のようだな

「鍵付きなんて、レアなアイテムが入つてそうね」

レアなのはいいんだけど、わざわざ大事な宝をこんな普通の部屋に放置しておく必要性があるのだろうか。まあ、ロマンなら仕がない。

「でも、どうやって開けるの？」

「ふふん、もちワタシにまかせなれ」

「やめろっ！」

「ちよっ！ 一人して何で邪魔するのよ？」

わたしと戦士でグレイさんよろしくマホツカを左右から拘束する。そりやそうだ、前回みたいに煙と埃まみれは御免こうむりたい。

「いらないのなら、わたしが貰うぞ」

そう律儀に断りを入れながら、盗賊は宝箱に挑むように前に立つ。動作が板に付いているといいますか、風格があるといいますか。き

つと今まで開けてきた宝箱の数など覚えていないぐらい盗賊業に邁進してきたのだと窺える。あり、褒め言葉かこれ？

「開けられそう？」

「ふつ、わたしを誰だと思つている。磨き上げられたピッキングスキルを披露してやろ！」

おまえ、ただの泥棒だろ……。

ピッキング技術なんていつたいゞこで身に付けたのやら。せいぜいゾンビ屋敷からの脱出にしか役に立ちそうにないの」「では、ござ！」

スキルが足りない！

スキルが足りない！

スキルが足りない！

…………、
えーっと。

「くそつ、なぜ開かない！」

いやー、スキルが足りていなippいですよ、盗賊さん。

「開けられないのなら、張り紙の人と同じく諦めるしかないね」

「盗賊道とは、諦めぬことと見付けたり！」

つい最近、どつかで似たような言葉を聞いた覚えがあるな。

「盗賊の夢はひとつだけ……宝箱を開けたい」

オッサンやらイケメンに同じこと言われても、全然切なくないつすよ。

「宝箱を開けられるのは、開けようとした者だけだ！」

うん、まあ、そうだね。宝くじも買わないことにはアタリもハズレもないからね。

「ふつ、こうなれば仕方がない。見せてやるつ、盗賊の七消耗道具のひとつ

どんだけ『七』つて数字が好きなんだよ！？」

「《デュプリケイト・キー》…」

盗賊が懐から取り出したのは、キーといつては少し遠い、ただの細長い棒だった。

「この道具は鍵穴に挿することで、その鍵穴に合致した形状に変化するのだ」

おおっ、それはすごい。

「そんな便利なアイテムがあるんだ。どうやって手に入れたの？」
「それは秘密事項だ。悪いが宇宙人にでも聞いてくれどゆこと？」

「さあ、中身どこの対面だ」

盗賊はキーを鍵穴に挿す。しばらくするとキーが変色して作成完了を告げた。

盗賊が複製された鍵を回すと、硬く閉じた宝箱のフタが熱せられたハマグリのように勝手に開いた。

はたして、どんなお宝が眠っているのだろうか

盗賊は《不思議なタマゴ》を手に入れた！

「何だこれは？」

「そのまんまタマゴだね……」

二つトリ以上ダチヨウ以下の大ささで、迷路のような模様が殻に刻み込まれていた。

「どうするの、後で食べるとか？」

「むむ、扱いに困るな……」

盗賊は悩んだ末、とりあえず後でじっくり考えると誓い、懐にしまった。

マホツカもそうなんだけどさ、どうしてポイポイっと懐からいろんなアイテムを出したりしまえたりできるわけ？ そっちの方が不思議だよ。

？？・第一層・アイテムの上手な活用術

錠の仕掛けが施された赤い扉の部屋にて、わたしと戦士が扉から左右へ等間隔に位置する床スイッチの上に立つ。

同時にスイッチが押されていることが認識されると、押しても引いても叩いても微動だにしなかつた扉が、解除音を鳴らしてフワッと消滅した。

「よし、この部屋も解除完了」

トラップだらけの第一層から階段（無駄に手すり付き）を上って次の階層へと進んだわたし達一行。

「左右離れた位置にあるスイッチか。『分け身の術』がないと一人では解除が困難だな」

額に手を当てながら盗賊がボソリと感想を漏らすように、ピラミッド第一層はヘンテコな仕掛けが盛りだくさんあるフロアだった。

今みたいな床スイッチであつたり、同じ色を一つ組み合わせると消える謎ブロックであつたり、カラの宝箱を特定のパターンに開閉するであつたりと、いちいち頭を使って謎解きしないとならないので、進むのにやたらと時間を要する。

何度も言つようでくどいけれど、絶対に建造中フロアの行き来に困つただる。

「また、扉か……」

うんざりした様子の戦士。せつかく扉を越えたのに、その先の部屋にも同じ形同じ色の仕掛け扉がテーンと待ち構えていた。

「これで何部屋目よ……」

「確か、ハだな」

わざわざ数えていたんだ、盗賊。

ピラミッドは構造的に、上の階層ほど面積が狭い。第一層の広さから考へるに、第一層は半分ぐらい踏破したかな。確か下では落とし穴のあつた分岐点に差し掛かった辺りだ。

まだまだ先は長そうだね。

「メンドーね。いつそ壁を破壊した方が早いんじゃないかしら?」
試してみたいけれど、建物自体が崩壊する恐れがあるから無しで。

「見たところ、床や壁にスイッチの類はなさそうだな」

「おそらく、あれが解除スイッチだろ?」

盗賊の指先をたどると、やや離れた場所に半透明で灰色の石塊が、
台座の上に固定されていた。宝石のようにきれいに磨かれており、
頂点は三角錐になっている。

「あの石が?」

「ああ。似たような仕掛けを別のダンジョンで見たことがある。衝
撃を与えれば作動するカラクリのはずだ」

「なーんだ、随分と単純だね。」

では、さっそく、

「つて、おおつと?」

石塊スイッチの場所までは床がなかつた。《メタボスライム》で
もすぼつと落とされそうな大きの穴となつていて。これでは壁や天
井を這つていくしかなさそうだ。

でも、そんな蜘蛛男みたいなことをする必要はない。

「マホツカ、ひとつ飛びお願い

宙に浮いているのなら、落とし穴などないようなものだ。

「むむう……パースーで」

タライトラップが余程堪えたのか、マホツカはあれから釣竿袋で
飛んでいなかつた。

気持ちは分からんでもないけど、いかにも怪しいロープを引っ張
つた自分が悪いんでしょ。まあ、おいしかったけどね。

「石を投げて当てれば事足りるだろ?」

戦士は罷検知で使用していた《石ころ》を投げる。美しいオーバ
ースローから放たれた石はストレートで石塊スイッチにヒットした。
ナイスピッチ!

「……む、何も反応しないようだが」

石塊も扉も静かにままだつた。

「あのスイッチはただの石では反応しない」

「衝撃が弱かつたとか？」

「衝撃はさほど強くなくとも作動するはずだ。だが当てる『物』に問題がある。たとえばこのような……」

盗賊がサツと取り出したのは、レーザートラップでも使用していたクナイだつた。

「さつきも投げてたよね、そのクナ」

「これは盗賊の七投擲道具がひとつ、『スローライニング・ダガー』だ」

「いや、クナイだよね？ ねえつてば？」

「はつ！」

わたしの指摘を完全スルーした盗賊は、腕のスナップだけでダガーを投げる。

一寸の狂いもなくダガーは石塊スイッチへ命中した。ナイススローライニング。

すると、今度はちゃんと仕掛けが作動したようで、石塊の色が灰色から淡いオレンジ色の光に満ち溢れる。連動してか次の部屋への扉が消えた。

「なぜ石では駄目だつたんだ？」

「その筋の情報によると『グッズ』認定されている道具でないと反応しないと聞いたことがある。だが、そもそもグッズという単語が何を示すかが分からない。わたしの場合は所持していたクナ……スローライニング・ダガーを当てたら反応したので、今回もそうしただけだ」

スルスルと細い糸を手繕り寄せる盗賊。何をしているのかと思えば、どうやら糸をダガーに結んであつたようで、ちやつかりと穴に落ちたダガーを回収していた。

「まあいつか。解除できるのなら、それでいいじゃん

先を急ぐため、深い事は考えずに次の部屋へと進む。

「また、か……」

そこは一目瞭然で仕掛けがあると分かる部屋しょくだいだった。

細長い部屋には一直線上に並ぶ九つの燭台しょくだいが置かれていた。メラメラと激しく燃える炎は、なぜか熱さが感ぜられず、 스스の匂いもしない。

「今度は何だろ？」

「まさか、全ての燭台の炎を消すとか、か？」

「おそらく、そうに違いない」

試しに一つ、布切れを使って消してみる。

「普通に消えたね。熱くもないし、そいじゃ次も……」

だが一つ目に取り掛かろうとしたとき、消したばかりの一つ目の

燭台から再び火の粉が舞い上がった。

「あり？」

「また点いたわね」

「ふつ、なるほど。刹那の間に全て消さなければならないようだな
め、めんどくせ……」

「四人で分担して消すとしても、今の短い時間で一ひとつ消すのは
難しそうだね」

それこそ盗賊が口にする分身の術を用いるべきなのか？

「ふふん。一一一いつときは、ワタシに任せなさい」

ドンと平らな胸を叩くマホツカ。まさか、氷の魔法で消そうとか
思つてないよね？ 加減を知らないマホツカのことだ、燭台しょくだいと全
部壊すかもしれない。

懷疑的な視線を向けるわたしを余所目に、マホツカはガサゴソと
ローブの中から何かを取り出した。

「じゃじゃん、『フリー・ザ・ペペット』よ！」

フェルト地つぽい素材でできたファンシーな雪だるま型のペペッ
トだった。縫い目や継ぎ接ぎ部分が見つからないのは、マジックア
イテムの証左なのだろう。それと、小枝の腕とバケツの帽子は魔法
使いの世界でもお決まりなんだね。

「腹話術でもするつもりなのか？」

「まあ、黙つて見てなさいつて」

マホツカは九つの燭台が一直線に重なつて見える位置に立つと、ペペツトを燭台に向けて突き出した。

「それつ」

おそらくペペツトに魔力を注いだのだろう。雪だるまの両目が力ツと光ると、口から白い粉雪を吹かせながら、薄氷色の冷氣が吐き出される。ちよつとコワ。

ペームの如く射出された冷氣は、九つの炎を貫通しながら全て消火させた。

すると、やはり運動して部屋の奥にあつた扉が開く。

「ほつ、便利な道具を所持しているようだな」

「本来は防災用のマジックアイテムの一つよ。炎しか消さない特殊な冷氣を出すの」

「一間に一個ほしいね。」

「ところでさ、マホツカと盗賊はいろんなアイテムを持つているけどさ、そんなたくさんアイテムをどこにしまつてるのさ？」
「それは私も気になつていたな。重量だけでも馬鹿にならないはずだ」

いいかげんこの辺りで種明かしをしてほしいところである。

「どこつて、『ふくろ』の中に決まつてるじゃない」

「どことは、『ふくろ』の中以外にどこにしまえというのだ」

「何ですか『ふくろ』って。

「ふくろはふくろよ。口に入る大きさの物ならいくらでも入つて、取り出したいときには、取り出したい物を思い浮かべながら手を入れるとそれが掴めるの」

「旅には欠かせない必需品だな」

そんな便利なアイテムがあつたとは。何で教えてくれなかつたの。

「どこに売つてるの？ わたしもほしいな」

「うーん、完全受注生産だから、時間とお金が掛かるのよね」

「うなんだ。今は無理でも、いつかほしいといつりである。」

と、わたしは有限な量しか入らないマイバッグの中身を見る。これまでの冒険で入手してきたアイテムが入っているが、そろそろ容量の限界かもしれない。

E ショーテル

E 旅立つ人の服

シンヨーク王家の証

精霊の洞窟の地図

薬草

毒消し草

焦げた薬草

小ビン（効果が切れた回復の泉の水）

風の精霊の羽

折れたブロンズナイフ

砕け散った翠銀の槍の欠片

「コミばかりね……」

「そこまで言わなくとも！？」

大事な思い出の品ばかりだ。捨てるなどモッタイナイ！じゅん。お化けは出るなよ。

「なぬ、これは！」

興味なさ気な盗賊であつたが、いきなり目を奪われたようにバッグの中身を覗いてくる。

「面白いものなんて入つてないけど」

「この焦げている薬草、これは……」

ああ、マホツカのせいでのウェルダーンしちゃつた薬草だね。初お宝の成れの果てだ。

「この元薬草がどうかしたの？」

「これは『バーン・ベリー』ではないか」

え？ バーン……何だつて？

「《バーン・ベリー》だ。魔法薬の素材として、かなり価値があるはずだ」

こんな真っ黒なのに？ 毒薬か劇薬の間違いないの。

「……いらないのなら、譲ってくれないだろ？ 」

「まあ、別にいいけど」

わたしが持つていっても猫に小判ザメだからね。思い出はプライスレスだけど、盗賊がほしいというのなら、渋る理由はない。わたしは《焦げた薬草》改め《バーン・ベリー》を盗賊に渡した。「只で貰うのは気が引けるな。代わりと云っては詰まらない品だが、これでどうだろ？ 」

と、盗賊が大きな純白の羽を渡してきた。

『怪鳥の羽』を 手に入れた！

「見ての通り鳥の羽なのだが、それなりに珍しい品だと思われる。アイテム収集家などが欲しがっているかも知れない」
切手マニアならぬ羽マニアですか。いるのかそんな人？
せつかくなので、わたしは『怪鳥の羽』をありがたく頂戴した。
もしかしたら何かの役に立つ……わけないか。

？？・マホツカ先生の魔法教室 ～拳で打つべし～の巻～

「ここは休憩できそうな場所だね」

無意味な仕掛けだらけの第二層から階段（無駄にスロープ付き）を上ると、ちょっと広めの踊り場があった。

どうせ第三層も疲れる何かが待っているのだから、ここらで一休みしよう。

「篝火の跡があるな」

「さっきの宝泥棒かしら」

作業員の憩いの場であったのか、探索者の休憩地点であったのか、篝火跡の近辺には椅子代わりとしてのブロック片がいくつも転がっていた。

「何となーく火を点けたくなっちゃうよね」

寒い冬の日に、暖炉の前で温まりながらうとうとする姿をちょっと憧れていたんだよね。大きなワンちゃんとか飼つててさ、それに寄り添うとか、わふふー！……だけど現実は布の服を『五枚重ね着』で耐え忍んでげふんげふん。

「どしたの勇者？」

「ううん、何でもない、何でもないよ」現実はマジで残酷だ。

それよつか、火種はまだ使えるのかな？

「この炭の匂い、囲炉裏を思い出すな」

囲炉裏つかあ。やっぱ盗賊は東ノ国人なんですかね。

火で思い出したんだけど、ピラミッドには今のところモンスターが出現しませんね。門番の石像に費用を使い過ぎてしまつたのどうか、それとも嵐の前の静けさなのか。いないことに越したことはないけど、逆に不安になる。

まあいつか。それよか休憩休憩。

「マホツカお願い」

「はいはい。ほいと」

指先一つで篝火跡へと火を灯すマホツカ。うーむ……。
「何よ、じつとワタシの指なんて見つめて」

「いやさ、魔法つて便利だよね」

小さな火を熾^あしたり、宙に浮いたりと、モンスターと戦うだけが魔法の使い道ではない。

わたしも一応魔法を使える。だけど如何せん理屈を全く理解していないのだ。ゆえにマホツカみたいに他に魔力を応用することができない。

そうでなくとも、やつぱいろいろな魔法を使えるようになりたいよね、

「そうだ！ せっかくだから、何か魔法を教えてよ」と、マホツカに提案してみる。我ながらナイスアイデアってか何で今まで気が付かなかつたんだろう。確実に戦力アップになるではないですか。

「どうなのマホツカ先生」

「ん？ まあ、減るものでもないから、別にいいわよ」

『先生』という呼ばれ方に気を良くするマホツカ。本人は我慢しているつもりだけど、頬が緩んでいるのがバレバレだ。

「魔法だと？ 是非私も覚えたいものだな」

戦士も興味津々のようだ。魔法戦士に転職つすか？

目を輝かせる戦士に対し、マホツカはなぜか、高望みの志望校を受験しようとする生徒を見る先生の顔になった。

「見たところ、アンタには魔法の素質ゼロだから、一生無理ね。諦めなさい」

「ぐはっ」

真実の刃にばっさりと一刀両断される戦士。余程ショックだったのか、踊り場の隅にて体育座りをしながらずーんと沈んでしまった。可哀想に……。

とりあえず戦士は放つておくとして、わたしはマホツカ先生指導の下、魔法を一つ覚えることとなつた。

「最初だから、簡単なやつでいいわよ」

魔法といえば、やっぱ火の玉を飛ばしたり、雷の矢を放つたりとかが定番だよね。わくてかわくてか。

「一度しかやらないうから、よーく見てなさいよ」

と、マホツカは手の甲を前に向けながら、色の白い両の拳を力強くぎゅっと握つた。

「纏え、『炎の拳帶魔法』！」セスタス

拳を薄つすらと覆う光が、詠唱とともに細長い帯のように変化する。その帯がマホツカの腕にぐるぐると巻きついた。

「はっ、セイツ！」

シュシュツ、シュシュツと軽やかなステップでシャドーボクシングを始めるマホツカ。

そして手頃なブロック片を見つけると、真上から正拳を叩き込んだ。わたしより細い腕なのに、ブロック片は砂糖菓子のように簡単に碎ける。

「どうよー。」

いや、そんなドヤ顔されましても……。

つてか何で拳？

「あの、できれば遠距離攻撃の魔法がいいんですけど……」

その文句に、明らかに不機嫌な顔へと変わる鉄拳教師。

「ああん？ そんな難しい魔法、今のアンタじゃ無理よ」

ええつ、遠距離タイプってそんなに難易度高いの？ 魔法使いの皆さんたちが杖を振りながらちょちょいのちょいって使つてそういうやん。

「せめて拳で戦うのは……拳じゃなくって剣があるし

「剣が折れたときのためよ。覚えておいて損はないでしょ」

いや、まあ、そうだけじゃ。

「そんなに遠距離魔法を覚えたいのなら、まずは魔法学のイロハとホヘトを徹夜で叩き込む必要があるわね。言つとくけど、数学や物

理の比じやないわよ

うげつ、勉強は嫌だ。

「贅沢言つて御免なさい。セスタスでいいです。是非とも」教授お願いします

「分かればよろしい」

念願の遠距離攻撃魔法はお預けのようだ。まつ、次があるわ。「で、どうやって発動させるの?」

まさか、口で魔法名を叫べばいいというわけじゃないよね? ちなみに、わたしの雷の魔法はそんなノリで発動している。何で発動すんだろね。

「魔法はとにかくイメージすることが大事よー。拳帯魔法なら、魔力をセスタスへと変化させるイメージを頭の中で思い浮かべるの」「ふむふ……む?」

「手は一番魔力をを集めやすい場所なの。拳帯魔法はその名の通り拳に魔力を纏うだけだから、魔力を変化させるコツさえ掴めばすぐにできるわ」

えーっと……。

「ん? 説明不足だつたかしら」

「いや、そうじゃなくって」

「マホツカつてどことなーく天才肌つて感じだからさ、てつきり「ギューンと魔力をタメて」、「バーンと炎を腕に巻いて」、「ズガーンと殴る!」とか言つと想像してたんだよね。分かりやすい説明かどうかはいまいち判断し兼ねるけど、案外論理派なんだな。

「魔法は不思議現象じやなくって、ちゃんと理論に基づいた物理現象よ。それが理解できないで、オリジナルの魔法なんか作れないわ」といですか。

「とにかく、まずは習つより慣れろね。複雑なことは考えずに、まずはやつてみなさい」

なるべそ。ならば期待に応えて一発で成功してみせよ! じゃないですか!

わたしは両手に力を込める。イメージだ、イメージ……拳に魔力を纏うイメージを……！

「よし、いくよー。纏え、《炎の拳^{セスター}帶魔^{セスター}法》！」

……、

……、

「あり？ 何も出ないッス」

「何で炎の属性なのよ。アンタが使えるのは雷の属性でしょーが」
やつぱそうなんだ。

でもや、それならそっちでお手本見させてくれればいいのに。

「ワタシは雷の属性はあんまり得意じやないの」

そなんだ？ その割には、精靈王や魔王相手にめつちや強烈な雷の魔法をお見舞いしようとしてたよね。

まあ、マホツカも何だかんだでわたしと同い年だからね。苦手や嫌いなもの一つや一つはあって当然ってことか。

「では改めて。纏え、《雷の拳^{セスター}帶魔^{セスター}法》！」

……、

……、

……！

パチパチっと、冬場の静電気並みの微弱な雷が手の甲で踊った。

「まあ、誰だつて最初はこんなものよね……」

言葉とは裏腹に、いかにもできない生徒を見る教師の顔をするマホツカ先生。そんな目でわたしを見ないでー！

「し、仕方ないじやん。魔法なんて理屈を知るのは初めてなん

「纏え、《氷の拳^{セスター}帶魔^{セスター}法》！」

へ？

魔法を唱えたのは盗賊だった。両腕に冷氣の帯が巻かれているのがはつきりと視認できる。

「な、なぜ！？」

「ふつ、盗賊とは何も物品だけを盗むに限らず。森羅万象を盗むの

ル」

「ジーナの『ペー忍者だよ！？』

「アンタは仮にも勇者なんだから。これぐらいの低級魔法はすぐに
できるようにしなさいよ」

初授業にしていきなり宿題を課せられてしまった。

でもさ、できないう子ほどかわいいものはないって

「センジンの谷に落とすわよ」

「うぐはっ！」

？？・第三層・逃げろ！

キカイヘッドが 現れた！

「いきなり！？」

第三層へと上がった直後、ピラミッド内部では初となるモンスターと遭遇した。

『キカイヘッド』 タマゴを横に倒したよつた流線型のボディを持ち、生やした四本の手足を地につけて歩行するヘンテコモンスター。メタリックなシルバーグレーの体色からは、血と肉ではなく、オイルと鉄で造られたのだと判断できる。

「随分と奇怪な番犬だな……」

うん、そうだね。（機械なだけに？）

「エサは……いるのかしら？」

うーん、どうだろ。（きっとセルフなんでしょう）

「ふつ、立ちはだかる敵は全て倒すまでだ」

戦わないことには先に進めない。とりあえず戦闘態勢へと移るわたし達。

それに反応してか、キカイヘッドのおそらく頭に当たる部分がモールス信号のように数回点滅すると、挨拶代わりの攻撃を先制で仕掛けってきた。は、速い！

キカイヘッドの 攻撃！
マスター！

へ？

キカイヘッドの背中から寸胴型の物体が射出される。白い尾を引くそれは、わたし達四人の真ん中ぐらいまで飛来すると、落下直前で破裂した。

「うげつ！？」「ぐはつ！？」「ぶはつ！？」「じわつ！？」

周囲に赤と黄の混ざったガスが撒き散らされる。

「な、何じゃこりや？ 目が痛いし、それに舌が 辛い！？」
パンとソーセージとレリッシュがほしくなる刺激が沸き起るの
は気のせいか？

「これは辛子なのか？」

「水、水つ！」

「ぬおつ？ 頭巾の中にこもつた！」

阿鼻叫喚の様相を呈するわたし達。マスターってそのままの
意味かよ！ 何という対人間には絶大な効果のある攻撃だ。

「くそつ、怯んでなどいられるか！」

ガスが晴れると、どうにか苦痛を我慢してキカイヘッドへと反撃
を行う。

勇者の 攻撃！

キカイヘッドに ダメージを 与えられない！

戦士の 攻撃！

キカイヘッドに 12のダメージ！

盗賊の 盗む！

『迎撃ミサイル』を 盗んだ！

か、かつてー！？

「見た目通り、鋼鉄の硬さだな……」

腕が痺れるし、ショーテルが一部欠けてしまった。

だが、そんなことよりも 、

「何でちやつかり『盗む』なんてやつてるのさ、盗賊

「む？ ああ、すまない。つい癖で」

まさに手癖が悪いだな。それと『迎撃ミサイル』って何ぞ？

「また来るぞ！…」

キカイヘッドの今度は口に相当する部分が開く。そこからノズル

が伸びてみると、「一ヶと炎が勢いよく噴出された。

キカイヘッドの 攻撃！

火炎放射！

勇者は 燃えた！！

「あつ、あつちいいい！！」

蛇腹のようにうねる炎がわたしを飲み込んだ。

「だ、大丈夫か勇者？」

全然大丈夫じゃないよ、めっちゃ熱いよ！

しかも説明が「燃えた！！」だけって、簡潔すぎるだろ！

「厄介な敵だな。防御力もかなり高い感触だった」

攻撃も厄介といえば厄介だよね。

「ふつ、ならば見せてやろう。盗賊の七符術のひとつ」

盗賊は素早く三枚の符を取り出すと、キカイヘッドに向けて全て投げつけた。

「くらえ、《龍爪符》！」

ただの薄いペラ紙のはずなのに、符はまるで龍の爪の「」とき鋭さを持ち、硬質なキカイヘッドの左前足部分に突き刺さった。

盗賊の 攻撃！

龍の爪が 敵の肉を断つ！

キカイヘッドに 合計102のダメージ！

『ギギギイ』

呻き声のような駆動音を鳴らしながら、敵の動きが一時停止する。

攻め込むチャンス！

「いくよ戦士、前足に集中攻撃だ！」

「了解した。はあつ！」

「あ、待て二人とも」

え、何で、

「ぶべばつ」「ぬおはつ」

盗賊の攻撃でダメージを負った箇所を攻撃しようとしたわたしと戦士であつたが、立て続けに起きた爆発三連発によつて吹つ飛ばされる。な、なぜ！？

「起爆符を元にした符だ。一定時間経過すると、そして符は爆発する……」

先に言つてよ！！

『ギギギギギイ』

爆発によつて左前足が破壊されたキカイヘッジであつたが、右前足一本で器用にバランスを取りながら体を起こす。まだまだ動けるようだ。

「盗賊、符はあるの？」

「すまないが数に限りはある。ここの先のことも考えれば、ここにで全て使うわけにはいかない」

だよねー。あんな強力な技がバンバン使えた反則だよね。とはいっても、物理攻撃だけでは太刀打ちできそうにない。ここはやはり、

「ふふん、そろそろワタシの出番かしら」

頼れる四番バッターは待つてましたと言わんばかりに腕をぐるぐると回す。休憩したばかりなので、存分に魔力が有り余つていうようだ。

「こんなポンコツモンスター、すぐにスクラップにしてあげるわ」せめてリサイクルはできる程度にしてあげてね。ゴミは増やしたらダメっすよ。

「天空を統べる赤き竜の息吹よ、雷の槍となりて、敵を滅せよ！」マホツカの両の手にものすつごい量の魔力が集まるのが肌で感じられた。詠唱の文言が眞面目なパターンの場合は総じて威力が高いと、過去の体験が教えてくれる。

そしてわたしの持つ対マホツカ危険信号レッドランプがアラートを鳴らした。

「全力全壊でいくわよ！」サンダーフォース

「ちょっと待つた！！」

「アラモーはい、ああああ？」

魔力の波動が手から身体へと戻つていぐ。どうやらギリ間に合つ

たみたいだ。

「ふー、危なかつた」

「ちょっとー、どうして邪魔すんのよ！」

「だつて、いつもの調子でドカンと魔法を使われると、フロア全体

が崩壊して確實に生き埋めになりそなんだもん

モンスターは僕
になるだろう。

「確かにそうだな。塔の屋上といい、城の天井といい、散々破壊し

「 てきたからな
だね。」

「おまえ達は、いつたいどのよつな旅をしてきたんだ……？」
その話については時間があるときじ———つべつ語つてあげる
よ。

だが少なくとも、今はそれどころではない。

「……なぜよ、この軽めな魔法はないの？」

ね
轉ひ
て
廣津に在食し
かにゆく
ま
かく
し
かなしれ

魔法は使つてくれた。

「だったら半分のカロリーのにしてあげるわよ。えーっと、メンド
ーだから詠唱は破棄、《サンダーフォース・ジャベリン》　　」
テンションが駄々下がりの、すげーやる気なさそうに魔法を唱え

るマホツカ。

しかし、その右手には空気を破壊する黄雷の槍が握られていた。
やはりあの詠唱文言は不要なんだね。

「ほいっ、戦士」

「ん？ つておおい」

マホツカは魔法の槍を戦士へと無造作に放り渡した。

「やっぱ全力じゃないと調子が狂うわね。アンタ代わりに投げなさい」

魔法つて、意外と大雑把なんだな……。

「そういうことか。では、いくぞ ！」

魔法を間接的に使えることに笑みを浮かべる戦士。後ろに下がると、戦士は軽い助走からタタツヒステップを刻み、槍を豪快に投擲した。さっきの「石投げ」といい、やっぱスポーツ万能なのか。

戦士の 攻撃！

雷の槍が キカイヘッドを貫く！

キカイヘッドに 962のダメージ！

キカイヘッドは 機能停止した！

つ、つえー！

機械つて水とか雷に弱そうな印象があるとはいえ、これで威力半分なの？

「ふう、気持ちの良い勝利だな」

「あんな歩く分銅なんか、楽勝に決まってるでしょ」でも強敵には違ひなかつた。連戦だけはしたくない。

キカイヘッドが 『期待に応えて 現れた！

「なぜーー！？」

つてか誰も期待なんてしてねーよ！

「まだ……いたのか」

「おい、後ろかも来たぞ！」

キカイヘッドが満を持して現れた！

— せむ

「やばいやばいやばいやばいやばい

「お、落ち着け勇者。取り乱したら負ける戦いも勝利する む？」
瓜二つのモンスターが一体。まるで前門の虎、後門の狼の「」とく、
わたし達は挟み撃ちにされてしまった。となると結末は……。

「アーチャー君？」

一言わすもかな、逃げるに決まつてゐるじゃん！」

完全に逃げ道を塞がれる前に、横手に伸びる通路に飛び込むと、無我夢中に逃走した。

「ちよつ、追いかけて来るわよ！」

絶対に負けられない、命懸けの鬼ごっこが開幕した。

戦士の感想通り、キカイヘッドはさすが第三層の番犬であるのか、デカイ団体のくせして小刻みにカーブを曲がつてくる。ガチャンガチャンといつまでも執拗に追いかけてきた。

「階段はどうだ？」

早く見つけなさい！」

一
お
し
前
か
ら
も
「

十字路にたどり着くと 何と四方をギガイヘッドに囲まれてしま

「盜賊、何かないの！」

七鍊金術でも、七鍊丹術でもいいから！

卷之三

「アラリ」

しか先令をば散らても遅いか

大抵のことは冷静に対処してきた盗

大抵のことは冷静に対処してきた盗賊もさすがに動搖しているようだった。

と、キカイヘッドが一斉に火炎放射の合唱を始めようとしたとき、足元が急にへこんだ。

「ん?」「ね?」「え?」「む?」

足裏から床を踏む感覚が失われる。つまりは

わたし達四人は竜穴
普通の落とし穴ト

わたし達四人は竜六
普通の落とし六トラップに引っ掛け
しまった。

まさか

いや待て、これはこれで助かつた？
まさかこんな古典的な罠！
下の階に落ちたところで、謎仕掛けは全て解除済みだ。再び上まで戻るのに時間はとほど要しないはずだ。

余
一

۲۹۰

まあ第一層は房でモモ

の
よ

「げつ！」

そ、おたして

「ゲロの魔女」

「盜賊の恥」

の

卷之二十一

すつぽりと、仲良く四人揃つて闇よりも黒く深い穴へと飲み込まれてしまった。

？？・地下層・もつと逃げろ！

「どはつ」

「ぐはつ」

「べはつ」

「はつ！」

万有引力にいざなわれる長い旅路を終えたわたし達は、当然のようすに大地へと激突した。

盗賊だけはウルトラC級の着地を決めたのだけど、そこわたしの背中の中の上だから！ 早く退いて！

「いててて、みんな大丈夫？」

「ああ、どうにか」

「もう、ローブが汚れたじゃない」

よかつた、みんな無事のようだ。

「あの高所から受け身も取りずに落下して、おまえ達はよく平氣だな……」

二十メートル以上は落下したのに、確かに怪我らしい怪我は見受けられない。

まあ、これしきのこと、今では「指定となつてしまつたクライムアクション小説 『馬車泥棒・参』」の主人公に比べればたいしたことじやないよ。防刃ベストを着ればどこから飛び降りても無傷だからね。カナヅチが唯一の弱点だつたけど。

「どうやら地下のようだな」

外と同じく硬い砂がむき出し�となつた、ひんやりとした地面。

上の階層と違つて地下フロアは薄暗かつた。ところどころに設置された燭台の炎がぼんやりと周囲を照らしてはいたが、視界は非常に悪い。

「何だか、陰気臭い場所だね……」

「そうね。何が出てきても不思議じゃないわ

「ふつ、じつじう場所にこそ、宝は存在するのだ」

「にしても、どうやって上まで戻るうか？」

天井を見上げると落下してきた大穴が見える。地獄の天蓋に空いた地上への抜け穴のように、一筋の光が地下へと差し込んでいた。「上には太い柱があつたはずだ。あそこにはロープでも結べば上れるだろ？」

「ならば、これを使うか」

備えあれば憂いな盗賊は、丈夫そうなザイルを取り出した。

「つてなわけで、マホツカお願ひ」

「はいはい。言われなくとも分かつてゐわよ」

と、マホツカは釣竿袋に跨るが、なぜか飛び上がろうとしない。「どうしたの？」

「んん？ 何で浮かばないのかしら？」

台風に煽られて飛び方を忘れてしまった少女のように、マホツカが珍しくテンパる。

「魔力切れとか？」

「そんなわけないでしょ。まだまだ半分以上は残つて」

マリーおとこたち(×9)が現れた！

「うおつ、モンスター！？」

『マリーおとこ』 全身を包帯でぐるんぐるん巻きにした(された？)人型のモンスターが、音もなく現れた。しかも九体つて多すぎ！

「なぜ極端に数が多いときがあるんだ……」

「だよね。こんだけ多いと机に收まらないよ。」

落下地点は決して広くない場所だったので、どこかのマラソン大会のスタート地点みたいに渋滞となつていて。

「あいい。ここは倒さなければならぬようだ！」

『マイラ』といえども、近寄つてくるイメージがあつたんだけ

ど、マリーおとこたちは陸上選手顔負けの猛ダッシュで肉迫してきました。（わたし達が四人だからか？）

そのあまりの迫力に戦士でさえ一瞬どきつと身を竦めてしまつたのだが、ミイラたちはなぜか田の前まで接近するとピタリと動きを止める。

「はつ！」

一向に攻撃をしてこないマリーおとこ、戦士が遠慮なく攻撃を与える。

「つべああ

変な叫び声を上げながら息絶えるミイラモンスター。とうやくにして成仏した肉体は霧散して包帯だけが残される。

「一体一体は雑魚のようだな」

数は多かつたけど、敵さんは慎ましい性格のようで、一体ずつしか攻撃してこなかつた。

「ふー、何とか片付いたね」

来世では、せめて生けるモンスターになれよ。

それでは氣を取り直して、上へと戻る算段を付けようではないか

マリーおとこたち（×9）が また現れた！

「ほんと『また』だよ！」

しかもまた九体つて、どんだけミイラいるんですか！

「だから、なぜ……」

まずいな。いくら弱いからといって、ノーダメージでは切り抜けられない。

「マホツカさん。何かいい魔法ですか？」

戦士はともかく、わたしと盗賊では敵を一撃では倒せない。

「まったく、枯れた男相手になーに手間取つてゐるのよ。仕方ないわね

飛ぶのをしばし中断して、マホツカが戦列に加わった。

「烈火の大剣よ、物理で殴るばかりの者たちに魔の力を『えよー』。そんな言い方はないんじやないかな……。」

「炎を奮え！ 『エンチャント・フラムベルク』！…」
補助魔法っぽいネーミングだな。いつたいどのよつたな効果なのだろつか

、

……
あり？ 何も起こらない。

「え？ 何で！？」

「やっぱ魔力が切れたんじやないの」

「だから、そんなわけないはずなのよ……」

さすがのマホツカ先生も、お疲れ気味のよつだ。

こにはわたしがやるしかないようだね。一日に何度も使用するの
は少々きついけれど、

「一気に片付ける！ 『雷の狂化魔**バーサーク**法』！」

……
あり？ 何も起こらない。

「どうした勇者」

あれれ、わたしも魔力切れ？

「どうやら、あの噂は本当のようだな」

「噂？ （盗賊って噂話好きだよね）

「パリミジドの地下には、魔法が無効化される仕掛けが施されてい
るらしいんだ」

な、

「何ですって！？」（うぐつ、マホツカに取られた）

だからわたしもマホツカも魔法が発動しなかつたのか。

『うばああ』

！？

マリーーおとこたち（×9）が 追加派遣された！

契約ミイラ社員募集中！

墓荒らしをやつつける簡単なお仕事です！

死人を募集してんじゃねーよ！

「ま、まずい。みんな一日逃げるよ！」

今日は逃げてばかりだな……。

「くそっ！まさかミイラ如きに背中を見せて逃走することになるとは。この屈辱は絶対に晴らす！その顔決して忘れないぞ！」

いや、包帯巻いているんだから、顔なんて判別できないでしょ。必死に逃げようとしたわたし達であつたが、死人海戦術によつて、

回り込まれてしまつた！

「まずいまずいまずい」

「お、落ち着きなさい勇者。取り乱しても太い一の腕は細く　ん？」

せつかく一難去つたと思つたら、また水を背にしたマナ板の上の鯉状態じやないか。

「ふつ、魂の抜けた死者風情が。盗賊の七遁術のひとつを見せてやるつー！」

もつツツコミはしないよ。つていうか心に余裕がない。

「火に葬られるがいい！くらえ、『火遁・黒炎灘の術』！」

懐から巻物を取り出すと、それをシユルシユルツと開封する盗賊。巻物には翼のない竜が墨で描かれていた。その竜が紙の中で躍りだすと、大きな口を開け墨色の炎を吹き出した。

「うばあ」「うびー」「うぶう」「うべえ」「ウボアー」ミイラたちが包帯ごと灰となつていく。すげー火力だ。

「さつすが盗賊、やるー！」

十体以上いたミイラたちが瞬く間に全て火葬されていった。けれど、なぜか竜は未だ炎を吹き続けている。

「盗賊さん盗賊さん。もついいんじやないですかね」だが盗賊は攻撃をやめようとした。

「そ、それが、一度封を解くと効果が終わるまでのままなんだ…

…」

な

「何だと…？」（「ぐつ、今度は戦士に取られた）
ミイラだけでは物足りず、砂や壁まで燃やす墨竜。狭い通路であ
つたため、黒煙があつとこゝ間に立ち込める。や、やばい！

「みんな、急いで脱出するよ…」

わたし達は急いで地上への階段を探した。
もう、逃げるのにも疲れたよ……。

？？・盜賊の事情

「へっくしょーぬ、はっくしょーん！」
肌を刺す冷たい夜風が吹き荒ぶと、篝火の炎がゆらゆらと幻想的に揺れた。

「砂漠の夜は冷えるぞ」

気遣いの言葉を掛けてくれたのは、篝火を挟んで向かい側に座る盜賊だ。

「へーきへーき。わたしは生まれてこの方、風邪を引いたことがないから」

身体だけは無駄に丈夫なのが取り柄ですから。それに加えて、貧乏生活で鍛え上げられた免疫力に勝てる病原菌などそうそういない。「風邪は万病の元だ。念のため、これでも飲んでおけ」

「ん、ありがと」

小さめのケトルでお湯を沸かしていた盗賊。「魚」が一杯書かれた湯飲みに、何やら粉末とトロリとした液体を入れる。そしてお湯を注ぐとわたしに渡してきた。

「飲めば瞬く間に身体が温まる飲み物だ」

何だろう、暗くて色がよく分からない。匂いは……ビニカツーンとくるものがある。

「お言葉に甘えて、いただきまーす」

と、一口飲んでみた。

「こ、これは」

ジンジャートハーブな風味がすくしますね。

「ああ、生姜湯だ。^{しょうがゆ}隠し味としてハチミツを入れてある」

なるべし。冷え性に効くつて小耳に挿むあの飲み物ですか。

こういうシンプルな味の飲み物は何だか懐かしいな。我が家では山で採れたウイードという名のハーブを、ただ煮ただけのスープをよく飲んでいたからね。

パチパチッと弾ける火の音と、一人が揃つて生姜湯を啜る音。そんな静かな夜を満天の星空の下で味わつてゐるわたし達。つーん、実に平和だ。

今わたし達がどこにいるかといふと、ペリカリッシュの外だ。そこでキャンプを張つていた。

黒煙立ち込める地下層から命からがら脱出したら、既に夜の世界となつていた。

疲労もピークに達しており、これ以上の探索は危険と判断して、ここで夜を明かすことになったのである。

あうー、ゴメン僧侶ちゃん！　まさか一日で目的を果たせなかつただなんて。寂しくて泣いてないかな？　わたしは泣きたい！

そんないつもと違う夜にて、戦士は周辺の警戒と夜の鍛錬を行うために席を外している。マホツカはグースカと就寝中のため、今は盗賊と一人で暖を取つていた。

ちなみにここで寒さをしのぐつかといいますと、ずばりテントの中だ。それも普通のテントではない。魔法のテントなるマホツカ持参のマジックアウトドア用品なのだ。

外見は二、三人用のノーマルテントなんだけど、中は3LDKのマンションの一室というどつかの借金執事の夢空間が広がつていた。「地下でのことはすまなかつたな。わたしとすることが軽挙妄動だつた」

いつまでも続くかと思えた静寂を破つたのは盗賊だつた。湯飲みに視線を落としたまま、自身の反省を吐露した。

「別に気にしてないつて、他に逃げる術もなかつたしさ」

あのままでは本当にミイラ取りがミイラになるところだつた。

しかし、わたしの言葉は気休めにすらならなかつたようで、盗賊の肩は重いままだつた。

「遁術の巻物も十分に扱えぬとは、取り返しの付かない醜態を晒してしまつた……」

それを言つのなら、忍者バレバレな点が真つ先に挙げられるので

は……。

「一む、ちよつと雰囲気が重くなつてきたな。」これは話題を変えよ。

「そ、そー言えばさ、盗賊つてピリリッシュでどんな用事があるの? ピリミッシュまでの道案内人として同行してくれることが仲間になつたキッカケだつたけど、盗賊もピリリッシュに目的があるのは明白だ。

もしもわたし達と盗賊の目的が同じな場合、最悪戦つことになるのかもしない。それだけは回避しておかなければ。

「ああ、その件か……」

顔を覆つた旅装の隙間から見える双眸が篝火へと注がれる。

「たいした目的ではない。ピリミッシュに眠ると云われる『鍵』を手に入れるためだ」

鍵?

「そう、ただの鍵だ。とはい、それはあくまでも通過点にしかすぎない。わたしが本当に欲しているものとは……」

盗賊は一旦そこで言葉を切る。言おうか言つまいが迷つた末、続きを話してくれた。

「わたしが欲しているものとは、我が一族……おつと、一家に代々伝わる武具だ」

代々伝わるとはすごいね。我が家には遺産もヘシタクレもなかつたからね。

「わたしが生まれる遙か前に失われたはずなのだが、存在することを突き止めたんだ」

「なるほど、その武具を手に入れるための鍵つてことだね」

「そういうことだ。鍵を入手したところで、本当に大変なのはそれからなのだがな」

武具で思い出したけど、わたしも『竜殺鉄塊』を手に入れるロマンがあつたんだっけ。まあ、積極的に探そつとは思つてないけど。

「そういうおまえ達はどうなんだ。見たところ、興味本位の墓荒ら

しには見えないが

「んー、ちょっとゼガスで負債を抱えちゃってね……」

わたしは話せる範囲で盗賊に旅の経緯を説明した。

「なるほど、仲間のためか」

そうなんだよ。小汚い悪党から可憐で典雅で神！な少女を救わなければならぬのだ。

「あれ、盗賊はずっと一人旅をしてきたの？」

「ああ、当然だ」

どこか寂しげな、しかし強い言葉だった。

一人旅か……、わたしには無理な選択だ。みんながいなければ、絶対に今のわたしはいなかつたと思つ。

それはモンスターと戦つ力という意味だけではなく、精神的な支えもある。

「一人で寂しくないの？」

「一人の方が何かと融通が利く。余計な荷物を背負つのは性に合わん

それは、孤独な考え方だよ。

「でもさ、それならどうしてわたし達の仲間になつてくれたの？」

「……それは、なぜ……だろうな」

盗賊は本当に分からぬといつた様子だった。確かにあのときの一部始終はすごく不自然で唐突だつたからね。

「わたしにもよく分からぬ。ただ、おまえに話しかけられたとき、道案内ぐらいならしてもいいと思つただけだ」

どこか恥ずかしがるような、ちょっと可愛い感じで否定を混ぜる盗賊。

「あのや、盗賊がよかつたら、ピラニアの攻略が終わつたら

「大分夜も更けてきたな。先に休んでいる」

わたしの言葉を遮るためのセリフだった。なぜなら夜はとつて更けている。

やつぱそこまでは無理だよね。距離を測りそこなつてしまつた。

「わたし達のテントを使つてもいいんだよ。中はすゞしく広い」

「ふつ、そこまで世話になるわけにはいかん」

と、盗賊は自分の一人用テントに姿を消してしまった。

「世話になつてるのは、わたし達の方なんだけどな」

「誰に言つたわけでもなく、呴くように声にした。

やはり類は友を呼ぶ、なのか。盗賊とはすごく気が合ひのような感じなんだよね。

それは戦士や傭傭ちやんやマホツカとはまた少し違つた感覚だつた。まるで昔どこかで会つたことのあるような、懐かしいようで、照れくさい不思議な気分になる。

一時的にはいえ、せつかく仲間になつてくれたのだから、いろいろと話がしたいな。

しかし、それはまずピラリッシュドを攻略してからだ。

わたしは戦士が戻つてくるのを待つたあと、明日に備えて眠りについた。

日がな一日実に退屈であった。

旅立つてからの一週間が波乱と驚きに満ち溢れた日々であったため、余計に暇であることが際立つてしまつ。

そう思つ反面、昂ぶつた心を落ち着かせたいと少なからず望んでいたので、結果的にはこれで良かつたと思えた。

「もう少し、もう少し……」

一人で使用するには広すぎる部屋には、ダーツやスロットマシンなどの娯楽物が置かれていた。さすがは地下カジノの上に立つホテルなだけはある。

しかし彼女は、暇だと感じつつも、それらのゲームには手をつけなかつた。

なぜならプレイヤーと「ディーラー」人と人との探り合いが介在しないゲームが嫌いだからである。そんな無粋なことに興じるぐらいなら、一人トランプで遊んでいた方がましだつた。

よつて彼女は、ホテルの一室には必ずといっていいほど机の引き出しに入つているどこかの教派の教典のように、ドレスサーの上にポツンと置かれていたトランプで遊んでいた。

「ふう、次で最後ですね……」

程よい緊張感に思考が引き締まる。

知つてゐる限りのソリティア　一人用のトランプゲーム　をしていたのだが、いつまでも暇潰しができるわけではない。難攻不落な『ゴルフ』もクリアしてしまい、ついにやることがなくなつてしまつた彼女は、トランプを使ってピラミッドの建造に勤しんでいた。

「これで一番上の段が完成ですね……」

そうつと、残り一枚となつたカードで最上層を築こうとしたとき、パソコンと部屋のドアがノックされた。

「ひやう！？」

「オーナーがお戻りになられました。下のフロアまでお越し下さい」と、扉越しに用件を事務的に伝えられる。

突然の掛け声に手元が狂つてしまい、トランプで作られたピラミッドは上層部からバラバラと崩壊してしまった。

何かを暗示している？ と考えが至るのは心配のしそうであるうか。

「はい、すぐ行きます」

適当に返事をすると、トランプを片付けて準備に取り掛かった。仲間の敗北によつて、彼女は現在ホテル《コルツネオ》の最上階ゼガスを一望できる「ールドクラスルームに幽閉（？）されたいた。負債を抱えているはずなのに、最上級の待遇とはこれいかに。債権者であるオーナーの意図が分からなかつた。

衣装棚を開けると、彼女の背丈と年齢に見合つたドレスが数着用意されていた。いつの間に揃えたのかと不思議に思いながら、一番シンプルであつた黒のワンピースタイプのを選ぶ。なぜわざわざ正装に着替えるかというと、これからオーナーと下の特別会員専用のレストランで食事をするからだ。

「う……ん、そろそろ切りましょうか」

少し伸びてきた髪を後ろで括り、薄く化粧をして準備万端だ。部屋を出ると長い廊下が続いており、このフロアの客専用のエレベーターに乗る。降りる階はレストランが営業している二階だ。レストランの入り口で待機していたウェイターに特別個室へ案内されると、既にオーナーが座つていた。相変わらず値段の張るブランド物のスーツで身を固めていた。

ウェイターが椅子を引いて、オーナーと向かい合つて腰を下ろす。

しばらく無言のまま待つていると、食前酒が運ばれてきた。

彼女は未成年であったが、アルコール度数の低いカクテルであつたため、ソフトドリンク感覚で飲むことができた。

「西海岸で見つけた一流のショフだ。味に間違いはない」

「はあ、そうですか」

「気のない返事をする。それ程お腹が減っていないのだ。

前菜、スープ、魚料理……と、フルコースではなかつたようで、締めのデザートが出てきた。オーナーは甘い物が苦手だったのか、彼女の分しか運ばれてこない。

（それにしても、会話を振つてこないですね）

食事中の会話を非としているのか、オーナーは彼女に話を振つてこない。ウェイターによる料理の説明を聞いては、適当に相槌と質問をするだけだった。

説明をするウェイターも、相手がホテルのオーナーとあつてか、やや緊張気味だった。そのせいか個室はかなり気詰まりのある空間となつていて。

そういうた場にはある程度経験がある彼女にとつては、別段苦痛とは思わなかつた。強いて述べるとすれば、せつかくの料理の味が落ちてしまつたことが残念である。やはり食事とは、皆でわいわい騒ぎながら食べるのが楽しいと、この一週間で改めて思わされたからだ。

「おまえに一つ、訊きたいことがある」

食後の紅茶を嗜んでいたとき、ようやくにしてオーナーが本題を切り出した。

「何、でしようか」

「その首から提げてゐるロザリオだが、どこで手に入れた」

予想していた質問がしゃがれた声に乗つて彼女の耳に届く。

昨日ホテルの前でも同じ質問をされたのを思い出す。あのときは仲間の人たちが割つて入つたため流れてしまつたが、今はゆっくりと話せる時間がある。

「これは……」

まるで赤子を抱くかのような柔らかい手付きでロザリオをかざす。

「この銀のロザリオは、私の曾祖母から譲り受けた大切なものです

形見の品であつたが、後生大事に首からぶら提げているアクセサリではない。法術を使用する際に用いる優秀な触媒であるのだ。聞いた話では特殊な製法で創られたとのことだが、彼女は詳しくまでは知らなかつた。

「曾祖母の名前は何といつ

『セルゴード』の名を出すことは憚はばかられたので、上の名前だけを告げる。

「そうか、やはりあの女の物か……」

「！ ご存知なですか？」

一瞬の逡巡のあと、オーナーの口から再び質問が飛び出る。

「その前に聞きたい。今はどこで何をしている？」

今度は彼女が躊躇ためらう番だつた。

「大おばあ様は、二年前に……」

今でもはつきりと覚えている。最後に触れた冷たくなつた頬と腕。

棺に収まつたその姿は、ひどく小さく見えた。

せめて自分が祝言を挙げる姿を見てほしかつたと思うのは、やはり贅沢なのだろうか。

「そうか……」

「あの、」

「分かつてゐる。急かさないでくれ」

オーナーも想うところがあつたのだろうか、軽いショックを受けているようだ。

いつたいこのオーナーと曾祖母はどういう関係なのだろうか。

「予め言つておくが、面白い話ではないぞ」

そう述べながらも、オーナーは昔話を滔々と語り始める。

亡き曾祖母が生前どんなことをしていたのかは、些細なことでも知りたい。

「あの女……銀髪の似非僧侶えせに出会つたのは、今から五十年前のことだ

年齢からして、オーナーがまだ少年の頃だらう。

五十年前と云えば、曾祖母が既に法術の体系化を完成させ、祖母に家のことを全部まかせて（押し付けて）旅に出でいたときだ。

「当時のゼガスは、それはクソみたいな街だった。今でこそ世界中から金と時間を持て余した富豪や資産家が訪れる場所だが、昔は金に目が眩くらんだゴロツキが街中を堂々とうりづく治安の悪い肥溜めのよくな街だつたな」

オーナーがなぜ食事中に話をしなかつた理由が分かつた気がする。「ゴーレム狩りで一攫千金を狙う貧乏人が大量に移住してきた時代だ。ワシの両親もそんな馬鹿な連中と同類だつた」

ゼガスで出会つた二人の間で生まれたオーナー。だが、父親は金をことごとく酒代に浪費した末にアルコール中毒で亡くなり、母親は働き先のダイナーで知り合つた男とベッドの上で心中してしまつたとのことだつた。

「死ぬ間際までいかれた両親だつた。そんな惨めな人生は送りたくないと思っていたが、どうやらワシにもその血がしつかり受け継がれていたらしい」

と、自分を皮肉るオーナー。

「何があつたんですか？」

「イカサマだ」

乱獲によつて「ゴールデンゴーレムラッシュ」に陥りが見え始めたとき、既にゼガスはギャンブルの街となつていた。^{ゴールド}金ではなく金の都となつたのだ。

「一、二件でやめておけばよかつたものを。当時のワシは、とにかく喉から諸手が出るほど金がほしかつた。貧乏でくそつたれな両親と同じ道だけは辿りたくなかったからな。一生遊んで暮らせるだけの金を稼ぎたかった」

始めは上手くいつていたのだろう。だが度が過ぎれば怪しいと思われる。

「薄汚いガキが着飾つたところで、所詮は薄汚いガキに変わりはない。そんな客が大金を持ち歩いていれば嫌でも目立つ。そんな当た

り前のことにも気付かないぐらい、あのときのワシは調子に乗っていた

まだ十の半ばである彼女にとっては、老人の回顧録にしかすぎないはずだ。けれども話に傾注していた。人が歩んできた道というのは、限られた空間でしか過ぎじてこなかつた彼女にとっては、宝石よりも価値があつたからだ。

「ギャングが後ろ盾にいる店に手を出したのが運の尽きだつた。顔の形が変わるまでぶん殴られた拳句、最後は剣を突きつけられた。恐怖の中で死を覚悟したのを覚えている。そして

「曾祖母が颯爽と現れ、ギャングを追い払つたそなのだ。

「命の恩人つてわけですね」

どうやつてギャングを追い払つたかは容易に想像できる。

「ふん、だがワシを助けたあとに、その女は何と言つたと思つ」「え？」

「何だらうか。足を洗つて真面目に働きなさい……ではないはずだ。「イカサマをやるなら、もつと上手くやれ。バレそうになつたら、すぐに逃げる、だ」

「それはまた、大おばあ様らしい言葉ですね……はは」
にやりと笑いながらその科白せりふを告げる曾祖母を想像すると、まったく違和感がない。

「それから、どうなつたんですか？」

「良い筋を持つていてと言われてな。頼んでもないのに徹底的にイカサマの技術を教え込まれた。スバルタ通り越して拷問に等しかつた。そして気が付いたらくなつていたんだ。まるで竜巻みたいに女だつたさ」

曾祖母が去つたあと、名を変え顔を変え再びゼガスで稼いだと、若かりし頃を語るオーナーも随分と醉狂だ。ゼガスでトップに上り詰めた男が、実はイカサマでのし上がつたと聞けば、カジノの客はどう思うだろうか。

「とても数奇な出会いだつたんですね」

だが気になることはまだあった。

「あの、大おばあ様の話を聞くために戦士さんとマホツカさんを嵌^はめたのですか？」

「ああ、そうだ。取り巻き連中は邪魔だつたからな
わざわざそこまでするとは。事情を話してくれれば躊躇^に一言断つ
て訪ねに行つたのに。」

「では、もう解放してくれますよね」

用件は済んだ。ならばもうここにいる必要はないはずだ。
『黄金の爪垢』という存在するか怪しいアイテムを探しに出かけた
皆がとても心配である。

「それは駄目だ」

「え！ どうしてですか」

「言つたはずだ。ゼガスはギャンブルの街、全てはゲームによつて
決定する。奴らはワシが仕掛けた勝負に負けた。その代償はしつか
りと払つてもらわなければならん」

「でも、あのポーカーは……」

「ふん、見破られなければ、」

「……イカサマにならない」

曾祖母の口癖だ。

「そういうことだ、なに、明日になれば諦めて戻つてくるだらう。
ワシも鬼ではない。泣いて詫びれば、キャラにしてやつてもよい」
話はそこで終わつた。

オーナーはさすがゼガスで生まれ育つた人だけあり、勝負事に關
しては一歩も譲らない性格のようだ。

説得を諦めて部屋に戻つた彼女は、再び銀に輝く口ザリオを手に
取る。

母も祖母も家のことでも忙を極めていたため、幼少の頃は曾祖母
と最も時間を過ごした彼女。

「この街に訪れることができたのは、ある意味王様に感謝しないと
ですね」

しかし、大きな問題は残つたままである。
青い月が黄金の街を照らす中、明日に備えて早めにベッドへと潜り込んだ。

夢つて目が覚めた途端に内容を忘れちゃうよね。僧侶ちゃんが出てきたことは覚えているんだけど、話の流れを思い出せない。まあ、夢の中とはいえ、ウルトラプリティな僧侶ちゃんを揃むことができたから、いつか。これで僧侶ちゃん成分を少しあは補充できたはず！

「朝つぱらから何ニヤケ面してんのよ」

マホツカが不審者を咎めるよつなジト目を向けてくる。おつと、いかんいかん。夢は所詮幻だ。現を抜かして油断している場合ではない。

「（待つていろよ、黄金の爪垢！）」

わたしは気合を入れ直す意味を込めてペリカニッシュドの頂点部を見据えた。

「それにしても、随分と変わった食べ物だな」

もぐもぐと口を動かすのは戦士。

ペリカニッシュド攻略に向けてしつかりと朝食を摂らなければならなかつたのだが、わたし達はそれほど食料を買い込んでおかなかつたのだ。

そこで非常食をたくさん持つている盗賊に分けてもらつたわけである。全く持つて至れり尽くせりだね。神様仏様盗賊様だよ。

「携行糧食と同じでライ麦パンのような味かと思ったが、フルーツの甘みがあるな」

盗賊が提供してくれた携帯食料は、さすがは忍者であるといいますか、『兵糧丸』という名前通りの丸っこい食べ物だつた。

「こつちは力カオっぽい味がするわね」

「近年は購入層拡大のため、様々な味の兵糧丸が販売されているんだ。そちらはフルーツ味で、こちらはチョコレート味だ」

「わたしが食べるのは？」独特な芳香が口の中で広がる。

「それはライトシナモン味だな」

「ぶほつ。ミイラに追われた次の日にシナモンとは、洒落を効かせすぎだよ……。」

「ちなみに、わたしは断然ベジタブル味派だ」と言いつつ、既に食事を済ませていた盗賊。やっぱ素顔は見られなかつたか。

「これから再びピラミッド探索をするわけだが、第三層に出現したあのモンスター群をどうにかしないことには、最上層までは到達できなイゼ」

確かに、素通りはできそうになイね。

「外から飛んでいくつてのはどうかしら」

「あの手のダンジョンはズルをしない方が身の為だ。ろくな事にならないイゼ」

だよね。未完の冒険小説こと『狩人×狩人』に、トラップだらけの塔を外壁から降りようとして人面鳥に連れ去られちゃうシーンがあつたからね。

「じゃあさ、もう一度透明になるとかは？」

と、盗賊を見る。

「すまないのだが、四人全員を透明にするだけの木の葉がもうないんだ」

なぜ葉っぱが必要なのかは、訊いても教えてくれなさうだ。植物 光合成 酸素 空気 空気王？

「マホツカ～」

と、ダメもとでマホツカに振る。

「ダメ」

ですか～。

まさか一体ずつおびき寄せて戦うわけにもいかないからな。やばい、行く前からして既に詰んでいるジャマイカ。

「もう、仕方ないわね。透明になる魔法は無理だから、代替としてとつておきのアイテムを使ってあげるわよ」

と、マホツカはガサゴソといつもの擬音を立てながらロープの中をあさる。

「あつたあつた。えーっと『ディアボロスの香り』よ」

取り出したのは、赤と黒の液体が混在した小ビンだつた。

「それは……香水？」

「そうよ。魔法薬品で有名な『G·F·LIMITED』製の特注品よ」

そんな有限会社があるんだ。

「どんな効果があるんだ？」

「ふつ、まさか機械相手に誘惑でもかけるつもりか」

戦士と盗賊が興味深げにビンの中を流動する液体を覗いている。

「すばり、モンスターを寄せ付けなくする効果があるのよ」

おおつ、それはまさにこの状況を打破するのに打つて付けじやん

なのだけど、さつきからマホツカの様子がおかしい。いつもなら「じゃつじゃじゃーん！」とか「ふつふふーん」とか自慢気に見せびらかすのに、今回はそれがない。まさか、記憶障害が発症する副作用があるとか？

「そんな便利なアイテムがあるとは、世界は広いな」

「そうだな。だがしかし、なぜ『ディアボロス』なんだ？」

盗賊のツツコミをマホツカは聞こえていないのか、なぜか一人物思に沈む。

「はあ……、何で副賞がこんな微妙な物だつたのかしら……」

「どうしたのマホツカ？」

「！な、何でもないわ、何でも……」

スーパーレアアイテムを手にして珍しく面妖な態度を取るマホツカ。

「どんな香りがするの？ 早く使ってみてよ

「い、今はダメよ！」

「え、何で？」

「いや、だつて……しょ、食事中じゃない」

食事と言つても丸薬をかじつてゐるだけじゃん。匂いとかあんまり関係ないと思うけど。

「どうしたマホツカ、何を躊躇してゐるんだ?」

「ぐぐ……、じゅあいくわよ。勇者にシユシユツ」と、苦渋を嘗めるかのような表情で、香水をわたしに吹き掛けるマホツカ。なぜか手を伸ばして可能な限り離れた位置にいる。しかも鼻までつまんでいた。

もしかして、マホツカつてキツイ匂いとか苦手なのだろうか? しつかし香水ですか。山で獲物を探すときに血で匂いをつけた経験は幾度もあるけど、香水などという大人な女のアイテムを使うのは生まれて初めてだな。しかも『ディアボロス』とは、いったいどのような魔性的な香りが

!?

「くくくくやーーー!」

うげつ、何じゅうりやー? 鼻がひん曲がるー!

「ううう、ぐはつ、な、何だこの腐乳臭は!?」

「うわはつ、くさやより酷いぞ」

何なのマホツカ、この強烈な匂い もとい臭いは!?

「そういうアイテムなの。だから使うの嫌だったのよね……」

鼻をつまんで苦々しい顔をつくるマホツカ。だつたら出さないでよーーー

「」「効果時間は……?」

「ま、まあ……一時間も経てば切れるでしょ

ま、まじかよ! し、死ぬ……。

とはいえ、みんなもつけるのだから我慢しよう。

「先頭を歩くアンタにだけ吹き掛ければ効果はバツチリなはずよ なんですよー!?

「よし、効果が切れる前に歩くぞ、勇者」

「そうね、早く歩きなさい。それと風上に立つんじゃないわよ」

「身を犠牲にする精神、実に恐れ入った」

みんなしてわたりながら逃げるよつて距離を取る。
むがー 鼻がー！

？？・最上層・パスワードは何じゅりホイッ

「もう、死ぬ……」

世の中極暑や極寒の地で命を落とした人はいるわけだけど、古今東西強烈な臭いのせいで事切れた人は、はたしているのだろうか。しかし、臭いの効果は發揮されたようで、第三層でキカイヘッドと戦闘を交えることはなかつた。きっと嗅覚センサーが壊れたに違いない。

そんで、次なる第四層は矢印の描かれたタイル張りの、柱や壁が少ないフロアだつた。上に乗ると矢印が途切れるまで移動させられる仕掛けによつて、正解のルートを発見するまでひたすらフロア内をぐるぐると回る羽目となつた。うふつ、思い出しただけで気持ち悪くなる。

そして第五層は、鋭い槍がびつしりと生えた床を、上に敷かれた透明な板を歩いて渡る危険極まりないフロアだつた。さてどうしたものかと思つたけど、戦士が何かの役に立つかもと袋に詰めていた砂漠の砂を撒くことで板の場所を確認することができたのだ。足を踏み外そうには何度もたけれど、串刺しにならずに済んだ。それらを乗り越え、よつやくにして最上層へとたどり着くことができたのである。

え、どうして最上層だと分かるかつて？

それはね、『ト寧』にも各階層を繋ぐ階段に案内が彫られていたからだよ。

F5 > F6 > R

みたいな感じでね。

ちなみに屋上へは第五層から階段がひと繋がりとなつていたので、一応上つてみた。

けれども、四角錐の頂点部には巨大な宝石もガラスの星もなかつた。黒い砂の海が展望できる、絶景ポイントだつたけど。

「気分は大丈夫か勇者」

大丈夫じゃないつす。

「嗅覚を癒すならば、わたしにまかせろ。盜賊の七香料である《クサツの香り》や《ベップの香り》を嗅いで中和することができるはずだ」

何ですか、そのいい湯だな、的な名称は。

心配せずとも大丈夫。マホツカの言つたとおり、臭いはほぼ消えている。

しかし、しばらくわたしの鼻は使い物になりそうにない。これならドリアンだつて苦なく食べられそうだ。

貧乏なわたしには縁のなさそうな果物だが、一度アキちゃん家にお泊りしたとき、夕食のデザートで食べたことがあるんだよね。どんな味か気になつていたんだけど、とにかく匂いが凄すぎて鼻をつままないと口まで運べなかつた。そのせいか味なんて全然分かんなかつたね。アキちゃんのお母さんはムシャムシャ食つてたけど。

「いつまで匂い臭い言つてるのよ。早くお宝を手に入れるんじょ」

元凶のお前が言うでない！

「あとはこの扉の奥を残すだけだな。最後だからこそ一層気を引き締めなければ」

ピラミッドの最上層だけあつて、下の階層より明らかに面積が大きい。おそらく今わたし達がいる場所と、扉を挟んだ部屋しかないだろつ。

そして進路を阻む扉なのだが、天井まで届いている巨大な鉄扉だつた。巨人の家にお邪魔したのか、わたし達が小さくなつたのかと錯覚させられるほどである。

当然のことながら押したところで開く氣配は「ジン」もない。單純に重量のせいだと考えられなんくもないけど、この扉も何かしらの仕掛けを解除することで開くはずだ。下の階層が全部そうだったか

らね。

「怪しいのは、この台しかないね」

扉のちょい手前右手側に、オフィスデスクみたいな形状の石机があつた。

「ふむ、これが解除スイッチに違ひなさそうだな」と、危険がないか警戒しながら物色する盗賊。

机の上には箱みたいな置物があり、細長いコードがたくさん机と繋がっていた。

「そんなに不安がることないつて…………のわつ？」

何の気なしにポンツと机に手を置いたら、いきなり机上の箱よく見るとフランスタム型の物体の前面部がブワンと光を灯す。カリカリカリ、ガリガリ、という耳障りな音が鳴り終わると、黒い平面に白い文字が浮かび上がってきた。

「何だこれは？」

「またしても奇天烈な仕掛けだな」

「こいついう理解不能なものはマホツカ担当だね。」

「マホツカ、分かる？」

「懐かしいわね、コンソール画面じゃない」

「コンソール？」

「それにシーク音なんて久しぶりに聞いたわ」

「シーク音？」

「しかも最初に表示される文字が『Hello! Pyramid!』だなんて、随分と洒落が効いてるじゃないの？」

。

「分かる？ 戦士、盗賊」

「無論さつぱりだ」

「魔法使いとは、鶴^ね的な存在だな……」

「ですよね。」

「それで、何とかなりそうな感じ？」

「んー、画面に『パスワードを入力してください』って出力されて

るでしょ。つまりはそーこ“う”ことよ

パスワードですか。

「でもどうやって？ 声で認識するとか？」

「こんな年代物のマシンでバイオ認証システムなんて無理に決まつてるでしょ。普通にキーボードを使うのよ」

と、マホツカは机と箱の隙間に収まっていた長方形の板を引っ張り出した。よくそこにあるって分かったね。

「アンタもアルフォンで似た感じのを使つたでしょ。アレよアレ」

ああ、あの文字がジグザグに並んでいる板か。

「でもや、パスワードって言われましても、全然検討が付かないんだけど」

「何かパリハッシュ内部にヒントとなりそうな印書きでもあつたのだろうか」

「こーこーのは誕生日とかが定番なのよね。もしくは墓ぬしの命日かしら」

「なるほど、曆か。では試しに、今日の日付を入れてみてはどうだろうか」

とにかく、何かしらのアクションを起さないと始まらない。とりあえず盗賊案を採用。

わたしは人差し指一本のぎこちない動作でキーボードを押す。するとそれに合わせて時たまノイズが走る画面上に由の文字が並んでいった。

「全部打ち終わつたら、最後は『Enter』キーよ」

ほい。

ターン！ とわたしは言われるがままに大きめなキーを押した。それで、結果は……、

『パスワードが違います』

ドゥン！ という耳に不快を訴える効果音が鳴る。やつぱ駄目か。

『セキュリティの安全上、残り一回までの入力となります』

なんですか？

「どうすんのこれ？」

「私に助言はできそうにない。勇者に一任する」

「何でもいいから、それっぽいパスワードを捻り出しなさい」

「それしかないようだな。女の勘を信じるしかない」

「オンナのカンね…………ん？ そり言えれば盗賊つて、わたしを女
だって分かつてたんだ。」

そんじゃ、『おとこ』になつても隠し切れないわたしのウーメン
パウワーで、一発でパスワードを当てちやおうじやあーりませんか！
「きつとこれに違いない、『ギャレット』と」

「バチーン！」と最後にエンターキーを押す。さて、結果は 、

『パスワードが全然違います』

んぎゃー！

「どうしてアンタは何の脈絡もない文字列を入力すんのよ
だってー、オンナのカンがそう告げたんだもん。」

『パスワードの入力は残り一回となります。再度の入力はシステム
管理者までお問い合わせください』

管理者って、絶対あの世にいるだろ。

うーん、どうしようどうしよう、まじで分かんない。

「思案したところで答えは導き出せないだろ？ どうせ無理なら適
当に入れるしかあるまい」

確かに。それに失敗しても自力で扉を破壊すればいいだけの話だ
からね。

あれ？ そっちの方が簡単じゃね？

「ん、何よ？」

いやいやいや、ないないない。無駄な時間と体力は使いたくない。
意を決してわたしは最後のチャンスに挑む。

「よし！ だつたら最後はアレでいくし あつ」

と、わたしは操作ミスを犯してしまい、まだ何も入力していない
のにエンターキーをペチンと押してしまった。

「ちょ、何やつてんのよ！」

やべー、やつちまつたー。

もしやペナルティがあつたりする? 落し穴か? 砂が追いかけてくるか? それとも槍が飛び出してくれるのか?

『パスワードが入力されました。扉が開きます』

あり? なんで? どしつて? はてさて? まじですか? (スズナ、スズシロ……)

「もしかして、例の噂は真だったのか」

またですか盗賊さん。

「参考までに、どんな噂なの?」

「ああ、『パスワードが存在しない』ことがパスワード』といつ、子供染みた内容なんだ」

何の意地悪問題だよ。

まあいつか。答えは何であれ、聞いたことに変わりはない。

そういうシッピミを入れていのつむじ、大扉が左右にスライドしきつた。

はたして『黄金の爪垢』はあるのだろうか。

？？？ バトル・虫ボス

「砂……？」

最上層の大扉から続くラストフロアは、魔法のテントと同じく外からの見た目よりも数倍広かつた。一面桃色の砂が敷かれており、その柔らかい感触に足がとられそうになる。

「来るぞ！！」

戦士が剣を抜きながら言い放つ。

今回はわたしもすぐに敵を察知できた。当然だよね、最後のフロアで敵が立ちはだからないなんてことは、名探偵の赴く先に事件が発生しないぐらい、ありえないことだ。

砂の床の一部が、まるで海面のごとく波打つ。獲物を捕捉した水中のハンターのように、何かが砂の中を潜行しながら急接近してきた。

「うわっ」

例えるのならばクジラのブリーチングだ。砂海から巨体が飛び出し、大量の水ならぬ砂の飛沫が舞い上がる。爆弾を使用したわけでもないのに。

メタルマンティスが 現れた！

「こいつがピラミッドのボス？」

「サンドワームかと思つたが、違つたようだな」

「…………」

「つづづく面白い敵が出現する建物だな」

笑う石像、火を吹くカエル、そして最後は泳ぐカマキリですか。

『メタルマンティス』 第三層を生息地とするキカイヘッド同様に、いかにもメタルな質感を輝き放つ機械系モンスター。シンプルなシルバーグレーではなく鮮やかなライトグリーンのカラーリング

が非常に眩い。カマキリの象徴たる細長く鋭利な一本のカマをガキンガキンと打ち鳴らしながら、わたし達を威嚇してきた。

「……随分と大きな力、力、カマキリじゃない……」

全長は十メートルぐらいだろうか。二つの複眼が索敵するかのようにぐるぐると動く。わたし達を侵入者と認識したのか、鉈を振り回すように、右腕で攻撃してきた。

！

先端にいくにつれて黄色へとグラデーションする前足がわたしへと迫る。

「おわっ」

咄嗟の横つ飛び緊急回避　わたしがいた場所にカマが突き刺さつた。

「危ない危ない。あんな大きなカマでは、痛いだけじゃ済まないよ。また機械のモンスターか」

「ふつ、芸がないな」

カマを引き抜いている隙を突いて、戦士と盗賊がカマの攻撃範囲外である左右から敵の胴体部に攻撃を仕掛けた。

キカイヘッドと同じく、やはり防御力が高いのだろうか　、

「くつ！」

「何つ？」

だがダメージを与えるどころか、二人の剣撃は一本のカマによってガードされてしまった。

メタルマンティスの後部はムカデのような複足形状となつており、まるで地を這うようにして、高速でその巨体を後退させたのだ。

「こいつ、やるな

「ならばこれでどうだ。《龍爪符》！」

鉄よりも硬い五本の龍の爪がメタルマンティスを襲う。

そのうち四枚は巧みなカマ捌きの前にズタズタに切り裂かれてしまつ。時間差をつけて投げた最後の一枚は胴体部分にヒットしたが、硬い装甲に突き刺さることはなかつた。

「馬鹿な、龍の爪の一撃だぞ！？」

例によつて符は色褪せると同時に爆発したが、その衝撃でもかすり傷一つ負わせられない。破かれた符は書かれた印が切れてしまつたせいか、爆発は発生しなかつた。

「剣の一撃ではダメージを与えられそうにないな」

それ以前に、あのカマに攻撃を阻まれてしまつ。

しかし、その鋼鉄のカマごと敵を貫く技を使える人物がこちらにはいるのだ。

「マホツカ、頼んだよ！」

昨日使用した雷槍のフルカロリーバージョンを叩き込めば、簡単に倒せちゃつたりして。最上層だから、天井が崩れても何とかなるでしょ。

「……」

「あり？ マホツカさん。

「どうしたマホツカ、敵に臆している場合ではないぞ！」

メタルマンティイスを凝視しながら顔を青くするマホツカ。何かデジヤブ。

「まさか、魔法が使えない空間だつたり……する？」

「……ち、違う」

「何が違うんだ？」

「ダメ、なの……よ

へ？

「何が？」

「何がつて、だから虫よ！ 虫以外に何があるのよーー！」

「「またかよ……」」

「？」

確かにメタルマンティイスは正面から見れば巨大なカマキリ以外の何者でもない。名前もマンティイスって付いているぐらいだから、製作者も意識して造つたはずである。

でもさ、サンドワームはまだ生き物だつたから分からぬくもない

けど、こつちはただの機械じゃん。潰したら変な汁が出てくるわけでもないし。

「昔家の近くにある総合公園で拾つたカマキリの卵を、大事にしようと思つて押入れにしまつて、そのままほつたらかしにしちやつたのよ。そして冬を越したある日、春物の服を取り出そうと押入れを開けたら……ギニヤー——！」

まーた自分でトラウマスイッチ押しちゃつたよ。

「どうしたんだ、あの魔法使いは？」

「放つておけ。眼前の敵が先だ」

「でも、わたし達物理攻撃組だけじゃ厳しいんじゃ……」

攻撃を当てるのも難しければ、当てたところでたいしたダメージになりそうにない。八方塞がりとはまさにこのことだ。

「どんなモンスターとて弱点は必ずあるはずだ。何も労を惜ず諦めるだけでは、そこで成長が止まってしまうぞ」

戦闘に関しては強気の戦士が、弱気になつてているわたしに喝を入れる。

「そうだね。いつもいつもマホツカばかりに頼るわけにはいかない。

「勇者、敵は私が引き付ける。その隙に頭部を攻めてみてくれ」

なるほど。いかにも防御が薄い部分っぽいね。

「よし、まかせて！」

その言葉を合図に、単身でメタルマンティスと刃を交え始める戦士。

回避に専念しているためか、攻撃はまったく仕掛けない。その代わりとして、触れば肉だけでなく骨まで断たれそうな大力マによる連続攻撃を紙一重で全て回避する。すげー。

おつと、戦士の戦いに見惚れている場合じやない。

「いくよ、盗賊！」

「承知した。盗賊の七投擲道具のひとつ《アビゴルソード》をくらわせてやる」

盗賊が懐から取り出したのは八方向に刃が突き出た手の平サイズ

の手裏剣だった。ああ、風魔手裏剣つてやつね。世界史の別冊資料集で見たことがあるな。

余談だが、その改名は《幽靈騎手》を読破したわたしじゃなければピンとこないよ。

「《雷の狂化魔法》！」

機械といつても、構造は動物と同じなはずだ。まずはその視覚を奪う！

戦士に気を取られている敵へと近づき、その体をよじ登る。途中でタゲされてしまったが、遅いよ。こちらに顔を向けた敵の複眼へと全力の振り下ろし攻撃を繰り出す。本当は刺突にしたかったんだけど、ショーテルじゃ無理。だけど、これでどうだ

「つぐ！」

激しい金属同士の衝突音。敵は嫌がるように顔を遠ざける。少しはダメージを与えたようだが、まだまだだ。

「くらえつ！」

間髪入れずに盗賊が手裏剣を投擲した。手裏剣は真っ直ぐメタルマンティスの胴体へと突き刺さる。しかし、それだけでは痛くも痒くもないだろう。

「それは百も承知。いくぞ、昨日の汚名返上だ。盗賊の七遁術のひとつ！」

目を凝らして見ると、手裏剣には金属の細い糸が結ばれていた。

「雷に縛られるがいい！ くらえ、《雷遁・稲妻旋風の術》！」

巻物に描かれた翼竜が吐く雷息が、糸を伝つてメタルマンティスへと流れる。

「二人とも離れろっ！」

バチバチッと襲い掛かる墨色の雷に、わたしと戦士は敵から距離を取つた。

雷は大蛇の「」とくメタルマンティスへと複雑に絡みつくと、動きを止めずに回転し続ける。それが徐々に速くなり、雷の竜巻を発生させた。

舞い上がった砂が電熱で焼き焦げる。なんつー威力だよ。

「や、やつた……？」

さすがの鋼鉄ボディとて……、

「「「！」」「」

美しいライトグリーンのボディは傷だらけとなつたが、機能停止とまではいかなかつた。

一つの複眼が怒りを露にしたかのように橙から赤へと変色する。

「や、やばい！」

メタルマンティスはその場で一本の大力マをなぎ払う。

一つの刃が生み出す乱氣流が、わたし達を呑み込んだ。

「ぐわっ」「つがは」「ぐ、カマイタチの術だと……」

風刃による斬撃と、風圧による衝撃。部屋の壁まで吹き飛ばされたわたし達に、オマケと言わんばかりの砂の雨が横方向から降り注いだ。

「い、いくら何でも強すぎでしょ……」

「くそつ、撤退するしかないのか」

「それは無理なようだな。いつの間にか扉が閉じているな、なんですよーー！」

やばい、やばいやばいやばい。

「マ、マホツカー！　トラウマなんかに負けないでーー！」

もはや最後の希望に託すしかないのだが、

「カマキリ……タマゴ……カマキリ……タマゴ……」

ダメだこりゃ。

「トラウマか、それを克服させればいいんだな

「そうだけど、そんな精神治療とかできるの？」

「治療は無理だが、一時的に忘れさせることは可能だ」

そう述べると、盗賊は馬みたいな生き物の略絵が描かれた符を取り出した。

「いぐぞ、《麒麟符》！」

と、盗賊は符をマホツカへと投げつけた。

「カマキリ タマゴ カマんぶつ」

ええ、どうした?

「まあ、黙つてみていろ」

キヨンシーみたいに符が額に貼り付いたマホッカ。まさかマホッカ操るとか?

「他、他、他……」

?

卷之六

隠された空體は、ホラの狂声が轟き渡る

「見ての通り、あの等は肉体と精神を活性化させる効果がある」

なるほど。でもさ、ちょっとハイテンションすぎない?

おんが飢足重物に三三三をなして 一々の力が言葉通
まゝ、コトニ三段三刀里、没し 一ノ木ノ太郎

「わる

あと何が受け麾かごく性格はなごみてみて受けと

人挑むマホツカ。

氷の属性なのだろうか。魔法が発動する前なのに、急激に部屋の温度が下がっていく。

「時を奪え！」 『ダイヤモンド・オベリスク』

マホツカの背後に巨大な花崗岩ならぬ氷塊のオベリスクが地面から出現する。先端付近に刻まれた聖刻文字が輝き出すと、碧氷色の光が部屋を埋め尽くした。

あまりの眩しさに目を閉じられるをえない。

時間にすれば刹那にも満たなかつただろう。目を射す光が弱まる
と、わたしはそつと瞼を上げた。すると、

「え？」

「これは、」

「氷……なのか」

砂と岩の無味乾燥としていた部屋から一転して、鏡のよつな氷に
覆われた神秘的な世界へと変貌していた。

床の砂はスケートリンクに変わり、メタルマンティスは穴に落ち
た氷河期のマンモスのように氷付けとなつていた。かなり早めの冬
眠だね。

「ははーん、所詮は虫ね。新生代の初期から歴史をやり直しなさい
マホツカがパチンと指を鳴らすと、メタルマンティスが砕け散つ
た。

「相変わらずの規格外つぱりだね……」

「つたり前でしょ、ワタシは天才なんだから。ビーム盗賊ちやーん。
これを盗んでみなさい」

「むむ……」

ほんと調子に乗つた若者風になつてゐるな……は!
もしも僧侶ちゃんに符を付けたら……すぐ見てみたい!

まあいいや。そんなことよりもお宝が先である。

高笑いするマホツカを放置して、部屋の奥へと滑りながら移動す
る。まさか砂漠に来てスケートができるとは。

舞台ほどの高さの場所には台座があり、そこにいかにも貴重なも
のですと主張している四角い石の板が嵌め込まれていた。なぜかこ
こだけマホツカの魔法の効果が及んでいない。

「どうぞ」

「いいのか?」

わたし達には必要のないものだからね。

「そうか、では」

遠慮しげちに宝へと手を伸ばす盗賊。

盗賊は 『魔法の石版』を 手に入れた！

「これだ、これさえあれば」
よかつたね、盗賊。

「ああ、おまえ達のおかげだ。わたし一人の力では
「ちょっと何よ！ こんなデッカイ墓造つておいて、そんなチンケ
な石口口しかないの！？ もつと金銀財宝置いておきなさいよ！
まったく貧乏でケチな王様が眠つてゐるのね」

何とゆーか、

「うざいね」

「うざいな」

「そうだな」

たまーに近所で出合つた绝望オバサンみたいなオーラを放つてい
るよ。

と、マホツカに貼り付いた符の色が褪せていくのが確認できた。
まさか 、

「ちよいと失敬」

「んべつ」

わたしはマホツカの額から符を引っ張がすと、固く丸めて放り投
げた。

すると、符が盛大に爆発を起こす。

「ぬおつ、すつかり忘れていた」

いや、あの符は効果的に爆発させる必要ないだろ！？

「まあ、何はともあれ一件落着」

肩の荷を降ろしたとしたとき、『アアアアアア』、部屋が激しく揺れ

始めた。

「これは？」

「まさか？」

「ピラミッドが 崩れる！？」

天井の氷が砕けては氷岩となつて床に落下してくる。それに同調するかのように建物全体が崩壊し始めた。

「まさか、さつきの爆発が原因だつたりする？」「まさか、さつきの爆発が原因だつたりする？」「まさか、さつきの爆発が原因だつたりする？」

と、

「「「！」」」

床の砂が凍つたままひび割れ、穴を開けた。当然上にいるわたし達も自由落下を開始する。

昨日は三層分だったけど、今度は六層だ。しかも天井や氷塊まで上から降つてくるではないですか ツ。

これでは生き埋めになるかもしだいと思ったとき、どこからか威厳のある声が直接頭に入ってきた。この非常事態にいったい誰！？『南の山でお前たちを待つている……』

.....。

なんですか、それ！？

青を基調として白銀のラインが入った法衣を羽織る。同じ色調の帽子を被り、ロザリオを首に提げればいつも彼女の格好だ。

旅に出立する前に急いで作つてもらった『エルメ・クロス』のオーダーメイド品は、意匠がやや古風であった。

そもそものはず、曾祖母が彼女と同い年ぐらいのときに、旅をしていた際に着用していた法衣と同じデザインにしたからである。およそ七十五年前。一回りして流行しているというわけではなく、今どき年配の僧侶でもこの服装はない。

だが機能性に関しては折り紙つきだった。伸縮性に富んでおり、激しい運動でも比較的動き易い。さらに特殊な素材と縫合技術により、見た目とは裏腹に並みの鎧よりも頑丈なのだ。刀剣でも断つことが容易ではない。

とはいえる、完全防御とまではいかない。斬撃や魔法には耐性があるのだけれども、打撃にはそれほど強くなかった。

「さて、と……」

姿身の前で身だしなみの確認をしていると、ふとトランプが視界に入った。

「…………」

思考の全てを一つの事象を思い浮かべることに集中する。

雑念を振り払つたあと、すつと、ごく自然な所作で一番上のカードを一枚引いた。顔の前まで持つてくると、閉じていた瞼を開き、絵柄と数字を確認した。

「ん？ 一つズレちゃいましたか……」

カードはスペードのキングだった。

やはり曾祖母のようにはいかなかつた。まだまだ未熟であることとを再認識して、一段と氣を引き締める。

「よし！」

「これで準備万端だ。あとは外側から施錠されたドアを破ればいいだけである。全てはこの部屋から出ないことには始まらない。」

しかし、たすがはゴールドクラスのドアだけあって、ちょっとやそつとの衝撃では壊れそうになかった。その点は既に確認済みだ。「特等クラスの部屋を破損させてしまうのは気が引けなくもないですが、仕方ないですよね」

どうせ下のカジノの儲かりようならば、ドアの一つや二つといった損害ではないだろう。

「それでは、」

彼女は首から提げているロザリオを手に掴むと、法力を注ぐ。ロザリオは法術を使用するための触媒なのだ。

（そう言えば、勇者さんや精霊さんはともかく、マホツカさんはどうして触媒を持たずに魔法が使えるんでしょうか……）

『触媒』とは、法術ならば法力、魔法なら魔力　　言い方が違うだけ同じ力を溜め込むことのできる物質の総称を指す。

そして溜め込んだ力を、己の精神力をもつて物理的な事象へと変換させるのが、法術や魔法の原理であるのだ。

僧侶である彼女は、『水』と『光』の属性を習得している。

そしてもう一つ、『セルゴード』が代々受け継がせてきた力があつた。

「形を成せ、『銀の尖槍術』！」
パルチザン

ロザリオに注がれた法力が解放され、飴細工のように伸びては長い棒へと変化していく。先端には刃が形成され、柄は硬質化して銀の光沢を放つ。

彼女の手に銀に輝く槍が握られた。

「まずまずですね」

意匠は適当であるが、強度は申し分ない。

「でも、もう少し軽くてもよかったですですね……」

法力で創り出されたといつても、重量は実物の銀製の槍と同じぐ

らにあつた。銀の硬度で紙の質量といった非現実的な物を創り出すのは、法力のコントロールが難しいからだ。

ぐるぐるとバトンのようになに槍を器用に回しながらウォーミングアップをする。そして、

「はっ！」

両手持ちから力いっぱいの突きを繰り出した。法力の効果が上乗せされたその一撃によつて堅牢なドアがいとも容易く破碎する。

「な、何だ！？」

「なつ、貴様！」

部屋の外では彼女の見張りをしていた警備員一人が突然の事態に驚きを露にしていた。

「お勤めご苦労様です。私のせいで退屈な仕事をさせてしまって申し訳ありませんでした」

床に散らばるドアの破片を避けながら、彼女は部屋から廊下へと出た。

「いつまでもここにいるわけにはいかないので、これで失礼します」茫然自失する一人に、目にも止まらぬ突きと払いを放つ。一人は廊下の奥へ、もう一人は部屋の中へと吹っ飛ばした。

ちなみに穂先で突いてはいたが、そこは法術の槍だ、突き刺さらないよう加減はある程度の調整ができる。のだが、

「少し威力が高すぎたような……」

一応大きな怪我がないか確認した後、彼女はエレベーターへと向かつた。

「よかつた、エレベーターはちゃんと動いているようですね」

専用エレベーターに乗つてホテルの一階を目指す。それ以下のフロアに行くには、階段を使うか地下用のエレベーターに乗り換える必要があつた。

限りなく揺れと音のないエレベーターが目的の階に到着したこと

を音で告げた。

「これはこれはお客様。どちらに行かれるのですかな？」

エレベーターの扉が開くと、そこには五人ばかりの警備員が待機していた。四人は扉を囲うような半円状に広がり、残りの一人が彼女に問い合わせる。言葉や態度は懇懃いんせんであつたが、いつでも彼女を取り押さえようとする意志が目に宿っていた。

「仕事が早いですね……」

ドアを破壊してからまだ五分と経っていない。

「大金を扱うカジノで仕事をする上では、これぐらい当然のことです」

不必要的エレベーターの動作で気付かれてしまったようだ。さすがは一流のカジノホテルである。彼女は素直に舌を巻いた。だが、好都合もある。

「オーナーからは丁重に持て成すよう言付かつております。どうかお部屋にお戻りになつて頂けないでしょうか」

眼光から放たれる鋭い視線。ホテルの警備員というよりもマフィアの構成員だ。そこらのゴロツキならば、それだけで竦んでしまうだろう。

だが、彼女も易々と引き下がるわけにはいかない。

「申し訳ないのですが、無理な相談ですね」

手に持つた槍をぐつと握り直す。

「やれやれ、それは残念ですね」

大袈裟な仕草をしてみせるが、全然残念そうな様子ではなかつた。「あなたのような若い女性に力強くという手段を講じたくはなかつたのですが、無理と言われてしまつては致し方ありません」

警備の主任らしき男性は折りたたみ式の鉄鞭を取り出した。殺傷能力は低いとはいえ、下手をすれば骨も折れる。

一撃でももらえば、瞬く間に取り押さえられてしまうだろ。

「この店を荒らす者は、たとえ上客であつても容赦はしませんよ」

鉄鞭を片手に肉迫する警備員。

（速い）

回避は無理だった。

だが、端から避けることは考えていない。

「纏え、《銀の籠手術》！」

ガキン！ という金属同士が衝突する音。

「？」

彼女の右腕へと振り下ろされた鉄鞭が、接点から凹んでいた。警備員はその事実を受け容れられない表情となつて固まる。

「はつ！」

がら空きとなつたその胸へと突きが炸裂した。

「ごはつ」

「失礼しますよ」

倒れる主任の姿に一瞬怯みを見せた残りの警備員のうち一人に払いを叩き込むと、彼女は地下への階段へと進む。

「ま、待て！」

地下へと降りると、広大なカジノ場は一昨日訪れたときとは打って変わつて静けさに包まれていた。照明も所々しか点いておらず、まだまだ開店前とあつて準備する従業員の姿もちらほらとしかいない。

「そいつを捕まえろ！」

新たな巨影が彼女の前に立ちはだかった。

見た覚えのある顔が一つ。サングラスにダークスース姿な巨躯の男性二人だった。彼女の小柄さと比べると、まるで熊と子ウサギである。

「取り押さえろ！」

「「了解した」」

阿吽の呼吸で迫る相手に槍で応戦しようと試みたが、彼女の臂力じょぢょくでは如何せん攻撃に重さが足りない。法力が施されているとはいえる限度はある。

「ふんつ！」

案の定片腕で槍を抑えられてしまった。

「でしたら、」

槍から手を放し、再び触媒に法力を込める。

「「無駄だ」」

二人の大男に捕まえられそうになつた瞬間、彼女の全身が銀色に光り出した。

「少し痛いかもしだせんが、我慢してくださいね」

「「！」」

「打ち抜け、《銀の槍撃術》！」

放出されたのは銀の衝撃 フランクス 彼女を中心として、鋭い光の槍が全方向へと飛び出した。

「「！」」はつ 「「！」」

前後から手を伸ばしてきた大男一人は体の面積が広いせいか槍撃を何本もその身に受ける。そしてその巨躯がピンポン玉のように吹っ飛んだ。

「ふう。さあ、次は誰が相手ですか？」

頼りの二人が呆氣なく倒されたとあって、警備員たちは攻めあぐねている。

しかし、対する彼女にもそれほど余裕があるわけでもなかつた。
(そろそろ姿を見せてほしいんですけどね……)

胸中で弱音を吐く僧侶の少女。

『例外属性』に該当する《銀》の属性は、そこまで適正がない彼女にとつては法力の消費量と身体への負担が激しいのだ。普段仲間のいるときにこの力を使用しないのはそのためだつた。あくまでも戦闘支援を主とする僧侶の自分が真つ先に消耗しては本末転倒だ。

ゆえにこの状況、圧倒的な数で攻め込められれば詰みだ。それを気取られないように余裕顔で再び銀の槍を構える。

「何をやつてゐるんだ！」

張り詰めた空氣の中に、しゃがれた声が轟いた。

「お前、なぜこんな真似をした」

昨日とは違うスーツを着こなしたオーナーが現れた。

「暴挙を働いたことは申し訳ありません。でも、こうでもしないと

あなたが姿を現してくれなかつたので「何、ワシに用があるだと?」

「ええ」

戦いの空氣が去つたところで、彼女は銀槍を消滅させた。

「言つたはずだぞ。仲間の事は諦めると」

「そつではありますん」

「? では何だ」

乱れた呼吸を整え、彼女は用件を告げる。

「私と一つ勝負をしませんか」

「勝負だと……?」

「はい。一昨日と同じく『ドロー・ポーカー』で私と勝負してください」

ゲームで全てが決定するのならば、ゲームで勝負をするまでのことをだ。

「私が勝てばここから出してください。負けたら…………好き勝手にどうぞ」

「そんな一方的な勝負など」

「逃げるのですか?」

槍を担いで大立ち回りをした少女が、次はカードで勝負しろと言つてゐるこの状況。常識のある店ならば警察を呼ばれて終わりだろう。しかし彼女が口火を切る相手はカジノを経営するオーナーだ。

「ふん。今まで言うのなら、乗つてやつてもいいぞ」

彼女の目的が半分達成された。あとは勝負に勝つだけだ。

「しかし解せんな。あの女と同じそれだけの実力を持つてゐるのなら、どうしてそのまま逃げなかつた。どうせこの街に長居はしないのだろう?」

それは当然の感想だ。わざわざ逃げ場のない地下へ赴き、オーナーとギャンブルで勝負などリスクの高い博打でしかない。素早く玄関から出ればそれで話が済むことだ。オーナーも街の外まで捕まえにくることはないだろつ。

だが、そこは勝負事には拘りを持つ彼女。勝負で負けた負債を残したままでは勝負師としてのプライドが許さない。それに、「あなたが言つたことですよ。この街ではゲームによつて全てが決まる」と

何よりも、このオーナーと戦つてみたかったことが大きな理由である。

「はつ、面白い！ 近頃のガキは啖呵たんかの切り方も知らないらしいが、お前はそういうらしいな。さすがはあの女の血が流れているだけはある」

それは彼女にとって最高の褒め言葉だつた。

「では、」

「ああ、勝負は受けろ。しかし、こちらが勝つたときのメリットがない。小娘一人好きにしろと言われたところで、たいした価値にはならん」

それは、ちょっとショックな一言だ。

「ワシが勝つたら、そのロザリオを貰う。それが条件だ」

（え？）

「そ、それは」

「どうした、逃げるのか」

挑発に使つた言葉をそつくりそのまま返されてしまつた。

「いい……でしよう」

元より負ける気などさらさらない。たとえどんな手を使つてもだ。それはオーナーも同じに違ひない。

「では中央のテーブルだ。ワシはいつでも構わんが、お前はその格好のままでいいのか？」

法衣姿でカードゲームに興じるとは人目を気にするところであるが、彼女は気にしない。

「構いません。これが私の戦衣装たいくわうですか」

イカサマ師の技を受け継ぐ二人の対決が、ゼガスの街にて静かに幕を開けた。

夢つて目が覚めた途端に内容が忘却しちゃうよね。僧侶ちゃんが出てきたことは覚えているんだけど、話の流れをまったく……あれ? 何かデジヤブだな。

「……ここ、は?」

気が付けば晴天の下で仰向けに倒れていた。照りつける太陽が眩しい。

どうやらしばらく気絶していたようだ。

「そつか、崩落に巻き込まれて……」

ピラミッドは完全に見る影を失つており、周囲には瓦礫の山が築かれていた。

「みんな、大丈夫?」

気絶していた時間はほんのわずかのようだつた。近くで倒れていた戦士と盗賊が頭を押さえながら立ち上がる。

「ああ、どうにかな」

「四季の花が咲き乱れ、舟が浮かぶ川が見えたような……」

「それあの世じゃないですか!?」

「ん、マホツカは?」

マホツカの声だけ未だに聞こえてこない。

昨日はタライの落下が直撃しても大丈夫だったマホツカのことだ。たとえ岩の塊が降ってきたとしても、とんがり帽子が助けてくれているはずである、と信じたい。

と、わたしは近くでうつ伏せに倒れているマホツカを発見した。

「おーい、マホツカ~」

ペシペシと年季が入つたとんがり帽子を叩く。帽子に巻かれたピンクのリボンは、帽子に比べるとまだ新しい感じだった。変に可愛いところがあるよね。

「ん……ん?」

あ、起きた。

「どう、起きられる?」

「エエは、エエ? ワタシは……つて虫は!」

起きて第一声がそれかい。

「てか何なのよこの残骸の山は? ペリリッシュでせびついたのよ
えー……つと、覚えてないの?」

「《麒麟符》によつて精神力を無理やり活性させた副作用だ。効果
が及んでいたときと、その前後の記憶は、本人はほとんど覚えてい
ない」

ふむふむ、なるほど。

まあ、とりあえずみんな大事に至らなくてよかつた。

「しかし、よく助かったものだな」

偶然なのだろうか、わたし達が落下したスペースには瓦礫が上か
ら降つてきていない。どんだけ悪運が強いんだか。《デス・ハード
》をリアルで演じている気分だよ。

「ボスも倒したし、盗賊の目的も達成できたわけだし、あとは帰る
だけかな」

「勇者、《黄金の爪垢》を忘れているぞ」

「うぐはつ! そういえばそうだった。」

「ふん、端からそんなモノなかつたのよ。このワタシを騙すなんて、
あのカレーオーナータダじや済まさないわよ! !」

確かに、どこかわたし達をからかう様な雰囲気がしていただらね。
それに僧侶ちゃんに用事があつたような感じだつたな。やはりロリ
コン、

「ん? これは……」

瓦礫の山を退けると、赤と橙のツートンカラーの宝箱が出てきた。
もしかして《黄金の爪垢》が入つていたりして?

「えーい、開けちゃえ!」

わたしは思い切つて宝箱を開けた。戦士が何か言つたそつた
けど、ここまできたらもう怖いものなど何もない。宝箱の中にモン

スターが入つていようが、宝箱 자체がモンスターだらうが、ドンヒ
こいや！

「はてさて、最後の宝箱に希望は入つてゐるのか 」

『黄金の爪』を 手に入れた！

「…………」
「爪…………だね」
「爪…………だな」
「爪…………よね」

宝箱の中にはずしと重い、黄金に輝く格闘武器が入つていた。
これはかなりレアなアイテムなのでは、
つて、爪じやねーんだよ！ 爪『垢』がほしーんだよ！ 一字足
りないよー！

「盗賊、いる？」

「いや、遠慮しておく。わたしには愛用の『カイザーファング』があるからな」

チラシと懐から出した物は、どう見ても『鉤手甲』だつた。
まあ、せつかくだから記念に持つて帰るか。

結局『黄金の爪垢』は入手できなかつたわけである。

「これからどうするんだ、勇者」

「とりあえずゼガスに戻ろ。」うつなつたら自力で僧侶ちゃんを奪
い返すしかなー！」

「とんだ骨折り損だつたわね」

本来の目的から考えれば、マホツカの言う通りだ。

でもや、じうして盗賊に出会えたわけだし、けつこう楽しい冒険
だつたでしょ？ 僧侶ちゃんがいなかつたのは残念だけど。

「勇者らしい考え方だな」

「思い出だけじゃ、お腹いっぱいにならないわよ」

「ふつ、わたしもそれなりに有意義な時間を過ごすことができた」

そう言つてもらえると嬉しいな。

そんじゃ、ゼガスへ帰ろう、

の前に、

「ところで盗賊さん。一つお願いがあるんですけど」

「どうした、改まつた言い方などして」

「マホツカに投げた、馬の絵が描かれた符なんんですけど、一枚譲つ

てほしいなって」

「何だ、そんなことか。まだ数枚あるからな、いいぞ
まじで？」よつしゃ！…

『麒麟符』を手に入れた！

やつた、これさえあれば一風変わった僧侶ちゃんのかわいさを

「没収！」

と、横からマホツカに符をふんだくられた。な、なぜ…？

「少し思い出したわ。アンタ、この紙でワタシに変なことさせたで
しょ！」

ぎくつ。

「へ、変なことじやないつて。ちよつと虫を克服してもらつただけ
だよ」

それに実行犯はわたしじやなくつて盗賊なんだけどな。

「怪しいわね……。勇者に持たせておくとロクなことにならなそう
だから、ワタシが責任もつて預かっておくわ」

ええー、そんなー！

「何を遊んでいるんだ、一人とも。早く帰らないと日が暮れてしま
うぞ」

くそー、マホツカのいけずー。

太陽が西へと傾こうとしている中、わたし達はゼガスへの帰路を
歩き始めた。

？？？・合流、そして次の街へ

華やかなネオン、豪奢なビルディング、そして都会の喧騒。僧侶ちゃんを救うため、モンソロよ！わたしは帰ってきたぞ！！といふわけで、ゼガスに戻ってきたわたし達。すっかり夜になつちゃつたよ。

「で、すぐに乗り込むわけ？」

「今の体力では、あまり大胆な行動は取れないぞ」往路に比べれば断然楽な復路だつたけど、炎天下のウォーキングでみんなお疲れのようだ。正面突破の奪還作戦では、捕まつてブタ箱行きになるかもしね。

でも僧侶ちゃんのことを思えば元気百倍！

それに何を隠そう、わたしには秘策があるんだよね。ふつふつふ。「アンタが秘策だなんて、嫌な予感しかしないわね」

マホツカが勘ぐるようなジト目を飛ばしていく。

いやいや、過去を振り返ればマホツカこそ酷い策ばっかだつたじやん。宝箱の爆碎とか、暴走特急羽とか。

「それで、いつたいどのよくな策なんだ？」
よくぞ聞いてくれました。

「ずばり、『ピンチ』を使つんだよ！」

「『ピンチ？』」

そう、歓楽街を一瞬にして停電させてしまつたるベキ兵器のことがだ。あれさえあれば、僧侶ちゃんを確実に救い出せるに違ひない！

「それは、この世に存在するものなのかな？」

うーん、おそらくどつかの科学研究所にあるはず。

「どーやって手に入れるのよ？」

うーん、きっと手を怪我すれば貸してくれるはず。

「停電したところで楽になるとは思えんが」

うーーーん、そこは気合で！

「全部確証がない話じゃなし……」

むむう。やっぱ現実は小説のよつこないかないのだらうか。

「盗賊、何かいい方法ない?」

「そもそもわたしは無関係なのだが……」

「そんなつれないこと言わないでよー。旅は道連れ、世は情けつて云ひぢやん。

何と言つても神に等しい存在である僧侶ちやんを救つためだ。たとえどんな犠牲を払つても

「勇者さーん、戦士さーん、マホツカさーん」

!—

!—、この全てを暖かく抱擁する福音ならぬ福音は!—

「はあ、はあ、皆さん……無事でよかつた」

息せき切らしながらわたし達の前に現れたその人物は、

「そ、そ、そ、そ、そそ僧侶ちやん!—?」

きやーーー! 僧侶ちやんがいるー! なんで何でナンデ、うひょ

!—!

「わふわ。く、苦しいですつて勇者さん

「感激のあまりわたしは僧侶ちやんに抱きついた。

あー、夢でも幻でもない本物の僧侶ちやんだ。んー僧侶ちやんの柔らかさがするー、はー僧侶ちやんの匂いがするー、むー僧侶ちやんの胸の大きさ…………う、うう。

「何で泣いてるのよ。一日ぐら이しか経つてないでしょーが

ううう、ううじやない、そうじやないんだよマホツカ。

それに一日は長いよ。48時間もあれば人種を超えた友情が築けるには十分だからね。

「それより、どうして助かつたんだ? まさか脱走したのか

む! もしや追つ手がすぐそこまで迫つていて? わたしの僧侶ちゃんはもう一度と手放さないぞ! どこからでもかかつてきなさい!

「えー……つと。まあ、その、いろいろとあります……

「僧侶ちやんにしては歯切れの悪い説明だ。でも可愛いから気にしない

「気になるわね」

「別に何だつていいじゃん。じつして僧侶ちやんがいるわけだし「僧侶ちやんのことだ。トムやティックやハリーの手助けを借りずとも、《モーセンの十三戒》のようにあらゆる障害が道を開けてくれたに違いない。

「イカサマ師に勝つほど、心地良いものはないですね」

「何か言った僧侶ちやん?」

「！　い、いえ、何でもないです」

「なぜか慌てふためく僧侶ちやん。でも可愛いからいや

「わ、私のことより、皆さんの方は大丈夫でしたか?」

「うん。いつもいろいろあつたけど、盗賊のおかげでビックリにか事がなきを得たんだ。ね、盗賊　つて？」

僧侶ちやんに盗賊を紹介しようとしたが、旅装を纏つた少女の姿はどこにもなかつた。

「あれ？　盗賊は？」

「盗賊さん……ですか？」

「いつの間にかいなくなつたな

「まるで一ーンジャね」

まるで、じゃなくモノホンなんだけどね。

一時的とはいえ、せっかく仲間になつてくれたのだ。何の一言もなしに立ち去つてしまつとは、ちょっと寂しいな。

でもまあ、盗賊らしいといえばそつかな。

それに、きっとまた会えるから、さよならの言葉はいらないはず。

「そんじゃ、僧侶ちやんも戻ってきたことだし、次の街にいこつかわたし達には大魔王を倒すという重大任務があるんだ。こんな歓樂街にいつまでも滞在しているわけにはいかない。

でも、なーんか重要なことを忘れている、というか忘れない案件

があつたよつたな……、

「そんで、お金はどつすんのよ?」

「さやおす! さうだつたー!」

「あの、これ戦士さんとマホツカさんの負け分は返してもらつたのですが」

「おおつ、かたじけない」

「アンタ見かけによらずやるじやない」

「でもそれだけじゃウイーハ島までは心許ないよね。」

「ふふん。だつたら別のカジノで稼ぎにいくつてのは」

「やめい」「やめとけ」「やめましょ」

今回の件で懲りたでしょ。博打はいい加減頭の中からポイしなさい。

「じゃーどうすんのよ。砂漠に札束は埋まつてないわよ」

「うーん、どうしようかな…………! あ、そういえば、

「この『黄金の爪』を売却しようか。一応純金っぽいから、そこそこいい値段で売れるんじゃないかな?」

「そうだな。誰も装備しないだろ?」

「爪の方はあつたんですね」

「レアなアイテムそうなのに、不憫な使い道ね」

「レアでもミディアムでも、ロースにサーロインは代えられないからね。」

「何はともあれ、こりこりまたみんなで旅ができる。一時はどつなるかと思つたけど。」

さてと、ウイーハ島に行くには、まず目指すのは西海岸の港街だね。

黄金の爪の売却額を想像しながら、わたし達は四人揃つて最後となる歡樂街の夜へと足を踏み出した。

(ア)

友情というよりかは強い仲間意識で結ばれた四人の少女たちが、眠らないゼガスの街へと溶け込んでいった。

その後ろ姿を見送る影が建物の屋上に一つ。

「ふつ、面白い連中だつたな」

自分のことは脇に置いておき、一田に渡つて砂漠のピラミッド攻略を共にした者たちの、率直な感想を漏らす。

顔まで覆つたアースカラーの旅装が風で靡く。

彼女らに『盗賊』と名乗つた、同じく少女の姿がそこにあつた。失われた家宝の武具を探すため、定期的に故郷を離れ世界中へと足を運ぶ忍びの子孫。そんな彼女にとつて他の冒険者と協力した経験は今回が初めてだつた。

「類は友を呼ぶ、か」

何の気兼ねなく会話を楽しむことができたのは、ただ年齢が近いというだけが理由ではないだろう。

「行つたようだな」

一行が見えなくなつたのを確認した後、彼女は懐から今回の旅の目的であり戦果であるか『魔法の石版』を取り出す。

石版には、現代では失われた古代文字で何かを意味する文章が彫られていた。

当然、彼女も石版の文字を解読することはできない。

だが、読めても読めなくとも大差はない。なぜなら、この石版の用途と使用する場所は既に調査済みだからである。

「これさえあれば……」

石版を、まるで我が子を慈しむ親のような表情で見つめる。

彼女が欲する物を手に入れるための唯一と云つていいくほどの手段となる鍵なのだ。落とさぬように大事にふくろに戻した。

だが、いつまでも喜びに浸っている場合ではない。彼女自身も口

に出したとおり、本当に大変なのはこれからなのだ。

「一にも二にも、まずは修行のやり直しだな」

加えて武具や防具の新調、忍具の補充もしなければならない。
今回の旅で己はまだまだ未熟だということを彼女は痛感させられた。不意なトラップに心が乱れ、力量の伴わないモンスターとの遭遇、そして遁術の扱いも完璧ではない。

あの三人がいなければ、ピラミッドの地下でミイラと成り果てていたかもしれない。罠の解除は及第点であるが、戦闘力が不足していた。

「『あの城』に赴くことを考へると、やはり一人では限界があるな……」

とはいっても、余程信用に足る人物でなければ仲間など組めるわけがない。背中を預けられない輩がいては、却つて邪魔になるだけだ。

何より石版の意味することが大きい。同じく石版を所有した者が、金さえ払えば余計な詮索をしない者でなければ、後ろから斬られるかもしねり。

それ程までに、石版によつてもたらされる効果は魅力的なのだ。

「彼女たちならば、あるいは……」

そこまで考へて、続く言葉を捨てた。

「ふつ、いつからこんな甘えた考えを持つようになつたのやら」

端から他力本願など甚だしい。

彼女たちには彼女たちの旅があるはずだ。無用な頼み事を気安くするべきではない。

それに今回は偶々利害が一致しただけであつて、こちらからの一方的な条件で誘うのは、いくらお人好しそうな性格とて、リスクを考慮すれば難色を示すに違ひない。

「結局は、自分が強くなることが先決か」

時間が限られているわけではない。拙速に行動を起こしたところで、取り返しの付かないことになるだけだ。万全の準備と盤石の布

ばんじやく

陣で臨むべきだ。

「急がば回れ、か」

まったく、先人たちは偉大な言葉を遺してくれた。

「修行の件はともかくとして、まずはホームに帰還することだな。はつ」

忍び走りでビルの屋上を駆けながら、より人気の少ない場所を探す。ネオンの多いこの街では、誰が見ているか分からぬ。素早い身のこなしと軽やかな跳躍によつて進む足取りは、まるで空中に橋が掛けられているようだつた。月明かりに生み出されたそのシルエットを見た人物はどれだけいただろう。

（それにしても、『ゆうしゃ』とは、また変わつた名前だつたな）
（どこか懐かしい雰囲気を感じ取れる少女（？）。昨晩彼女（？）と会話していたとき、つい素の自分が出てしまいそうになつたのだ。（はて、どこかで会つたことがあつたのだろうか？）

と、瞬く間にゼガスで最も高い建物の屋上に足を付ける。彼女の姿を見る者は、夜空に輝く万の星と唯の月以外にはいな。

「ふー」

彼女はそこで、顔を覆つっていた旅装と頭巾を取つた。

「また、会えるかな」

素顔が露になると、大人びた固い口調がなくなり、年相応の少女の声となる。

黒い髪と黒い瞳は、彼女の故郷では当たり前の容姿だ。

髪を染めてみたい憧れはあつたが、今の自分の置かれた環境では無理だつた。早くともあと一年待つしかない。

「あの『せんし』つて呼ばれていた人も同じ生まれなのかな」

しかし顔立ちが明らかに違つていた。おそらく両親のどちらかがそうであると予想する。

「あつ、そうだ。もう一つあつたんだ」

幼さの残る顔の少女は、懐からもう一つの戦利品を取り出した。

「このタマゴ、どうしようかな……」

鍵付きの宝箱に入っていた《不思議なタマゴ》だった。わざわざ貴重なアイテムを使ってまで入手したのだ。それ相応の価値がないと釣り合わない。

「でも、食べるわけにもいかないよね……」
割つて黄身と白身が出てくればよいが、薄気味悪い生物が入つていたらどうしようかと思つ。きっとトラウマを覚え、一度と卵を割ることができなくなりそうだ。

それに腐つていなかも心配である。

稀に宝箱の中には新鮮な状態の生魚や野菜が入つていると聞くが、誰が何の目的で入れたのやら。食料に困つていれば別だが、せめて保存食にしてほしいところである。

宝箱とは、何とも奇妙な物である。

「う……ん、一応異臭はないな」

そつと耳元へタマゴを近づける。すると、

「！ 動いた？」

ほんのわずかであるが、生命の胎動を感じた。

「ここで考えても仕方がないか」

タマゴを戻し、帰宅の準備をする。

（それじゃ、また）

眼下にひしめく雜踏の中へと別れを告げる。

彼女の両手が印を結び、口で術を発すると、その姿は夜の闇へと消えていった。

あとがきのよつなもの

カロリーメイトは断然ベジタブル派です、もつ売つてないりしご
ですけど。（なぜだ！？）

はじめまして、作者の加茂正路です。

本作『ガールズトークRPGエピソード2／散歩するペリパニシード
と黄金の爪垢』を読んでくださった方、誠にありがとうございます。
いきなりあとがき（のよつなもの）を開いた方も、とりあえず感謝
の意を表しておきます、本編のネタバレはないので安心を。

本当は前作であるエピソード無印においてあとがき（のよつな
にか）を書こうとしたのですが、思い付いたのが投稿完了後一ヶ月
ぐらい経つた後だったのですつぱり諦め、こつして二作目にて執筆
しました。

さて、普段小説を読むとき作者はまったくといひほどあと
がきを読みません。

ので、「あとがきとは何を書けばいいんだ？」と知識のない頭を
エンストさせながら迷つていたりしています（じゃあ書くなよ！）。
というわけで、偉大なる方たちが書き連ねたあとがきに目を通し
て（主にラノベ）、何を書くのが相応しいのかを研究してきました。
一番印象に残つた内容は、やっぱこれらですよね。

『何も書くことがない……』

『あと ページもあるのか……』

プロの作家もあとがきを書くのに四苦八苦しているよつですね。

ゆえに作者も

つて、それではこのページを開いてくれた読者の皆様に失礼なので、とりあえず書き易かつた近況報告でもどうぞ。

「屋形船の話」

先日、生まれて初めて屋形船なるものに乗つてきました（自慢したかつただけだろ！）。

乗り物酔いする作者なので、船酔いを心配していましたが、乗つてみたら意外と揺れないじゃありませんか！ これならそこそこアルコールを摂取しても大丈夫だぜ（それから一時間後）……うえつ、気持ち悪い……。

停止中の揺れはたいしたことないのですが、航行中や他の船が起こす波に煽られてめっちゃ揺れる……。

酒の酔いと船の揺れのダブルパンチにあえなくノックアウト。屋形船が恐い……。

とはいって、社会人としての尊厳を失うような失態は（ぎりぎり）しませんでしたが。

「ゲームの話」

「ユーモラム」を開始してから約一ヶ月、よつやくにして某ダークなマゾゲーをクリアしました！ はず？

あとがきを執筆中の時点では、まだ墓にこもっている一ートさんだけ（あとラスボス）倒していくのですが、きっと投稿するまでにはクリアしているはず！

前作に比べると回復手段が乏しいせい（草が恋しい）ひたすらビリビリのスピアを装備しての盾チクプレイで進みました（まじへタレだ）。

一番苦労したボスは個人的にはスパイダーな女人ですかね。当時は武器の強化も全然してなく、頭に変なタマゴを被つちゃったし、しかも村から地上へ戻るのも面倒くさい、と三重苦だったので、何

度溶岩炙りの刑に処されたことか……。最終的にはズタ袋で素顔を隠した人に協力してもらつてどうにか撃破に成功。

それ以降に関しては、あまり苦労した覚えはないですね（もちろんどのボスも最低三回は「YOU DIED」しましたけど）。

ノルマはあと3ページ半か……。

「前作の話」

前作エピソード無印にて、大変ありがたいことに感想をいただきました。

本来ならばあの場を持つて返答を書きたかったのですが、如何せん作者は今どきブログはもちろんのこと、啖きも顔本も手を出さないシャイな性格なので、無理でした（すんません）。

というわけなので、この場を使って感想のレスをしてみたりして。

・名前がついていないのが却つて

当初の予定ではメインメンバーについては名前を出さず、その他のキャラに関しては出しても出さなくていいって感じで書いていました。

魔王にいたつては『バガモス』というネタネームまで考えておいて、

ま「フハハハハハ、我が名は魔王バガモス！」

ゆ「バガモス？　どこかマイノリティな味がしそうな名前だな……」

みたいな一幕を考えておいたのですが、気が付いたら誰も名前が出てこなかつたので（ルイージの酒場の人たちは源氏名？）、結局ボツとなりました。

ちなみに作者はドムドム派です。

・DQ3を知つていいか知らないかで～
ですよね……。

特に今作エピソード2ではいろんなネタを投下しそぎたせいで、たぶん誰も分からないだろうな感じになっちゃつてます。正直ガーゴイル戦辺りで「やりすぎたな……」と思つていました。まあ、それ以降も自重はしませんでしたけどね。

次があつたら、たぶんもっと酷くなります。

・まさかあのタイミングでラスボス戦とか
Hピソード無印は元々どこかの小説賞に応募した作品です（お分かりのとおり予選も突破できませんでしたけど）。なので、話を完結させるため（完結してなくね？）あそこで『戦いのとき』のBG Mが早々と流れることになつた次第です。

何はどうあれ、感想ありがとうございました。

おつ、もうページが残つてないですね。
それでは、最後は次回（あるの？）の予告でお別れしたいと思います。

「予告」

ウイーハ島を田指すため、西海岸の港街《サウザンシスコ》へと
やつてきた勇者一行。

そこで出会つたのは、マホツカの友人と、ピラミッドの宝泥棒と、
そしてついに現れた大魔王の手先！
はたして勇者たちはどうなつてしまつのか 、

次回、ガールズトークRPGエピソード3 試練の谷と土の刺客

乞うご期待！

(お細力であるかひつかほ保障できなこのですナビな.....)

2011年12月10日 加茂正路

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1913x/>

ガールズトークRPG エピソード2/散歩するピラミッドと黄金の爪垢
2011年12月25日12時46分発行